
魔法先生と王嘘憑き

さんばい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法先生と王嘘憑き

【Nコード】

N4568T

【作者名】

さんばい

【あらすじ】

神様のミスで殺された主人公が能力をもらってネギまの世界で頑張る話。ハーレムを作りたいんだが・・・これは・・・出来るのか？

1話

目が覚めると目の前に神様がいた

（中略）

とまあ大抵の転生ものの小説のように神様のミスで死んだ俺を好きな世界で能力をつけて生き返らせてくれるらしい。やったー。

現世では大した特長もなく平々凡々な俺だったが好きな世界に行つてさらに能力まであるなんて素晴らしい！ミスって殺してくれてありがとう！

とまあおふぎはこのぐらいにして、能力とやらの制限を訊こう。

——特に制限はない、が、数は3つまでとさせてもらう——

なるほど、なんでもいいけど3つまでなのね、十分十分。

能力つてのはアレだよな、身体能力とかじゃなくて、漫画とかの妄想みたいなアレってことでいいんだよな？

——どのようなものでも問題ない——

なるほど、なんか投げやりな気もするけどまあなんでもいいならなんでもいいか。

ていうかさっきからその喋り方うざくてムカツクんだが。普通に括弧付けてしゃべれ。

まあいいや、能力か。漫画みたいな能力にするのは当然として、やっぱりよく知ってる好きな漫画の能力がいいよな。ということで好きな漫画の中でもバトルとか能力とかがあったものを頭に挙げる。ワンピース、ナルト、禁書目録、fate、とまあ代表的なのがいくつか浮かぶが、やっぱり俺が一番好きな漫画ということであめだかボックスを選ぼう。

そしてそのなかでも俺の好きなキャラNo. 1とNo. 2、球磨川禊と都城王土の能力。アレが欲しい。

もちろん「脚本作り」とか「理不尽な重税」の方じゃないぞ。理不尽な重税ならまだ使い道はあるが脚本作りにいたっては意味不明だ。貰う能力のうち2つは「大嘘憑き」と「言葉の重み」だ。決定。

そして最後の能力もめだかボックスから選ぼう。まあ無難に主人公の「完成」でいいか、便利そうだし。

というわけで「大嘘憑き」と「言葉の重み」と「完成」で頼む。

——了解した。次は行く世界を選ぶがいい——

ああ、それも考えたんだよ。色々。

最初に思い浮かべたのはやっぱり一番好きなめだかボックスだが、めだかの能力貰ってめだかの世界に行くのもなあ、ってことでパス。ワンピースとかナルトとかは女の子が可愛くない。パス。

俺の能力以上にチートなやつがいそうな世界、禁書目録とか（一方さんに言葉の重みって効くのか？）fateとか（これまた英雄王に言葉の重みとか効かなそう）もパス。

とすると俺の能力がそれなりに活かせるような世界で女の子が可愛い世界。

・・・ネギまじゃね？

あの世界のネギ君のクラスに居る女の子って大体の需要を満たしてるよね。あのクラスがあれば95%の男は満足できると思うんだ。ロリ、ツンデレ、お嬢様、お姉さま、オタク少女、ロボ、等々。

しかもなんか敵があんま強そうじゃないしな。言葉の重み使ってひれ伏せて言えば皆ひれ伏しそう。一番の強敵そうなエヴァちゃんも大嘘憑きで登校地獄をなかった事にすれば嫌われるってことはないでしょ。

決まりだな。

というわけでネギまの世界でお願いします。

——了解した、達者で暮らせ——

おう、神様もありがとなー。最後まで喋り方はウザかったが感謝はしてるぞー。

とまあそんな感じで目の前のびっくりマンに出てきた神様みたいなやつがポポイと杖を振って出てきた扉にレッツゴー。
よーし、ハーレムつくるぞー。

そして俺がふと目を覚ますと、周りは森だった。

えー、森って……。ここは麻帆良じゃ……。ないよなあ？

そういえば原作のいつのどこって指定してねえ！普通に原作開始と同時にだと思ってたけどそしたらどうやって介入するんだよ！

いやそれだけならまだいい、もしかしたら大戦の頃かも……。ナギさんとかアルさんとかあのへんはよく知らんが関わるつもりはねーぞ。英雄はさすがにこわい。でももしそのへんの時代だったらどうしよう……。

あれ、そういえば二次創作だとよく原作開始と同時に、大戦時、以外にももう一つ、600年前のエヴァちゃんが吸血鬼になった頃、つてのもあったよな？ おいおい、エヴァちゃんと遊べるのはいいいけど

能力の中に不老不死にしてなんてものを入れてないぞ。出会って数十年で俺だけ死んじゃうじゃねえかよ。
って考えてても仕方ないな。とりあえず今がいつでどこなのかを調べないと。

「では、そろそろ参りましょう」

考え事をしてるとふと自分の右後から声をかけられた。
振り向くとそこには角の生えたお化けみたいなやつが膝をついていた。

「うわ！誰だお前！」

さすがネギま、なんでもありか。

「・・・何を言っておられるのですか？」

「あ、いや、すまない。ちょっと混乱してしまつて。悪いがここがどこで俺たちが何をしているのか教えてくれませんか？」

明らかに目下の人（？）のようなので強気に命令しようかと思ったが見た目が明らかに化物でこわいので後半弱気になってしまった。

「はあ。私達はこれから非常に屈辱なことではありますが人間に遣われこれより麓の村へ強襲をするところであります」

「なんのために？」

「かの英雄、ナギ・スプリングフィールドの息子、ネギ・スプリングフィールドを抹殺するためにです」

・・・は？

言われて自分の体を確認・・・顔は見えないが手を見るだけでわかる。おっさんじゃん。

「悪いんだが、私の名前を言ってもらえるかな？」

無駄だと思いつつも最後の悪あがき。

「はい、ヴィルヘルム・ヨーゼフ・フォン・ヘルマン様でございます」

丁寧に応えてくれるすぐ脇の人の言葉を聞いて、ああ、600年前でも老化をなかった事にすればずっとエヴァちゃんとキャツキャウフフしながら二人で過ごせるじゃん・・・と現実逃避していた。

1話（後書き）

いつかめだかボックスのクロスオーバーを書こうと思っていたんですが、能力だけになってしまいました。

展開はあまり原作通りにやるつもりはないです。ご了承ください。

でも無理そうだし・・・ネギ君殺されたら女子中学生と出会えないし・・・。

あんまり気は進まないけどこいつ敵だしいいよね？悪魔の中でもヘルマンとかなら名前あるけどこいつはただのモブみたいだし、ていうかヘルマン俺だし。

「『目の前のこいつをなかった事にする』」

・・・おお。一瞬で消えたよ。ちよつとこれはひどすぎるな。球磨川さんが下手したら地球ごとなかった事にしちゃうとか言ってたのは間違いじゃねえな。出来ちゃうよ、多分。まあでも邪魔者もいなくなったことだしネギ君のところにレッツゴー。

村に着きました。早速近くの人に話しかけてみます。

「すいませーん」

「おや、見ない方ですね。旅の人ですか？」

「はい、そんなところで。ところで、この村にネギ・スプリングフィールドという人がいると聞いたんですが会わせてくれませんか？」

目の前の人の気配が変わる。あれ、なんか俺やっちった？

「あんた、ネギ君に何の用だい？」

「え、いやただ仲良くなりたいたいと思ひまして・・・」

「へえ、英雄の息子と仲良く、ね」

ああなるほど！確かに見たこともないおっさんが英雄の息子に会いたいなんて言ったら怪しまれるよね！・・・どうしよう。

「あ、ドイルさんこんにちわー。あれ、その隣りの方はどなたですか？」

「ネ、ネギ君！？こっちにきちゃ『ちよっと黙っててください』・・・！？」

ネギ君の方からこっちの方に来てくれたぞー、ラッキー。うるさい村人Aさんには黙っててもらって、ネギ君の方に近づく。

「やあネギ君こんにちわ。私の名前は・・・」

俺の名前なんだ？一応一人称はおっさんである外見を考えて私にしておいたけど・・・名前・・・。前世の名前はあんま使いたくないし、ていうか日本名とかこの外見に全然合わないだろうし。ヘルマンって名乗るのもなー、悪魔って知ってるやつは知ってそうだし。

「まあ名前なんてどうでもいいね。私はネギ君と仲良くなりたいんだ。一緒に遊ぼう？」

「え、でも・・・あの、ドイルさんが・・・」

あれー？ちよっと怯えられちゃってるぞー。目の前でドイルさんとやらが必死な表情で口パクしてるからかな？よしわかった。

『ドイルさんはいなかったことに』

「え！？ドイルさん！？」

「ほら、これでもう怖くないよ。さあ、一緒に遊ぼう！」

にこやかスマイルを浮かべながらネギ君の肩にポンと手を乗せる。

「やだっ・・・離してっ！離してください！ Doyleさん・・・そんな、誰か、助けて・・・」

「ネギ君。どうしてそんなに震えているんだい？私は君の友達さ。なにか悩みがあるなら相談にのるよ」

「あなた、一体何をしたんですか・・・。Doyleさん、Doyleさんをどうしたんですか！」

そういえば今思い出したんだが悪魔襲撃の日ってナギさんにネギ君助けられてなかったっけ。やばい、それまでに仲良くなっとかないと俺を有害な悪魔と勘違いしたナギさんにぶち殺されてしまう。

でも俺の手から必死に逃げようともがいてるネギ君を見ると仲良くなれる気がしない。何でかわからんが嫌われてるっばいし。どうしようかなあ・・・。

あ、またしてもひらめいた。ネギ君が俺を怪しいとかこわいとか思うならそう思っていることをなかった事にすればいいんじゃない？

原作の球磨川君が相手の心に対してオールフィクションを使ってるそこはなかったと思うけど、一応神様からもらった能力だしそれくらいできてもいいよね？

ていうか球磨川君の場合怪しいとか怖いとか思わせてなんぼなんだろうし、マイナスだから。

というわけで

『ネギ君が俺に対して抱くマイナスな感情をすべてなかった事に』

・・・できた？できたかな？

「ネギ君、調子はどうだい？」

恐る恐る声をかけてみる。暴れてるのは収まったけど、どうだ？。

「なにがですか？そんなことよりおじさん！向こうにきれいな川があるんですよ！一緒にあそびましょう！」

大・成・功！笑顔満点になったネギ君に手を引かれて行った川で2, 3時間遊ぶはめになりました。まあ自分で誘ったんだからしょうがないけどこの年になって川遊びは辛いぜ・・・。

3話

ネギ君と川遊びしてる最中に俺のことは村の皆には内緒ってことを言っておいた。

どうせもうすぐ魔法学校に入るんだろうしその時にまた合流して仮契約なり何なりすればいいやと思ったからだ。

というわけで今から俺はしばらく暇になる。どっか魔法学校の近くの村でしばらく静かに暮らそうと思ってるんだが、とりあえず覚えなきゃいけないことは若返りの魔法だな。このままの見た目じゃハーレムなんて夢のまた夢だ。

こっちにはめだかちゃんの異常性である『完成』があるから若返りの魔法の才能がちよっとでもある人に少し教わるだけで大丈夫なはずなんだが、そんな魔法を研究してるやつっているのかな？

そんなことを考えながら森の中をのんびり歩いてたからだろうか、そいつが来ていたことに俺は気づけなかった。

「おいてめえ、何者だ」

だから突然そう声をかけられて少し驚いてしまった。まさかこんな森の中を歩いている奴なんているとは思わなかったからな。

んでもってそいつの顔を見てその数倍は驚いた。だがまあ考えてみりゃこいつが此処に来るのは当然だ。メガロメセンブリア元老院が召喚した悪魔による襲撃は本来今日行われていたはずなんだから。そしてそこからネギ君を助けに来るためにそいつが来るのは原作通りだ。何もおかしくはない。

問題があるとすれば、その襲撃が俺の一言で中止になってしまったことだ。そして本来なら俺は村を襲撃するはずの存在だということだ。

さてここで問題です。今日襲撃される村がまだ無事で、未来の襲撃

犯がその村の辺りをうろついてたらそれを見た人はどう思うでしょう？

「はっ、もしかしたら間に合わねえかと思ったが、まだ大丈夫だったようだな。よう悪魔野郎、あの村は襲わせねえぞ。とっとと消えやがれ」

まあ今から襲撃するんだと思いますよね。

こっちに杖を向けながら睨みつけてくる「サウザンド・マスター」ナギ・スプリングフィールド。ネギ君のお父さん。伝説の英雄。そしてなにより、才能の塊。

こいつは好都合だ。あんだだけ天才天才言われてたんだ。若返りの魔法の才能ぐらいあってもおかしくねえだろ。

ちょこっと戦って、魔法の才能をゲットできたら帰ろう。

「いえいえ、私も帰りたいのはやまやまなんですがね。その村にいる子どもを1匹殺さないと帰れないのですよ。まあその程度ならすぐ済むでしょうから待っていてください」

挑発しておく。けど前の世界でも口喧嘩なんてしたことがないからどう挑発すればいいかわからんな。

「てめえ！だったら俺が力づくでけしてやるよ！」

あれ？思いの外釣れたぞ。楽でいいや。

「『千の雷』！！」

おい、それしよっぱなからぶつけるような魔法だったか？結構強めの魔法じゃなかったか？

まあ雷なんてもん避けれるわけもないので直撃。けどその瞬間にイツツオールフィクシヨン。

「なっ！？無傷だと・・・てめえ、何しやがった！」

攻撃を食らったことをなかった事にしただけですよ。まあそんなことをわざわざ教えてやるつもりはないけどな。・・・教えたところで特に対処できるとも思えないが。

ということでそんなこんなで数十分たちました。無抵抗の私相手に何度も何度も高威力呪文をうちこんで、たまに肉弾戦でぶん殴ってきたりして、まあそれはそれは有意義な時間を過ごせました。『完成』的な意味で。ていうかこいつ肉弾戦の才能もあるんだな。そりゃそうか。

まあもう大体魔法の才能はもらえたので終わりにしよう。

「千の雷！！」

どかーん。

「ぐあー、やられたー！こ、こうさんです！もうしないからゆるしてー」

切りの良いタイミングでまたも最強呪文を打ち込んでくれたのでギブアップしておく。勿論身体は無傷ですよ、なかった事にしないと痛いですし。

「あ！？ふざけてんのかてめえ！傷ひとつねえくせによ！」

「いやいや、私のこの回復魔法にも限度がありました。次食らうとそろそろヤバイですよ」

嘘だけど。

「じゃあこれでめえをぶっ倒せるってわけだ！くらいやがれ、千の雷！」

おい、攻撃してくんなよ。そろそろめんどくさくなってきたのでこっちも攻撃に移ろう。せーの、

「『平伏せ』」

「がっ！？なんだ、これは！？」

ひゃっはー、やっぱ都城先輩の言葉の重みって言ったらこれだよな。あのサウザンド・マスターにさえ通じるなんて、やっぱり原作より強化されてんのか？

ということであ俺に対してすごい勢いで跪いたナギさんの上に座って少し考える。

こいつがここにこなかったことにしてもいいけど、でもそれだとまた原作の流れが変わっちゃうよな。それともこいつがここで俺と会った時点でもうそういうの気にしなくてもいいのか？ていうかこいつちゃんとネギ君に杖渡すんだろうな。

「どきやがれええええええ！てめええええ！」

なんか下で叫び声がするが無視。原作だと善吉君でも跳ね返せてたのにナギさんが無理ってことはもう間違い無く強化されてるんだろうな。あー早く麻帆良いきてー。

「あ、思いついた」

「なにいつてんだお前？」

あ、ついつい声に出してしまった。さっきまで叫んでたくせに、こっちがちよつと独り言言っただけで突っ込みいれてくるとがマジ意地が悪いなこいつ。

まあそんなことより、こいつ処分して杖奪って、あとでネギ君に杖を渡すなり、それがまずそうなら適当に売るなりすればいいんじゃない？

こいつが此処に来たことを知ってる人はいるかも知れないけど俺と会ったことを知ってる人はいないだろうし。まさか英雄がタイマンで負けて殺されるとか思わないだろうし。そもそも世間的にはナギって既に死んでるはずだからあまり公には出来ないだろうし。

あれ？本当にこいつ殺しても何の問題もないじゃん。

そうと決まれば善は急げだ。早速『大嘘憑き』で・・・いや、やめたほうがいいな。

今まで『いなかったこと』にしてきた奴らは皆モブだったからどうでもいいけどこいつはナギだ、英雄だ、メインキャラだ。『いなかったこと』の範囲がどれぐらいかまだはつきりとはわからないが、もしかするとなんかまずい影響があるかもしれない。『大嘘憑き』を使うのはやめておこう。

でもただ死ぬだけだったら普通に交通事故とかで死ぬこともあるし何の問題もないよな？

「それじゃあナギさん」

「何だよ。さっさと降りろ」

言われたとおり降りてあげる。ついでに土下座状態を維持させている『言葉の重み』も解除しておこう。けど立つ気配が全然ないな。
・・・こいつもしかしてどんなに動いても起き上がれないからって逃

げるの諦めてないか？まあ楽でいいけど。
跪いてるナギさんの目線に合わせてしゃがみこんで、せーの、

「『自害しろ』」

物言わぬ肉片となったナギさんはきちんと埋めて供養してあげましたよ？流石に野ざらしは可哀想なんで。

さーて、それじゃちょっと移動して魔法学校付近の村にでも住まわせてもらうか。それと並行して若返りの魔法の練習もしないとな。
幸先良く魔法発動体も、まああまり人前じゃ使わないほうがいいかもだけど、ゲットしたし、がんばるぞー。

4話

この世界にきてから数ヶ月がたった。俺は今魔法学校の近くの村で暮らしている。

報告すべきこととしては、まず若返りの魔法についてだ。

さすがサウザンドマスターの魔法の才能、若返りの魔法もすぐに実用可能レベルになった。

効果はきっかり24時間、それより早く解除もできないし、延長するために重ねがけもできない。まあ解けた直後にまたかけ直すことはできるけどな。

本来であれば1、2時間ぐらいしか効果のない魔法のはずなんだが、才能があるからって言うのと元の体が悪魔だから魔力の質も量も人間とは違うという理由で24時間という桁違いな数字になっているのだと思う。あくまで予想だ。

それと何故か若返ったときの姿がまんま球磨川さんだった。

・・・いや、おかしいだら・・・。

次はこの魔法発動体についてだ。最初はネギ君にあげようと思ってたんだけど、この杖って非常に魔法発動体として優秀なんだよな。もしかしたらあの若返りの魔法もこれのおかげなんじゃないかってぐらい。さすがサウザンドマスターから譲り受けた杖だ。

ということなのでもう少し持っていることにする。それに下手に杖あげちゃうとネギ君度がすぎるほどのファザコンになっちゃうしね。あとこの杖はやっぱり人前で使わないほうがいいみたいだ。普段魔法を使うときは人目のない場所を選んでやっているがそれでもたまに見つかる。殆どの人はそのまま素通りしてくれるんだけど、1割ぐらいの人にはこの杖がナギさんのものだと思われてしまった。まあそいつらには『いなかったこと』になってもらったけど。

ネギ君はやっぱり子供だから持っても不審がられなかったんだろ

うなー。俺が持ってたなら明らかに怪しいよなー。

3つ目は、目に魔力を込めてよく見ればその人のいいところが見えるようになった。

もつとも、いいところ〓その人から『完成』を使ってゲット出来る才能、のことなんだけどね。

そのおかげで村に来た大道芸人からジャグリングの才能がもらえた。
・・・役に立つのか、これ？

そして最後に、なんと明日、ネギ君が魔法学校に転入します！

ネギ君と魔法学校で合流するために数ヶ月世話になった村から出る。もう二度と来る予定もないので、適当な民家数軒から金目の物を根こそぎ奪い取った後その記憶を『なかったこと』にしておく。今までは村の飲み屋でバイトしてたけどもうできないからね。資金調達は大切だ。

夜のうちに魔法学校近くまで移動、そのまま待機。

時刻が午前1時になった。そしてここで若返りの魔法をかけておく。これで24時間の間俺は見た目も身体も球磨川さんだ。

今後もだいたい午前1時くらいに若返りの魔法をかけ続けて、老人モードが誰にも見られないように努めよう。

んじゃ明日も早いし、おやすみー。

おはようございます、朝になりました。

そろそろネギ君が来るそうなので・・・お、きたきた。何でかわからんが一人で歩いてる、こりゃ好都合だ。

「やあネギ君、久しぶりだね」

「え？どなたですか？」

忘れられてた……。たしかに一日しか会ってなかったけど割とシヨク……。

「いや、僕だよ、僕。あの、えっと……」

よく考えたら俺ネギ君に名前乗ってない。

ちなみに一人称は見た目に合わせている。老人の時には私、球磨川さんの時には僕、心のなかでは俺。球磨川さんの時には俺っていてもいいのかもしれないけど、めだかボックスファンとしてどうしても許せない。なので僕で通す。

「ほら、ちょっと前に川で遊んであげた……」

「おじさんのことですか？いや、おじさんはもっとおじさんでしたよ」

あ、なるほど、見た目が違うからね。でも、とするとどうやって説明したら……。

ああもう、めんどくさい！

「『僕を疑う心をなかった事に』」

これでいいよもう。

「とにかく、僕はあの時のおじさんなんだ。魔法学校に入学するときにまた会いに来るって言ったろ？約束を守りに来たんだよ」

「え！ほんとにおじさんなんですか！わーい！お久しぶりです！」

急に態度を変えて俺の胸に飛び込んでくるネギ君。もしこれを見る人がいたら明らかに不自然だが幸いにして今はだれもない。

「ああネギ君。僕は今おじさんじゃないだろ？だからそう呼ぶのはやめてくれないかな？」

「わかりました。じゃあなんて呼べばいいですか？」

ふむ、ヘルマンを名乗るのはアレだし、前世の名前もちょっと嫌だし、もうこれでいいや。

「僕のことは禊と呼んでくれ」

「ミソギですか？わかりました」

まあ見た目も能力も同じだし問題ないだろ。

そのままネギ君と会話しながら学校長のところへ。

「失礼します」

「おおネギ君か、入りなさい」

ネギ君と一緒に学校長室に入ると、学校長から不審げな目で見た。

「おや君は一体・・・」

「『僕を疑問に思うことをなかった事に』」

正直この技卑怯すぎると思う。麻帆良にはいれたら心を縛る系は封印しようかな。

その後、出会う先生全員全員に同じようなことをやっていくうちにいつしか魔法学校公認のネギ君のお兄さんの立場となることに成功した。部屋はネギ君と共同、さらに売店で手伝いをすることを条件にここにいていいんだそうだ。

部屋が一緒なのは困るがネギ君は俺に対してマイナスの感情を持つことも疑うこともできない。仮に若返りの魔法が解けた姿を見られなくても問題ないだろう。最悪記憶をなかった事にすればいいだけだし。

こうして、俺とネギ君の魔法学校での生活が始まった。

4話（後書き）

今回は自分でもひどすぎると思います。

次回でとつと魔法学校編を終わらせて麻帆良に行ってもらおうと思っています。

5話

魔法学校にネギ君が入学してからもうすぐ5年が経とうとしている。俺としてはとっとと麻帆良に行ってもらいたかったが、下手なこととして修行地が麻帆良以外に変わってしまったては困るのでおとなしくしていた。

特にこの5年間で報告すべきようなことはない。俺自身も成長なんかしていないし、誰にもフラグなんか立たなかった。

アーニャちゃんはネギ君一筋だし、ネカネさんはネギ君が帰省した時にしか会わないからそこまで親密にもなれなかった。まあ外見年齢が近いからよく話しかけてはくれたけど、それだけだ。

学校の女の子たちにも結構ちょっかいかけてたんだけど仲良くなれたのは4、5人だ。その子たちも将来有望だが、今はまだ9歳から11歳。さすがに青い果実と言わざるをえない。

・・・え？女子中学生も十分青い果実だって？さてなんのことやら。

「ミソギさーん！そろそろ時間ですよー！一緒に行きましょうー！」

「ああわかったよネギ君」

そして今日は卒業前に同期皆で集まってパーティでもしようということになっている。

俺も最後に子供たちにお別れを言うべくそれに参加することにした。皆売店をよく利用するため割と仲の良い子がいたりするのだ。

部屋の外に出るとネギ君とアーニャちゃんが待っていた。

「もしかしてお邪魔だったかい？」

「そ、そんなことないわよ！何言ってるの、もう！」

アーニャちゃんはからかうとすぐ赤くなって面白いなあ。

「？邪魔って、なんのこと？」

「よし、ネギ君に教えてあげよう。アーニャちゃんはネギ君と二人で「わー！わー！わー！わー！」ちょ、痛い痛い。たんまたんま、もう言わないから」

照れ隠しにボコスカ殴るのはやめてもらいたい。身長差の関係上、拳が股間周辺に飛んできて非常に怖いんだ。

「・・・いや、さすがに子供たちとじゃれてる時に大嘘憑きだの言葉の重みだのは使わないよ？事実この学校にいる間は俺の存在が怪しまれたときにそれを『なかった事』にする時以外は使ってないし。」

「もう、早く行くわよミソギさん。今日の参加者はあなたを除いて皆卒業生なんだから、ミソギさんは皆を一人でお祝いしなきゃいけないのよ？」

「ああ、ちゃんとプレゼントも用意したから楽しみにしててよ」

「ホントですか！楽しみです！」

そんな会話をしながら大食堂に向かう。今日は特別に貸し切らせてもらってるのだ。

「みんなー、ミソギさん連れてきたよー。これで全員かな？」

「おっ、ミソギ！やっときたか！」

「ネギ君おつかれー、はい、ドクペあげるー」

「あ、アーニャちゃん。これ、こないだ借りた本、まだ返してなかったから返すね」

それぞれ仲の良い子たちが出迎えてくれた。こういう光景を見るのも今日が最後なのか、それはそれで少しさみしいな。報告するようなことはなかったが普通に楽しい日々を送ることはできた。

最初は早く過ぎろと思ってた魔法学校での生活だけど、今にして思えばもう少しあっても良かったかもしれないな。

そんなこんなで数時間の卒業前夜パーティも終わり、翌日、卒業式になった。

次の修行場が書かれている卒業証書をもらったネギ君を待っている間、近くに来たネカネさんとだべる。

「じゃあミソギ君もネギと一緒に修行場に行こうと思ってるの？」
「ああ、それしかやることもないしね」

ちなみに大嘘憑きのおかげで俺がネギ君と一緒にいることを疑問に思うやつはいない。

「でも、ミソギ君なら購買のところで雇ってもらえるんじゃないの？」

「一生あんな仕事を続けるのは御免だね。ネギ君の修行地がどこだかは知らないけど、もうここに5年もいたんだ。そろそろ僕も自由な活動がしたくてね」

主にハーレム作成的な意味で。

そういえばこいつらの中で俺はどんな設定なんだろう。俺とネギ君が一緒にいることを疑問に思わないのはいいけどこいつらの中ではなんて理由付けされてるんだろうな。それとも理由なしの無条件なのかな。

「あ、ネカネおねーちゃん、ミソギさーん」

とと、ネギ君が来たようだ。すぐ横にアーニャちゃんもいるな。

「やあネギ君、アーニャちゃんも、卒業おめでとう」

「ネギ、アーニャ、卒業おめでとう」

「「ありがとう！」」

「さて、それで君たちの修行地はどこだったんだい？」

「私のはロンドンで占い師をせよ、だって」

「僕のは・・・日本の学校で先生をやれ、だって」

「せ、先生!？」

ああ、とかいいながらくらくたと倒れそうになるネカネさん。

「大丈夫だよ、僕もついて行くから。できる限りサポートするさ、修行の妨げにならない程度でね」

「まあ、ミソギ君がいるなら大丈夫かしら・・・？」

俺のフォローでなんとか大事には至らなかった。

まったくこの人はネギ君に対して過保護すぎるんだよな。俺が側にいるってことで最近は沈静化れてきたけど。

「それじゃあ早速日本に行く準備をしたほうがいいね」

「え?でも修行ってまだ先じゃないんですか？」

「何を言ってるんだネギ君。いきなり行って先生なんて無理に決まってるだろう?早めに現地へ行き、雰囲気を感じ、空気に慣れてからじゃないと先生なんてとてもできないさ」

「そ、そうなんですか。わかりました、早速部屋に戻って準備しますね!」

うむ、ネギ君は素直でいいなあ。原作通りだところから更に数ヶ月

は待たなきゃいけないからな。

原作を見てれば事前の準備なんてろくにしていなかったのは歴然だ。だったらとっとと麻帆良に向かってるかまわないだろう？

「も、もうちょつとゆつくりさせてもいいんじゃないかしら？」

「なにいつてんだよネカネさん。理由はさっきも言っただろ？ネギ君の為を思うなら早く行かせてあげるべきなんだ。大丈夫、手紙とかは書かせるからさ」

まあ気持ちは分かるけど。やっぱり身近な人との別れはあとに回したいって思うだろうからね。

「ネギもミソギ君もいなくなるなんて、寂しくなるわね」

「いや、そこはアーニヤちゃんも入れてあげようよ」

「あ」

素で忘れんなよ。アーニヤちゃんも自分の準備のために部屋に戻っていたのが幸いして聞かれてなかったけど。

「よし、僕は校長にネギ君の修行先について話を聞いてくるよ。それじゃあまた今度、日本に行く前にもう一回ぐらい会おうぜ」

「そうね、じゃあ私はネギの様子を見てくるわ」

学校長との話なんてつまらないものはカット。どうせおっさんと押し問答して最終的には大嘘憑きで万事解決するだけだ。

つーことであれから2週間後、ネカネさんとアーニヤちゃん、その他の元クラスメイトに見送られながら俺とネギ君は日本に飛び立った。いざ、麻帆良学園へ！

5話（後書き）

魔法学校での生活は機会があれば番外的な感じで書いてみたいんですが、まさしく誰得なので頭の中で妄想するだけに留めます。

6話

・・・まずい事態になった。

今日本に到着したばかり、日本時間にして午前9時だ。だが、なんということだ！

若返りの魔法が解けるまで後1時間しかないじゃないか！！

時差とか完全に忘れてたよ。地球が丸いことを今ほど憎んだことはないね。

今までの生活習慣に戻すためには15時間ほど老人の状態で過ごさなきゃならないぞ。イギリスにいた頃ならともかく日本に来たばかりでそんな長時間姿が見えないのは不自然だし・・・。

「ここから電車でもう2時間くらいで着くようですね」

地図片手にネギ君が言う。

仕方ない、とりあえず魔法が切れるぎりぎりまでトイレにでも行っかけて直そう。うーん、でも明日以降はどうするか・・・。

そんなこんなで麻帆良学園に到着。勿論途中で若返りの魔法はかけ直した。

さて、このあたりに迎えの人がいるらしいんだけど・・・。

「やあネギ君にミソギ君、久しぶりだね」

「あ、タカミチ！」

「ああ高畑さん。迎えの人ってあなたでしたか」

やってきたのは麻帆良学園教諭にして最強クラスの魔法使い、高畑・T・タカミチさん。

この人はネギ君が魔法学校にいた頃にわざわざ挨拶に来てくれた。
最初是不審がられたが、『疑う気持ちをなかったことに』してあげ
たらすぐに俺のことを信頼してくれた。

「ちゃんと迷わずにこれたようだね」

「ていうか今日平日なんです、高畑さん仕事は？」

「え？あ、あはははは。・・・とりあえず学園長の所まで行こうか」

誤魔化しやがった。原作見てもいい加減な教師だとは思ってたが
ここまでとは。いや、いい加減なのはこの学校自体か？

高畑に連れられて学園長のところまで行く。てか学園長は何で女子
中学エリアに居るんだよ。

「失礼します、ネギ君たちを連れてきました」

「おお、タカミチ君か。入りなさい」

言われるがまま室内へ。まあお約束通り突っ込んでおくか、後頭部
長っ！

「よく来たのネギ君。それにミソギ君も、タカミチ君から話は聞い
ているよ。わしが麻帆良学園の学園長、近衛近右衛門じゃ」

「はい！初めまして！」

「高畑さんがなんて伝えてるのか気になりますが・・・まあ、初め
まして」

まあ俺に対して疑いの念も悪感情も持てないから悪いことは伝えて
ないってのは分かりきってるけど。

「ほっほっほ、何、悪いことは聞いておらんよ。ネギ君の良いお兄
さんになってくれるとか」

「ああ、安心しました」

「では学園長、ネギ君の今後の予定についてですが」

「おお、そうじゃったの。ネギ君がこの時期に来たのは、麻帆良に慣れるためだそうじゃのう」

「はい、そうです」

「それじゃあ、いまから一カ月半ほど麻帆良で生活してもらって、その間は教師の仕事の裏方に回ってもらおうかの。その後、1月から始まる新学期に新しくクラスを持って先生としてやってもらおうと思ってるんじゃが」

「はい、わかりました」

「僕もそれがいいと思いますよ」

まあ妥当だろ。その間に俺は出来る限り女の子とお知り合いになっておきたいものだ。

「それでその間の生活スペースなんじゃが、ネギ君とミソギ君は一緒に一緒にした方がいいのかの？」

「べつにどっちでも「一緒にいいです！」」

・・・今割り込んだのはネギ君だぜ？ いやー、なるべく信頼を得ようと行動してたつもりだけどまさかここまで依存されるとはなー。

「それじゃあ教師用の寮でいいかの？ 二人部屋に一緒に住んでもらおうと思うんじゃが」

「わかりました」

ということと寮の住所を教えてもらった。俺がいたせいで女子寮に入るイベントなくなっちゃったのかな？ ネギ君が女子寮にいてくれれば自然に女子寮に入る口実ができたと言うのに・・・。

「今日と明日は好きに過ごしてくれていいぞ。明後日の今くらいの時間にここにきておくれ」

「はい、じゃあ今日はこれで失礼しますね」

「行きましようミソギさん！麻帆良ってすごい大きいですよ！僕こんな大きい街初めてです！」

「いや、まだ学園長の前だからもう少し落ち着いてね」

「え、あ・・・す、すいません・・・」

「ほっほっほ、子供は元気な方がいいんじゃないよ。よかったらタカミチ君も一緒に連れて行ってみてはどうかの、案内役にはちようどいいと思うぞい」

「わあ、タカミチも一緒!?!」

「ああ、僕も一緒に行こうかな。街案内ぐらいはできるよ」

「じゃあ三人で行きましようか。それでは学園長、また二日後に」

適当に挨拶をして部屋から出る。いや、また変に警戒させないために『大嘘憑き』を使わなきゃ駄目かと思ってたけど高畑のおかげでその手間が省けたわ。

明後日のお昼まで暇だからな。今日はともかく明日はネギ君と別れて誰かにフラグ立てに行こうかな。勿論標的は俺が原作でもトップクラスに好きだった・・・ムフフフフ。

「それでは学園長、また二日後に」

ネギ君とタカミチ君、それにミソギ君が部屋から退出した。数分待っても戻ってくる気配がないことを確認して近右衛門は息をつく。

実際に会ったというタカミチ君に聞いても彼を肯定することしか言わず、彼の素性について調べてみても、まるでネギ君と出会ったという魔法学校入学の日に初めてこの世に現れたかのように何の情報も掴むことができない。更に気になることに、ネギ君の魔法学校入学の前夜、その近くの村で行方不明者が数人出ているときてる。彼の素行自体には特に問題が見られないとしてもやはり学園に迎える方としては気になることが多すぎる。

だから今回の対面で彼への今後の対応を決めようと思っていた。

だが、その結果がアレか。

表面だけ見ると彼の言葉は善良で一般的な人のものであるかのよう
に思えた。しかし彼の本質は善良とは言いがたい。彼は恐らくな
にか邪悪なものをその身に秘め、自分の目的の害になると思うもの
には容赦なく牙を向けるような人だろう。

問題はその目的が一体何かということである。正直彼には関わりた
くないというのが本心だが、常にネギ君の側にいる以上そうもい
かないだろう。もっと様子をみる必要がある。

だが、タカミチ君にまるで洗脳のように（タカミチ君に洗脳の有無
の確認はしたが極めて正常だった）信頼させた所を見ると、洗脳と
は別に心を操るような魔法を使うのかもしれない。うかつに近づく
わけには行かない。・・・どうしたものか。

7話（前書き）

非常に今更ですがキャラ崩壊注意。

7話

いやー昨日は大変だった。

騒ぎが起きるとすぐタカミチはネギ君にいい所を見せようとどこか行っちゃうし、ネギ君はネギ君でタカミチのことを追いかけてっちゃうから俺まで行かなくやいけなくなるし、行ったはいいけど騒ぎが収まった後の後片付けとか手伝わされるし、タカミチは一部女子生徒に人気があるし、ネギ君は大多数の女子生徒から可愛いーとか言われてちやほやされるし、見た目球磨川さん（普通の高校生）の俺は特に誰からも注目されないし。

お前らしい加減しろよ。

そんなこんなで騒がしい一日が終わり、あてがわれた職員用の寮の部屋で眠り、朝になった。

さて、今日はどうするかな。一応ネギ君に今日は一日一人で過ごす許可をもらったが（かなり愚図られたが基本ネギ君は俺に従順なので最後には頷いてくれた）、いざフリーになると何をすればいいのか・・・。

一応俺にはハーレムという目標があるのでそのために動くのもいいし、昨日はそうする気満々だったのだが、よく考えたらまだ皆授業中なんだよな。だから動くにしても夕方からしか無理なんだ。

夕方からはそれでいいとしてもそれまではどうやって時間をつぶすか考え中。

とりあえずネギ君が起きてこないうちに外に出てよう。杖の入ってる鞆（魔法を使って容量を増やしてるからあの大きさの杖でも入る）を持ってけば外でも若返りの魔法をかけられるしね。

というか午前10時に魔法が解けてもしばらくそのままにいるか。最終的には以前までの午前1時に関け直す習慣に戻すためにもこう

いう時に少しずつ時間を稼がないと。
ということでネギ君に書き置きを残して部屋からとっとと出ることにした。

はい、あれから2時間ほどたった今、特に何もせずぶらぶらしていたら10時になったので、人がいないことを確認して元の姿に戻っています。なんか球磨川状態より自分の悪魔度が上がった気がします。

いいのか麻帆良、敷地内に悪魔がうろついてるぞ。誰も気づかないのか？

多分侵入者には敏感に反応するけど中にいる人には鈍いんだろうなあ。吸血鬼とか鳥族とのハーフとかいるし、そういうのにいちいち反応してたらめんどくさいもんな。

まあこの姿をあんまり人に見られるのも喜ばしいことではないので、特に誰かに話しかけたりはせずに普通にのんびりしてるだけだから害はないよ。だから見逃してね、結界さん。

あまかった……。そりゃ学園都市に見知らぬ老人がいたら怪しく思われるよな。

かなりの数の学生にひそひそ噂された気がするし、よくわからんが見知らぬ先生から職務質問(?)とかされたぞ。まあ流石にそいつには『大嘘憑き』使っておいたけど。

そしてあれから5時間たった15時、俺は大変なことに気がついた。エヴァちゃんって確か内部時間の一日が外での一時間に変わる別荘を持ってたよな。あれに0時に入って中で1日待ってから外に出ればもういつも通りの習慣に戻るんじゃないか？

だとしたら俺が今までやってきたことは一体・・・！？
まあでもその方がずっと楽だからそれでいこうと思うけどね。

ということでは今度は若返りの魔法をかけて普通に街を探索します。
ネギ君と合流してもいいけど、どうせ夜遅くに抜け出すんだからだ
ったら朝帰りでもいいかなと思って今日はもう帰らないことにする。
麻帆良は科学と魔法だけじゃなくて食文化の面でも優秀だから、レ
ストランの飯が非常に旨い。お金に関してはイギリスポンドが日本
円に両替できたので問題なかった。

にしても麻帆良は広いね。見て回ってるだけでもう一日が過ぎてし
まった。今23時ちょっとすぎ、ちょうどいい時間だろう。
事前に調べておいたエヴァちゃんの家へレッツゴー。

到着。夜遅くの来訪だが相手はロボットと吸血鬼、別に夜でも大丈
夫だろう。

よく考えたら女性の家を訪ねるのなんてこれが初めてじゃないか？
前世では・・・いや、やめよう・・・。
そんなわけで多少緊張しながらもドアをノック。

「はい、どちらさまでしょう」

そう言いながらドアを開けてくれたのは茶々丸ちゃん。いやーほん
とにロボットとは思えないね。かわいい。

「夜分遅くにすいません、私、禊といいます。エヴァンジェリンさ
んはいらっしゃいますか？」

「マスターに何の御用でしょう？」

む、警戒されてるな。まあ当然か。でもどうするかな、ハーレム作

りのために『大嘘憑き』を使って心を操ることはしないと決めてはいたんだが、でもそうなるかと警戒されるのは当然なんだよな。

「えっと、少しお話ししたいことがあります。大丈夫です、いくらお二方が可愛らしいからって襲いかかったりしませんよ。はっはっは」

「・・・・・・・・・・」

スルーされた……。目も合わせてくれなくなった……。っておい、扉を『閉めるな』！

「！」

ふう、『言葉の重み』成功。ロボットにも通じるかは不安だったんだけど、よく考えれば言葉の重みについてでも電磁波を操ってるだけだからな。むしろロボットのほうがより効果的なんじゃないか？茶々丸ちゃんは身体が動かなくなったことに驚いてるようだな。うふふ、焦る姿も可愛いぜ。表情ほとんど変わってないけど。

「それじゃあ入らせてもらいますね」

「え？あ、まっ……」

身体が動かない茶々丸ちゃんをスルーして中に入る。

「あん？貴様、誰だ？」

そして中で紅茶を飲んでいたエヴァちゃんを発見した。

「かわいいいいいいいい！！！！！！」

「は！？お、おい！やめろ、近寄るな！触るな！！」

エヴァちゃん見てからダッシュ余裕でした。

優雅に足を組んで紅茶を飲んでるエヴァちゃんの胸に飛び込んでいきましました。

さすがにいきなり飛びつかれるとは思わなかったのか、何の抵抗もなく抱きつけた。

はー、胸なんか全然ねー、でもやわらかーい、ふはははははははははは。

「離れろと言っているだろう！！」

「ぐはっ！」

腹を思いっきり蹴り抜かれた。いてえ。でもなかった事にはしない。エヴァちゃんと俺の初めてに触れ合いだからね。思い出にこの痛みは一生とっておくんだ……。

「なんなんだこいつは！茶々丸！おい茶々丸！こいつをつまみ出せ！」

「こいつって……ひどいなあエヴァちゃん。僕には禊っていう名前があるのに」

え？口調がさっきと違うって？いやもう今更丁寧にしゃべっても・
・でしょ。一応訪ねる側だから失礼のないように振舞おうと思って
ただけど・・・無理でした。エヴァちゃん見た途端俺の理性が振
り切れました、はい。

「貴様の名前など聞いておらん！ええい、茶々丸はまだか！こうな
れば私自ら叩きのめしてくれる！」

「いやエヴァちゃん。僕は戦いに来たんじゃないんだ。ちよっとお
話しに來ただけなんだよ」

「エヴァちゃんとか呼ぶな！馴れ馴れしいぞ！！」

「エヴァちゃんと仲良くしたいだけなんだって、他意はないよ」

「いきなり飛びついてきたやつを信用できるか！それだけならなぜ
あんな事をした！」

「いやエヴァちゃんがあまりにも可愛くて」

「かわ・・っ！」

おお、顔が真っ赤になったぞ。こんな状況でも照れるのかよ、かわ
いいなおい。

「そんなことを真顔で言うな馬鹿が！くそっ、茶々丸！何をしてい
る！」

「あ、忘れてた」

まだ『言葉の重み』で動けなくしたままじゃん。急いで解除。

「ご無事ですかマスター！」

おお、すぐきたな。

「無事じゃない！この変態に襲われそうになったんだぞ！何をして
いたのだ！？」

「いえ、何故か突然体が動かなくなりまして・・・明日、ハカセに
見てもらいます」

「ああ、その必要はないよ。実は僕機械にも強くてね、僕が茶々丸
ちゃんを見てあげるからとりあえず服を脱い・・・いや、なんでも
ないです」

こえええええ！超睨まれたぞ！あれ？茶々丸ちゃんって人のことあ
んな眼力で睨んだりするキャラだったっけ？

「マスター、早急にあのゴミを排除しましょう」
「え？あ、ああ」

おい、茶々丸ちゃんキャラおかしいだろ！エヴァちゃんもちよつと
引いてんじゃねえか！

って、闘する気満々じゃねえか！

茶々丸ちゃんに殴り飛ばされる。いてえ。けどこの痛みも消さない
でおこう。思い出だから。

そんな俺にさらに追撃しようとする茶々丸ちゃん。更にその後で俺
が逃げ出したときに魔法で追撃できるように構えてるエヴァちゃん。
まったく、しょうがないなあ。

「『動くな』」

「「！？」」

うん、ちゃんと吸血鬼にも効くみたいだな。ふたりとも驚いてる・・・
いや、エヴァちゃんも茶々丸ちゃんも少なくとも俺が原因である
ことには気づいたみたいだな。まあ今回は声にだしちゃったから
当然か。

とりあえず近くのソファに座る。俺に立つてられると向こうも落ち着いて会話しづらいでしょ。

「・・・これはどんな術だ？　そういえば先程も障壁を無視して突っ込んできたな・・・。貴様、一体何者だ？」

あ、障壁なんてあったんだ。多分無意識で『なかったこと』にしてたわ。俺とエヴァちゃんを遮る障害は全て取り除くぜ！　みたいな？

「だから、話をしようって言ったんだ。さっき飛びついちゃったのは、まあ、謝るけど、でも僕に交戦の意思がないのは確かだよ。エヴァちゃんと仲良くなりたいというのは本当だし、エヴァちゃんの得になるような情報も持ってきたんだ。だから、話だけでも聞いてくれないかな？」

こうして、第一印象最悪の状態から僕とエヴァちゃんと茶々丸ちゃんの三者会談が始まった。

7話（後書き）

最初の予定では、エヴァちゃんを言葉の重みでひれ伏させて無理やり仮契約するはずだったんですが、さすがに自重しました。

8話

「それで、話というのはなんだ？」

「まあまあまずは落ち着いて、お茶でも飲もうじゃないか。ねえ茶々丸ちゃん？」

「・・・お茶を用意してまいります」

という訳で二人の言葉の重みを解除して今からお話タイム。やつぱりお話する時のお茶がないとね。でも茶々丸ちゃん、露骨に俺の方を睨みつけるのはやめたほうがいいと思うよ？

「どうぞ」

「うむ」

「ありがとう茶々丸ちゃん！これは美味しそう、な・・・水、だね」
「申し訳ありません。安物のティーバッグを切らしてしまったので」
「でもエヴァちゃんのは普通の紅茶だね？」

「マスターのものは最高級の茶葉を使っております」

「・・・僕もそっちの方がいいかなあ」

「・・・」

無視された。

なんか茶々丸ちゃん滅茶苦茶俺のこと嫌ってるよね？なんで？

「・・・あれだ、茶々丸。確かに気に食わんやつだが、そこまで邪険にすることもないんじゃないか？」

おお、エヴァちゃんが気を使ってくれてる。天使か。エヴァちゃんマジ天使。吸血鬼だけど。

「そうだよ茶々丸ちゃん。いくら僕とはいえこんなことをされたらさすがに傷つくよ。僕のどこがいけないのか言ってくれば直すから、正直に言ってみてよ」

「別にどこが嫌というわけではないんですが・・・生理的に無理といますか」

「え!?! ロボットにも生理ってあんの!?!」

「そういうところがいけないんじゃないのか?」

閑話休題。

「さて、それじゃあ改めて自己紹介といこうか。僕は禊。年明けからこの学園で先生をやるネギ君って子の付き添いでイギリスから来たんだ。ネギ君がどんな立場の子かはエヴァちゃんには説明するまでもないよね?」

「ふん、あの馬鹿の息子か。それで、その付き添いとやらがこの私に何の用だ?」

「ああ、警戒しなくてもとりあえずネギ君は関係ないよ。さっきも言っただけど僕はエヴァちゃんと個人的に仲良くなりに来ただけなんだから」

勿論茶々丸ちゃんともね、と付け加えたが何の反応もくれなかった。こっちを見てすらくれなかった。寂しい。

「仲良く、って言い方だと少し曖昧かな? 具体的に言うとなんか「それが用件なら追い出すぞ」・・・ええっと、協定を結ぼうってことだよ」

「ほう？」

「登校地獄・・・だっけ？ふざけた呪いだよね」

「・・・そんな事まで知っているのか」

「あ、僕が勝手に知ってるだけで、ネギ君は何も知らないよ。それどころかエヴァちゃんのこと闇の福音のことも知らないと思うよ。ネギ君は魔法世界で育ったわけじゃないし」

「それで、それがどうかしたのか？」

「登校地獄を解くためにサウザンドマスターの息子であるネギ君の血を狙ってるんだよね？」

「貴様、それをどこで・・・」

「まあそんなことはどうでもいいことだよ。あ、茶々丸ちゃん、お水おかわり」

「かしこまりました」

睨みつけてくるエヴァちゃんは可愛いけど、情報源については話せないんだよねー。まさか漫画で読んだなんて言えないし。

「お待たせしました」

「うんありがとう、・・・ってぬるい！さっきはまだ冷蔵庫から出したミネラルウォーターっぽかったけど、今回のこれは明らかに水道水だよね！？」

「・・・」

「何で茶々丸ちゃんは僕のこと無視するの？」

「そんなことはどうでもいい！で、私があいつの息子を狙っているからなんだというのだ？阻止でもするのか？やれるものならやってみろ！この呪いのせいで私がどれだけ屈辱的な日々を過ごしたか、貴様などにわかってたまるか！」

「いや阻止なんかしないけどさ」

「・・・は？」

「言っただろう？僕はエヴァちゃんと仲良くなりたいて。だから

別にエヴァちゃんがやりたいことにケチつけるつもりはないさ。登校地獄、解けるように祈っているよ」

まあ俺がその気になれば『大嘘憑き』で登校地獄をなかったことにもできるんだけど、しない。大して仲が良くない今それをやってもあんまり効果がないだろうしね。

もっと言うと今エヴァちゃんが登校地獄を解除するのは俺にとっていいことではない。エヴァちゃんと夢の学園生活が送れなくなっちゃうから。だからもし万が一俺がここにいることによるバタフライエフェクトでエヴァちゃんがネギ君に勝っちゃって、しかも学園側から何の邪魔もなかった場合は、仕方ない、俺が何とかそれを防ごう。だからこそ今エヴァちゃんに『大嘘憑き』を見せたくないんだよね。そうすればエヴァちゃんが見てないところで『大嘘憑き』を使っても俺が犯人だとは思われないだろうから何の問題もなく妨害ができる。

だからエヴァちゃんの前で使うのは『言葉の重み』だけにしよう。少なくともしばらくは。

「それならなぜその話を出した」

「ネギ君を襲うことに関しての妨害はしないつもりだけどさ、実はその前に一芝居演じて欲しいんだよね」

「どういうことだ？」

「いや、ぼくにも面子つてものがあるでしょ。付き添いできたのにネギ君が襲われているときに何もしてませんでしたじゃちょっとね。だからそのための理由作りがしたいのさ」

「なるほど、貴様の言うこともわからんではないな」

「でしょ？それさえしてくれるんならこの件に関してぼくはノータッチで行くからさ」

「わかった、いいだろう。で、その一芝居とは何をすればいいんだ？」

「えっと、まあ、それは追々・・・」

「・・・あまりふざけたことはさせるなよ？」

「わかってるよ。大丈夫」

女の子とフラグが立ちそうな吸血鬼イベントを幾つか考えてはあるんだけど、誰を落とすかはまあ当人を見てからということ。茶々丸ちゃんみたく原作のイメージとだいぶ違ってる子もいるだろうしね。あ、もちろんこの茶々丸ちゃんも好きだよ？でももう少しデレてほしいな・・・。

まあでもこの子ならネギ君に奇襲されたときに颯爽と助ければ案外すぐ落ちるんじゃないか？

・・・でも待てよ？あれって確かオコジョに唆されてやったことだったような・・・。あれ？オコジョってネギ君と知り合ったわけ？村にいた頃にオコジョと出会ってるならいいけど、魔法学校にいて授業がないときはほとんど俺と一緒にだったし、俺はネギ君からオコジョの話なんて聞いたことないし・・・。

もしかしたらネギ君とオコジョって知り合ってないかもしれない。

・・・まあいいか。あいつがいても邪魔なだけだし、仮契約の魔方阵は俺が覚えてるからとりあえず問題ないだろ。オコジョがいないと起こらないイベントなんて修学旅行のネギ君の唇争奪戦くらいだろ。あんなうらやまけしからんイベントなんてないほうがいいんだ。でもそうすると茶々丸ちゃんにフラグ建てるのが一気に難しくなったな・・・。最悪ネギ君に取られてしまうぞ・・・。

「おい、どうした？突然呆けて」

「ああごめん、なんでもないよ。じゃあまあそういう事でこれから僕とエヴァちゃんと茶々丸ちゃんは仲間ってことでいいね？」

「・・・・・・・・」

「いやです」

エヴァちゃんは嫌そうに顔をしかめたけど茶々丸ちゃんからはきっぱりと断られた。ここまで嫌われるともういつそ清々しいね。

「ま、まあ仲間は言いすぎだろう。そうだな、せいぜい共犯者といったところじゃないか？なあ？」

「ええまあそれくらいなら」

見かねたエヴァちゃんがフォローしてくれた！天使か。

「でも共犯者ってなんか仲間以上に蠱惑的な響きだよな」

「「……………」」

ゴミを見るような目で見られた。癖になりそ……いや、やっぱないな。

「それで、貴様が言っていた私にとって得になる情報とはなんだ？」

「あ、それは……あれだ。……ちよつとまってるね」

どうしよう。エヴァちゃんがごねた時のために、

『実はナギさんと何年か前にあったんだぜー、しかもその時この杖を受け取ったんだぜー、この杖はネギ君が立派な魔法使いになったらネギ君に渡すけどそれまで預かってるんだぜー、だから死んだって言うのはガセでまだナギさんは生きてるかもなんだぜー』

って言おうと思ってたんだけど、それをするまでもなくエヴァちゃんと（初対面にしては）それなりに良好な関係になれちゃったぞ。とするとこれは言わないほうがいいよな。実際ナギさん死んでるわけだし、またナギさんへの想いを取り戻して俺の事見向きもしてくれなくなったら困るし、とりあえず言わんとこ。

でもそうするとエヴァちゃんの得になるようなことがなくなっちゃ

うんだよな・・・。

「おい、実は何も無いのか？あれはただの方便だったのか？」

「う、ぐぐぐ・・・。あ、そうだ！別荘だよ別荘！」

「なに？」

「ここじゃ言いづらいことなんだ。さっきの話以上にね。たしかエヴァちゃんって内部時間の1日が24時間になる別荘をもってたよね？そこで話したいんだけどいいかな？」

「だからなぜそんなことを知っている・・・。まあいいだろう、ここまで来れば乗りかかった船だ。別荘の中に入れてやる。感謝しろ」
「ありがとうございます」

ということとで現在の時刻24時ちよい過ぎ、ちよつとタイムオーバーしたが本来の目的である別荘にも入ることに成功。さて、それじゃあ取っておきの秘密を告白するとしますかね。

9話

「少し準備があるからな、1分ほどここで待っている」

さて別荘に入ろうというときにエヴァちゃんからそんな要請が。

なんだそれ。想い人が来たときに急いで部屋を片付ける高校生かよ。

・・・はっ！まさかエヴァちゃんは俺のことが・・・。

「君の気持ちはわかったよエヴァちゃん。でも1分でいいのかい？」

「ああ、中ではその24倍だからな」

あ、なるほど。現実世界ではたったの1分でも別荘内では24分になるのか。そんだけありやさすがに大丈夫だね。

「それでは行くぞ、茶々丸」

「はいマスター」

よし、じゃあ今から1分間待機だ。

・ ・ ・

はい、もういいかな。

「おじゃましまーす」

一応挨拶してから中に入る。へえ、中は結構おしゃれなんだね。
てくてく歩いて行くとエヴァちゃん発見！なんかこっちに手を突き

出してるぞ！

これはあれか？抱きしめろってことか？よっしゃまかせろ！

エヴァちゃんに向かってそれなりの速さでダッシュ。ニヤリとするエヴァちゃん。

「エヴァちゃん、会いたかつ『氷瀑』！」うおっ！

なんか周囲が突然爆発した。しかも景色は南国なのになんか寒い。

「ちょ、エヴァちゃん？これは何のサプライズパーティ？」

「だまれ。『氷神の戦鎚』！」

俺の質問に対する返事は巨大な氷塊だった。さすがにこれは『大嘘憑き』を使わないと死んでしまう。

「ふははははははは！！私が力を封じられてるからといって甘く見たな！ここでは力が取り戻せるんだよ！！ふん、ここに来たいなどといったのが運の尽きだ。じわじわと罅り殺してくれる。ほら！とつとと起きろ！」

「はぁ・・・エヴァちゃん・・・」

「っな！？無傷だと！？」

なんだよ、そういう事かよ。どうりですんなり別荘に入れてくれると思ったよ。それなのに俺はもしかして俺に・・・とか、なんだよ根はいい子なんじゃないか、とか色々勘違いしてしまった。

がっかりしながらも立ち上がるとエヴァちゃんが驚きの声を上げた

「馬鹿な・・・直撃したはずだぞ・・・」

「ああうん、僕は回復魔法の使い手でね」

それには適当に返事。だって詳しく説明したら大嘘憑きがバレちゃうもの。

にしてもエヴァちゃんが俺に攻撃を仕掛けてきたってことは、まだ俺のことを全然信頼してないってことだよな？ うーん、やっぱり最初は力づくにでも言うことを聞かせるべきかな。まず俺のことをよく知ってもらってその上で仲良くなったほうがいいかもしれない。うんそうしよう。

「まあそんなことはどうでもいいんだよ。ねえエヴァちゃん？」
「ぐあっ！」

ぼーっとしてると2波目がそうなのでとりあえず『言葉の重み』で動けなくしておこう。でもただそれだけだとお仕置きにならないのでひれ伏せさせとく。たまには都城さんっぽくしてもいいよね。

「ふざけるな貴様！ 一体何をした！」

「ふざけるなはこっちのセリフだよエヴァちゃん。僕は大概のことはされても怒らないけどね？ それでもされたら嫌なことだってあるんだよ。今のが正しくそれだ。エヴァちゃんは僕のことを裏切って、襲いかかってきた。そうだよね？」

激昂するエヴァちゃんに対し思いつくままに言葉で威圧感を与える。別に今回のこれも怒ってはいないけど怒ってるって言わないとエヴァちゃんを怒ることができないから怒っておく。ん？ なんかよくわからなくなってきた。まあいいや。

「ふざけるなよ、貴様あああああ！！！！」

「『黙れ』」

「・・・！？」

叫ばれるとなんか罪悪感が湧いてくるのでちよつと落ち着いてもらおう。

「マスター！」

おっと、茶々丸ちゃんもいたのか。まあでもエヴァちゃんに怒ってる最中だから今は邪魔しないでね。というわけで、

「『動くな』」

「くっ！」

ロボットなのに睨んでるってことがわかるぐらいキツイ目付きをしてるぞ。でもそんな茶々丸ちゃんも可愛いよ！

「さて、今、僕はエヴァちゃんに襲われたよね？」

「・・・」

気をとりなおして続きといこう。と思ったがエヴァちゃんが返事をしてくれない。

そのまま沈黙に包まれて一分ほどたった後でようやく気づいた。

そういうえば俺黙れて言葉の重みで命令したままじゃん。そりゃ喋れねえよ。

「あ、もう『喋っていいよ』。ついでに茶々丸ちゃんは『邪魔しないで静かにしててね』」

若干恥ずかしいがいまさらながら言葉の重みを解く。その時意味ありげに含みを持たせたと思われるように茶々丸ちゃんのことを黙らせておく。ついで扱いでごめんね！

「・・・貴様、何者だ？」

「今そんなことはどうでもいい。質問に応えてほしいな」

弱々しいエヴァちゃん可愛い！と思いながらも高圧的な態度で接する。

「・・・ふん、襲ったからどうした」

「襲ったんだよね？だったら今僕がエヴァちゃんを襲っても、君に文句をいう資格はないよね？」

「何を、する気だ？」

エヴァちゃんの顔が恐怖でひきつる。そりゃそうだよ、なににする気だよ俺。

女の子に土下座の格好させて今から襲う宣言だと？どこの変態だよ。なんか死にたくなってきたがこれも後々エヴァちゃんと良好な関係を築くため！本当に襲っちゃったらただの犯罪者だけど、言うだけなら別にいいよね？

すぐく怖いので茶々丸ちゃんの方は絶対に見ないようにしよう。背中を向けてるのに、なにか怨念めいたものが感じられる。

「何をするかって？僕は男が女を襲うって言ったら一つしか知らないから、それをするつもりだよ」

「なっ！そ、それは・・・」

あんまりな俺のセリフにますます顔を青くするエヴァちゃん。まあここまで怖がってくれたならもう大丈夫だろう。ここらで態度を変える飴と鞭作戦により、裏切れば怖いけど裏切らなければ普通の無害な少年だと思ってもらえるはず。

「でもかわいそうだから一回だけチャンスをあげよう。素直に、ご

めんなさい、って言って反省してくれたら、特別に許してあげるよ」
よし、これでエヴァちゃんが謝って、俺が許して、それで大団円だ
ろ。その後は三人で楽しい時間を過ごそうね！

「・・・ふざけるのも大概にしろよ・・・なぜ私が貴様に屈服せね
ばならん・・・」

・・・あれ？

「私はエヴァンジェリン！真祖の吸血鬼にして最強の魔法使いだ！
貴様などに屈服してたまるか！」

・・・あれ？

「私をどうしようが好きにするが良い！だが何をされようが貴様に
対し服従するなどありえん！」

え、ええと・・・。

俺は今選択の余地を与えたよな？謝れば許すって言ったよな？その
上でこの選択なんだよな？

これは・・・まさか・・・やっちゃっていいってことか・・・？

「つまり、僕に謝る気はないってことだね？」

「そうだと言っているだろう！」

「その結果僕に何をされてもいい、と？」

「貴様に媚びるよりましだ！」

YES！今言質とったよ！何されてもいいって言った！つまり同意の上だ！

もうここまでできたら据え膳食わぬはなんとやらだろ。やるしかない。

「それじゃあ遠慮なく」

「っ・・・！」

エヴァちゃんの方に一步踏み出す。それだけなのにエヴァちゃんは怯えたような声を上げた。言葉の重み状態だから体が震えられないんだろうな。自由になるのは顔面だけだろうし。

側に歩み寄ってしゃがんで髪を撫でる。わあふわふわだ。

「それじゃあエヴァちゃん覚悟はいいかい？」

「・・・」

返事をしてくれないことに若干つまらなさを感じるものの、まあ仕方ないかと思いついて頬を撫でる。・・・ん？なんか濡れてる？

くいつと顎を持ち上げて顔を見ると、声が出ないように唇を噛み締めながら泣いていた。

涙を流す目と目が合う。俺は何も言えない。エヴァちゃんも声が漏れないように唇を噛み締めているから何も言わない。・・・気まずい。

いや、さすがにこれ襲うとか無理っしょ。ムリムリ、絶対無理。

「ナ、ナーンチッター！ア、アハハハハ。ジョウダンドヨジョウダ

ン」

焦りのあまり片言になってしまったが、とりあえずこの気まずい状態を何とかしたくて言葉を紡ぐ。正直さっきの飴と鞭とか考えてた俺をなかった事にしたい。

エヴァちゃんは何いってんのこいつみたいな目で見てきたのでいたたまれなくなって目をそむける。

「でも今回はこれで許してあげるけど仏の顔も三度までだからね？次は・・・あつ、三度だから次もいいのか。でもその更に次はないからね？」

とりあえず一刻も早くその場から立ち去りたくて自分でもよくわからない適当なことを言い残してその場から立ち去り、そこから離れた場所で20分ほどぼーっとしてから言葉の重みを解除していなかったことに気づいて急いで解除したのだった。

9話（後書き）

最初はエヴァ視点で書いていたんですが、あまりにもキャラ崩壊がひどくなってしまったため急遽書き換え。

エヴァ視点も見たいという方がいたらいつてください。

10話

あー、まずいなー、泣かせちゃったよー……。これから仲良くやっていきたいんだけど、なんかこう、気まずいよね。泣かれちゃうと。

そんなことを考えながらエヴァちゃん達がいた場所から離れた所の海で泳いでいた。

いやほら、やっぱりこんな南国風の場所なら逆に泳がないと失礼でしょ？ 勿論服はきてるよ。万が一エヴァちゃんや茶々丸ちゃんに見つかったときに、明らかに突然来た向こうが悪いのに、何故か男である俺が痴漢呼ばわりされるらね。それは避けたい。

あがる時に濡れてたことをなかった事にすれば何の問題もないからね。まあエヴァちゃんに見つかったらそれもできないけど、その時は仕方ない。

にしてもこの体やっぱりすごい。泣いてるエヴァちゃんから逃げてきた後14時間ぐらいぶっ続けで泳いでるけど一切疲れない。さすが悪魔+『完成』によって身体能力が極限まで上げられている状態だ。

考え事をするときは適度に身体を動かすといいつて言うしね。でも名案が浮かばない。エヴァちゃんが俺を探す気配も一切無い。24時間は出られないからこの中にまだいるはずなんだけど。

そんなこんなでさらに9時間後。

あの後若返りの魔法が切れた俺はエヴァちゃんに今の姿が見られないよう泳ぐのをやめ、森のほうを散策してた。んでもってこの中に入ってから後20分ほどで24時間。若返りの魔法をかけ直してからエヴァちゃんのところに戻って、そろそろ仲直りをするべき時間だ。

ということで間近でマジカル☆ワンダーミソギでおなじみの俺が最も得意とする若返り魔法をかけてエヴァちゃんのもとへ。

二人は来た時と殆ど変わらない場所で優雅にお茶を飲んでいた。

「む、遅かったなミソギ。何をしていたのだ？」

「え？ いや別に特に何も」

約24時間前のことは何もなかったかのように振舞われた。それでいいならいいけどさ。

ていうか初めて名前を読んでもくれた！嬉しい！

「なんだと？ 私は貴様が戻ってくるのをここで待っていたというのに、貴様は何をするでもなくただ徒に時間を過ごしていたというのか？」

「まあ・・・そう言われるとそうかな」

泳いでただけだし。眠くなったら寝ようと思ってたけど眠くならなかったし。

「え、ていうかエヴァちゃん俺のこと待っていてくれたの？」

「何馬鹿なことを言ってるんだ。貴様が話があるからここに連れて行けといったんだろうが」

「あ、そうだった」

やべえすっかり忘れてた。別のことに集中していたせいでそれを考える時間がたっぷりあったにもかかわらず完全に忘れていた。

「ほら、外では言えないようなことなのだろう？ 早く試してみろ」

ニヤニヤしながら催促するエヴァちゃん。この少女わかっててやってるんじゃないだろうな？

でもどうしよう。ここまで来てやっぱり嘘ですなんて言いづらいし・・・。

「・・・いきなり襲ってくるような人に教えられるようなことじゃないかな・・・」

「は？」

「さっきエヴァちゃん突然襲いかかってきただろ？もしこの情報を教えた後にそんなことをされたらたまったものじゃないからね、もうしばらくおあずけだ」

とりあえず言いがかりをつけることにした。

さっきエヴァちゃんには泣くほど叱ったわけだから、多少は効果があるんじゃないか？

そう思ってエヴァちゃんにそう告げると、顔を俯けてしまった。

「最低ですね。マスターの寛大なお心で先程の件はなかったことにしてあげたというのに、その優しさを踏みにじるなんて。見損ないました」

茶々丸ちゃんにすごく冷たい声で言われた。

あれ？さっきの件って俺が被害者じゃないの？原因がどうであれやっぱり幼女が正しいってことになったちゃうの？なんだこの女尊男卑は。なかったことにするのは俺の専売特許だぞ。

「とまあ色々突っ込みたいところはあるけれど、まず茶々丸ちゃん。見損なえるほど僕の評価は高かったのかい？」

「私の中でゼロからマイナスになりました」

「むしろ今まではマイナスじゃなかった事に驚いたよ」

そこまで嫌われているわけじゃないのかもしれない。

「よせ茶々丸。確かに先程は私に非があった。ミソギ、先程はすまなかった、許せ」

なんとエヴァちゃんが茶々丸ちゃんを止めてくれた上、謝罪までしてくれた。一応頭も下げてくれた。椅子からは降りてないけど。

「謝ってくれるなら許すけどさ。突然どんな心変わりだい？昨日は絶対謝らないって言ってなかった？」

「まあ考えてみたら私が一方的に悪かったわけだからな。それに、貴様の事情を考えれば私に裏切られたらショックをうけるのも当然だろう」

「うん？」

俺の事情？なんだそれ、俺がエヴァちゃんを好きって事情か？まあそれならたしかにそうだけど。

「それに一度裏切った私に話したくないという気持ちもわかる。打ち明けた後に裏切られた場合はこれどころでは済まないからな」

確かに告白した後に攻撃されたらへこむけどさ。

「だからそのことを詫びた上でもう一度言いたい。私にミソギの持っている情報を聞かせてくれないか？」

真剣な表情で問いかけてくるエヴァちゃん。ううむ、ただ俺をいじっていただけじゃなかったのか。

とはいっても俺がエヴァちゃんに与えられる情報なんて、ナギさんのことだけだしなあ……。でもここであの人の話をするのは気がすすまないし……。どうしよう。

そんなことを考えて数分の間逡巡していると、その沈黙をどうとつたのかエヴァちゃんが大きくため息をついた。

「やはり話す気になれんか……。だったら私から言ってやる。お前の口から聞きたかったのだがな」

「え……。？」

俺の口から聞きたかった言葉？仕方ないから自分で言う？ま、まさか……。愛の告白か？愛の告白だったのか！？という妄想を抱いてしまいそうなセリフだなおい。

「マスター、そのことに関しては伏せるのではなかったのですか？」
「いや、いっそはつきりさせてしまったほうがお互い楽だろう。奴も最初は明かすつもりだったのだろうしな」

何の話だろうと思いつながらもエヴァちゃんの言葉の続きを待つ。
そしてエヴァちゃんはこちらを向きながら真剣な表情で

「ミソギ、お前は人間じゃないな」

といった。

「え？一体なんのこと？」

とりあえずとぼけてみる。

「この別荘で起きたことは距離が離れていてもだいたい感じ取れる。数時間前に突然貴様から漏れる魔力が人間のものではなくなった。と言ってもわずかな変化だったから余程のものでないと気づけん程度の変化だったがな。その後数時間その状態のままで過ごし、何らかの魔法を行使したとたん今のような人間としか思えない質の魔力に戻った。つまり貴様は本来人間ではなく、何らかの隠蔽魔法をすることで人間と偽っているのではないか？」

・・・おお、当たらずといえども遠からず。何故かこの姿になると悪魔っぽい感じがしないと思ってたけど、魔力的には人間だったのか。だとするならその説明でもほぼ間違っていないな。違う点は使ってる魔法が若返りの魔法だということだけだ。

「どうなのだ？ ミソギよ」

まあ別にエヴァちゃん相手なら隠し通したいわけじゃないし、認めちゃおう。最悪なかった事にしちゃえばいいんだし。

「そうだね、たしかに僕は悪魔だ」

「やはり・・・だから私の所に来たのか？」

「ん？」

「同じ人外同士だからと私のところへ来たのかと聞いているんだ」

「ああそういうこと」

どうするべきか。別にそんなわけじゃないけど、ここで否定しちゃったらじゃあなんで来たんだよって言われちゃうし、肯定したら安く見るな！とか怒られそう。

「まあそういう思いがあったことも否定はしないけどね。でも一番

はエヴァちゃんと仲良くなるためだよ。さつきも言っただろう？」

なのでとりあえず間を取ることにした。

「そうか。だがなぜナギの息子のところなんぞで世話焼きをしているのだ？」

「うーん、自分語りはあんまり好きじゃないんだけどね」

基本嘘だし。自分について正直に話せることなんてないよ。

「まあでもエヴァちゃんならいいかな。僕は実は魔法世界のお偉いさんからネギ君を殺すために派遣された悪魔なんだよね」

「・・・なんだと？」

「あの頃の僕は雇い主に拘束されていたから、言う事を聞かざるをえなかったんだよ。でも、その後なんやかんやあって、ネギ君のおかげでその状態から解放されてね。その時の恩もあるし、そもそも僕はこの世界にいるべき存在じゃないから居場所もないってことでネギ君の傍にいてってわけさ」

「なんやかんやとは？」

「それは申し訳ないけどエヴァちゃんにも言いたくないかな。ごめんね」

「いや、人の事情をとにかく詮索するものではないな。こちらこそ悪かった」

この事情説明の仕方ならあんまり変なこともいってないし、あながち嘘でもないし、貫き通せるかな？

「あ、それとこの件に関しては他の人には内緒にしてね」

「ああ、わかっている。こんなところで貴様が悪魔だとバレたら、正義の魔法使い共がキャンキャン吠えてくるだろうからな」

「ネギ君にも内緒でお願い」

「ん？なぜだ？」

「さっきのなんやかんやに関しては詳しく言えないけど、ひとつ言っておくとネギ君のおかげと言ってもそれは間接的なんだよ。だからネギ君が自分は何をしたのかも知らないし、僕が悪魔だということも知らないんだ。知らないなら知らないほうが僕としてもありがたからね。ネギ君にまであんな扱いをされたら僕の居場所がどこにもなくなっちゃうから」

意味深なセリフを吐くことで辛い生涯を送ってきたのだという演出をする。

「そうか・・・お前も大変だったのだな」

そして素直なエヴァちゃんは具体的なことは何一つ聞いていないにもかかわらずすんなりと信じてくれた。まあ俺が悪魔なのは間違いないから勝手に想像してくれてるんだろうね。

「わかった、先ほど攻撃を仕掛けた償いだ。ミソギのことは誰にも言わん。ここにいる私達だけの秘密だ」

「ありがとう、そうしてくれると助かるよ」

やった、思いの外簡単にエヴァちゃんと仲良くなることができた！いやー泣かれたときはもうだめかと思ったけど、悪魔だって気づいてくれてよかったよ。やっぱ仲間意識みたいのがあるんだろうな。今のうちは仲間意識でいいさ。そこから好感度を上げていって、最終的には恋愛感情にまで発展させてやろう！フハハハハハハ！

「お話中のところ申し訳ありませんマスター」

「ん、どうした茶々丸」

「今の会話のデータが3日後にある定期メンテの際にハカセに見られてしまう可能性があるのですが」

「・・・ああ、その可能性もあるのか」

「ハカセさん？」

「ってあのおでこの子だね？会いたい！原作ではあんまり目立った印象はなかったけど結構可愛いと思うんだ。だってメガネだよ？おでこだよ？三つ編みだよ？アホ毛だよ？白衣だよ？マッドサイエンティストだよ？これが可愛いわけじゃないか！

「ああ、茶々丸の開発者の一人でな。定期めんとやらをするときに、もしかしたら中のデータが覗かれてお前のことが知られるかもと心配なんだ」

「ああなるほど」

ハカセちゃんには是非とも会いたいのが、でも悪魔だつてことを知られるのはよくないな。エヴァちゃんと茶々丸ちゃんとはともかく、他の人達には普通の人間だと思ってもらいたいからね。だってこの二人は人間じゃないから恋愛感情を人間じゃない俺にも持ってくれるかもしれないけど、他の純正の人間たちは悪魔なんて好奇心の対象にはなつても恋愛の対象にはならないでしょ。というわけでメンテまでに何とかしないとな。

「でもそれなら見ないでつてお願いすればいいんじゃないの？」

「今までそんな頼みなど一度もしたことがなかったからな・・・不自然に思われるかもしれない」

「うーん、どうしようか・・・」

「・・・まあホントは『大嘘憑き』使って内部のデータだけなかった事にしちゃえば、もしくは『言葉の重み』の電磁波で茶々丸ちゃん

の中を操ってその部分にだけロックかけちゃえばすぐ解決できるんだけどね。

しかし俺はできる男。一度会ったら次会うときの約束も忘れない。

「じゃあその対策を考える必要があるね。今日はネギ君も心配だし明日もあるしそろそろ帰るけど、2日後にもう一度此処に来るよ。その時に話しあおう」

「もう二度とこないでください」

「おい茶々丸」

「と言いたいところですが仕方ありません。2日後に」

俺に暴言を吐こうとしたけどエヴァちゃんに窘められてちよつと不満げな茶々丸ちゃん可愛い。

こうして俺はエヴァちゃんと茶々丸ちゃんに次会う約束を取り付けたのだった。

11話

あの後別荘を出てから少し二人と会話し、ダッシュで教員寮の自室に戻ったときには2時を過ぎていた。

「で、何でこんなに遅かったんですか!？」

「い、いやあ・・・アハハハ」

「笑ってごまかさないでください!」

で、何故か俺はこんな時間まで起きているネギ君に尋問されていた。というか、俺が帰ってくるまではいつも通り10時前に寝ていたようだが、俺が帰ってきたとたん跳ね起きて尋問が開始されてしまったのだ。

ネギ君め、また変な魔法を覚えたな。侵入者が来たときに察知するような魔法だろうか。こんな時間に部屋に入る人なんて俺しかいないし、多分そうだろう。

「でも、ネギ君に文句言われる筋合いはないんじゃないかな?今日は自由行動って許可はとったはずだし」

「そ、そうですね・・・でも今はもう今日じゃなくて明日です!24時過ぎてますよ!」

「それは屁理屈じゃないかな・・・」

「そうじゃなくてもこんな遅くなるなんて心配します!それに・・・」

「それに?」

「さ、寂しかったです・・・」

少し恥ずかしそうに頬を染めながら伏し目になってつぶやくネギ君。くっ、このセリフは男に言われても気持ち悪いと思うだけのはずな

のに、少し可愛いと思ってしまった。これがタカミチとかにやられてたら即なかった事にしてたけど、ネギ君は結構かわいい顔してるし、9歳ぐらいならまだ中性的なところもあるからな。仕方ない。可愛いと思っても問題ないよ。うん。

「ミソギさん？」

「ああうん。まあもうこんな時間だしね。そろそろ寝ようか」

「だから、ごまかされませんよ！今日どこで何をしていたんですか！」

めんどくさいな。エヴァちゃんのことを言うわけにもいかないから適当にごまかすか。

「あー、ネギ君？もし何も言わずに許してくれるなら、ネギ君のお願いを何でも一つ聞いてあげるけど、どう？」

「本当ですか！？わかりました！聞きません！」

よし、ネギ君が単純なおかげで適当にごまかせた。

「じゃあお願い言ってもいいですか？」

「いや、今日はもう遅いからね。とりあえず寝よう。明日学園長のところに行くまで暇だからその時間くよ」

「わかりました。じゃあおやすみなさい」

「うんおやすみ」

そして翌朝、俺が目を覚めたのは8時頃だが、その時はまだネギ君は眠っていた。まあ深夜2時過ぎに起こされたわけだから無理も無い。だから起こさないよう外に・・・と思ったが流石に昨日の今日だ。おとなしく部屋の中で本でも読んでいることにする。

結局ネギ君が目を覚ましたのは午前10時過ぎ。学園長のところには11時か12時ぐらいには行きたいのでお願いを聞いている暇はなくなってしまった。

「約束したのに・・・」

「いや、ネギ君が起きなかったのが悪いんだよ」

「起こしてくださいよ！」

「いやああんまり気持ちよさそうに寝てたから起こすのも悪いと思
って」

「ううう・・・」

そんな会話をしながら朝ごはん（兼昼ごはん）を食べ、学園長のところへレッツゴー。

「失礼します」

「うむ、入りなさい」

学園長室に入ると、学園長とタカミチ、それに見たことのない女の人もいた。確か原作のあの人だね。秘書みたいな役割の・・・名前なんだっけ？

「まず紹介しておこうかのう。こちらは今日からネギ君の指導教員になる源しずな先生じゃ。わからないことがあったら教えてもらいなさい」

「よろしくね」

「よろしくお願いします」

優しげな微笑をネギ君に向けるしずな先生は、まさに全国の男子中

高生が妄想する理想の女教師そのものなんじゃないかな。嫌いじゃないよ、うん。さすがに女子中学生だとこんな大人の魅力を持つ女の人はいないだろうからね。

「ネギ君は今日からしばらくは前も言ったように裏方に回ってもらおうと思っておる。仕事に慣れてきたら他の先生方の授業を見学して雰囲気を感じてみるのもいいかもしれんう。本格的にクラス担任として先生をやってもらうのは1月からじゃが、タカミチ君出張の時はA組の臨時副担任としてやってもらうこともあるじやろう。その時はよろしく頼むぞい」

「わかりました」

「うむ。それではしずな君、ネギ君を案内してあげておくれ」

「ええ、それじゃあ行きましようか。ネギ先生」

「あ、あのー」

「ん？」

「僕は何をすればいいんですか？」

俺今までガン無視されてました。そりゃネギ君がメインなんだから俺のことは後回しなのは分かるけど、さすがに一切触れられないのは凹むぞ。

「おお、そうじゃったそうじゃった。ミソギ君には別の用件があるから、少し残っていて欲しいんじや」

「わかりました」

「え！ミソギさん、一緒じゃないんですか！？」

「うん、まあとりあえずはね。仕事の内容は後で教えるから、ネギ君は自分の仕事を頑張ってね」

「はい！がんばります！」

つーわけでネギ君としずな先生が退室したのを確認してから学園長

と向かい合う。

まあタカミチもいるから手荒なことはお互いにできないでしょ。タカミチは俺に対して悪い感情を抱けないから、明確な理由もなしに襲い掛かってくるとは思えないし、俺はここに来てから悪いことなんてしてないし。・・・エヴァちゃんがこの人達に俺のことを伝えてなければ、だけど。

「ふむ、残して悪かったのう」

「いえいえ。それで僕は何をすればいいんですか？個人的には2－Aの臨時副担任は僕がやってもいいと思うんですよ。ネギ君には裏方に徹してもらって」

「いや、それにはおよぼんよ」

「じゃあ何をするんでしょう？あ、僕前のところで購買の手伝いしてたんです。こんだけ大きい学園都市なんですし、購買とかもあるでしょう？結構慣れてますからうまく出来ると思いますよ」

「うむ、その話の前にだが、昨日何をしていたのか教えてもらってもよいかの？」

「昨日・・・ですか？」

なんだ？もしかしてエヴァちゃんと遊んだのがバレたか？まあ彼女は危険人物だから関わるなとかそういう感じかな。まあ何かを言われるまでは知らんぷりしよう。

「麻帆良を見て回ってましたよ。すごい街ですから一昨日の半日だけでは見きれなかったもので。あ、もしかしてネギ君と別行動とってたのがまずかったんですか？」

「いや、そうではなくてじゃの。ふむ、そうか。まあ麻帆良を堪能してもらっているようで何よりじゃ。で、君の仕事じゃったの。この事態じゃからネギ君は仕方ないが、教育の場にあまり素人を入れるのもよくないんでの。警備員や清掃員として働いてもらおうと思

っておる。よいかの？」

却下。先生なら最高、購買でもまだ良かったが、清掃員とかじゃ完全に女子中学生との出会いの場がなくなるじゃねえか。適当な言い訳して他のに変えてもらえないかな。

「僕はいけませんけど、ネギ君の付き添いですから、やっぱりネギ君の側で補佐とかのほうがいいんじゃないですかね？」

「それは大丈夫じゃ。本職の先生であるしずな先生がしっかり面倒を見てくれるじゃろう」

ちっ、だめか。うーん、どうするかな。『大嘘憑き』はあくまでなかった事にするだけだ。この爺が俺にあまり好意的じゃない感情を持っているのはさすがの俺でも分かるが、それをなかった事にしたところで俺が教師になれるとは限らん。最初から俺を清掃員にするつもりで用意をしていたのなら、ただ俺を信頼しているという理由だけじゃ別の役職を与えてはくれないだろう。

購買にはさせてもらえるかもしれないが、せっかく大嘘憑きを使うんだったらやっぱり教師にはなりたくない。だからそれを使うタイミングは今じゃない。とりあえずは諦めるしかないか。

「わかりました。じゃあ今日は何をすればいいですか？」

「うむ、今日は他の清掃員の人に仕事について教えてもらってほしい。その場所まではタカミチ君に案内してもらおう。では、よろしく頼むぞい」

「了解しました。高畑さん。案内してください」

「うん、それじゃあ行こうか」

俺達も学園長室から出る。道中タカミチとどうでもいいことを話し合いながら、どうやって教師になろうか考えていた。

「それで、あやつをどう思う？」

禊と二度目の対面をし、またも釈然としない気分になりながら、近右衛門は隣室に控えさせていたエヴァンジェリンに声をかけた。

「ふん、何だジジイ。私の助力が必要だというからきてやったのに、別に何の脅威も感じん男だったではないか。英雄の息子の護衛としてきているのなら拍子抜けだが、あれなら特段警戒する必要もないんじゃないか？」

エヴァンジェリンは、隣の部屋から遠見の魔法で見た禊のことを酷評する。

勿論彼女は禊が何の脅威にもならない男どころか、人間ですらないことを知っている。だがそれをこの眼の前の爺に教えてやる必要はない。アレを敵に回すと厄介なことはその身を持って味わっている。こんなところで何の徳にもならない裏切り行為をするくらいなら、何も知らない愚者を演じ続ける方がいいと考えた結果である。

「昨日、彼を一人の魔法先生に尾行させたのじゃが、トイレに入っただけの姿を消してしまっただけ。転移術式のようなものを使っただけなんじゃろうが、魔法行使の痕跡が何もなかったんじゃ。ああ見えて

彼はそれなりの使い手あることは間違い無いじやろうな」

「そのトイレ、あの男以外には誰もいなかったのか？」

「いや、ミソギ君が入った後も何人かが出這入りしていたぞい。それで不自然なことがあってのう」

「ん？なんだ？」

「ミソギ君がいなくなっていることに気づいた先生が、その間にトイレから出てきた人を探して話を聞いていたんじやが、途中で連絡が来なくなつての。不思議に思つてこっちから連絡してみたら、自分がそんな仕事をしていたことすら忘れていたんじや」

「・・・ほう。記憶を奪われたのか？」

「そうとしか考えられんのじや。だが彼も魔法使い、そう簡単にそんな魔法にかかるとは思えないのじやが・・・」

苦悩する表情を見せる近衛門とは別の意味で、エヴァンジェリンも疑問を感じていた。

奴に聞いた能力は、相手の動きを制限し、単純な動作なら強制させることができるというものだった。勿論悪魔であるなら他の魔法も得意なものはあるだろうが、メインの能力はそれらしい。現に力の戻っていた私ですら動けなくなるほどの威力であった。

だが、魔法使いの記憶を操作するのは、本来の能力でない、ただ得意程度のレベルでは不可能だろう。

とすれば、奴は恐らく自らの能力をすべて私に披露したわけではないとしか考えられない。

これは探りを入れる必要があるな。

「エヴァ。これでも彼が無害であると思うか？」

「・・・ああ、少しは注意したほうがいいかもしれないな。で、それでどうするつもりだ？」

「うむ、エヴァに彼の監視を頼みたいんじや」

「は？」

「いや、四六時中見張っているというわけではない。ただ、彼に何か不穏な動きがありそうならばそれを止めて欲しい。それが無理そうならタカミチ君や儂に報告して欲しいんじゃない」

「いやだね。私に何の得もない」

「もし引き受けてくれるのなら、君がネギ君に仕掛けるとき、余程のことをしない限り邪魔はせん」

「・・・ほう。つまり、私がこのくだらん呪いを解く事を黙認する？」

「ああ。ネギ君がお主を止めてくれればそれでよし。それが駄目でも、本来であればもう解けているはずの呪いじゃ。もういいじゃろう」

「はっ、いいだろう。引き受けてやるよ、そのくだらん仕事を。そのかわり、私があのかぎを襲うときの邪魔はするなよ？」

「ああ、じゃが、さすがに大怪我になりそうじゃったり、一般生徒に危害が及びそうなら止めさせてもらうぞ」

「最低限の吸血行為くらいは見逃せ」

「・・・仕方ないの。では、ミソギ君のことは頼んじゃぞ」

「ああ、まかせていろ。じゃあな、ジジイ」

そしてエヴァンジェリンも学園長室から立ち去っていった。

近衛門はとりあえず禊の事はどうにかなるだろうと一安心。そしてエヴァンジェリンも、禊側につく限りどうとでもなるような仕事と引換にどちらの陣営からでも干渉を約束してもらえた。

こうして表だけを見ればお互いが満足のいく結果でこの会合は終わった。

そう、表だけを見れば。

11話（後書き）

ところで、主人公の仮契約の相手は誰にするべきなのでしょう。

今のところ

・ネギ

・エヴァ

・茶々丸

・まだ本編未登場の2-Aのあの人

のどれかを予定してます。今のところ一番可能性が高いのがネギなんです。やっぱりネギだと誰得になるんでしょうか？もしくはこの4人以外の誰かと仮契約させたほうがいいんでしょうか？どなたか案をください・・・。

12話

何が悲しくてネギまの世界に来て、それも麻帆良まで来て掃除なんてしないといけないのか。めんどくさい。

「早急に何とかする必要がある！」

「それがわざわざ約束を一日早めてまでうちに来た理由か？」

「こんな夜遅くにアポ無しで女性の家に訪れるなんて、最低ですね」

あれ？ふたりとも反応が冷たいぞ？ここは俺の哀れな境遇に涙して、今後の作戦を共に考えるところじゃないの？

早速今日のことを報告しようとエヴァちゃんの家に向かった俺を迎えてくれたのはエヴァちゃんのため息と茶々丸ちゃんの暴言だった。

「要約すると、教師の仕事に就きたかったのに清掃員をやらされているから、どうにかして変えられないかという話か？」

「そうそう、どうしたら良いと思う？」

「知るか」

吐き捨てられた。

「いや、そんな事言わないでさ。一緒に考えようぜ」

「あー、そうだな。私とお前は共犯者だ。協力してやらんことないぞ」

「本当!？」

「だが、貴様が私に隠していることについて話せばの話だがな」

こちらを睨みつけるエヴァちゃん。いや、何言ってるのかわからな

いんだけど。

勿論心当たりがありすぎるからなんだけどね。

「隠してることなんてないよ」

「はっ、どの口がそれを言うか」

たしかに。

「私は腹の探り合いなぞ得意ではないし、貴様相手にそれをしたいとも思わんから単刀直入に言うぞ。今日、昼頃ジジイに呼ばれてな」

「ジジイ？」

「学園長のことだ」

「ああ、なるほど・・・え？なんで？」

「本来であれば私に頼るつもりはなかったらしいがな。あのジジイは貴様のことを警戒している。だから私に見張り役をやれと言ってきてな」

まじかよ。あのジジイ、俺のことをそこまで警戒してたのか。でも危なかった。大嘘憑きを使ってたらエヴァちゃんにバレてたかもしれないから、使わないで正解だったな。

「受けたの？」

「ああ。だがまあ安心しろ。今のところはあのジジイより貴様に味方してやる。ジジイには適当に言うておくさ」

「それは助かるね」

「だがその時奇妙な話を聞いてな」
「？」

「ジジイは貴様の後を部下につけさせてたらしいんだが、トイレで貴様を見失ってしまったようだな。しかも探している途中に何者かの仕業で自分がその任務についていたことすら忘れてしまったらし

い。これ、貴様の仕業だろう？」

「え、ええと・・・」

やべえ、それ絶対昨日の俺だ。下手なこと言うとボロが出るし、どうかごまかすべきか

ていうかあの俺に話しかけてきた先生、魔法関係者だったのかよ。

普通になかった事にしちゃった。よかった、存在ごと消さないでおいて。

「お前の能力は人の動きを制限したり、簡単な動作を強制させたりすることだそうだが、頭の中まで制限できるのか？」

「い、いや、ただの記憶消去の魔法だよ」

「ほう、魔法使いの記憶を簡単に消し、更に後遺症も一切ないほどの高等な記憶消去の魔法が使えらと？」

「そうそう、そのとおり。いやー僕って結構魔法が上手いからさあ」
「・・・」

真剣な目でこちらを睨みつけるエヴァちゃん。

おいおい、まさか顔を見て真偽を測ろうとしてるとかそんな感じか？ いやいや、さすがにそれは無理でしょう。

とは思ったが、顔に出さずにエヴァちゃんを見つめ返す。

「・・・ふん、今日のところはそれで誤魔化されてやる」

不意にエヴァちゃんが視線を外してそう言ってくれた。よし、なんかわからんがうまくいったみたいでよかった。

「ひとつ言っておくぞ。裏切られて嫌な気分になるのは貴様だけではない。貴様がこの先私の害になるなら容赦はしないぞ」

「冗談はよし子ちゃんだよ。僕がエヴァちゃんみたいなかわいい女

の子を裏切るわけじゃないか」

これは本当。大嘘憑きのことは内緒にするって決めてるし、攻略対象の娘には大嘘憑きを使いたくはないからね。

「で、貴様がどうやったら子守役になれるかだったな」

「そうそう、なんかいい案ない？」

「そうですね、ではこういうのはいかがでしょう。今すぐ麻帆良から出て行ってどこかの大学にでも入って4年間真面目に勉強して教員免許を取り、それから麻帆良で教鞭をとるというのは」

「なるほど。たしかにそれは間違い無く正解なんだけど、でもそれはちよつと無理かなあ」

「なぜですか？きつと貴方ならできますよ」

「うんありがとう。たしかにセンター試験まで後2ヶ月もあるから今の僕なら東大ぐらい普通に入れると思うんだけど、でもそういう理由じゃないんだ。出来れば今月中に何とかしたいんだよね」

「わがままですね」

「ごめんね」

とまあこんな感じで議論は進んでいった。

だがそのほとんどが先ほどの茶々丸ちゃんのように、どう考えてもただ適当に言ってるだけとしか思えない案ばかりだったのであまり実入りはなかった。

唯一使えそうな案はエヴァちゃんが提案したものだった。

「じゃあそうだな。私が小僧を襲って、偶然通りかかった貴様がそれを助けに入り、小僧を麻帆良で一人にさせておくのは危険だなんだといちやもんをつけて常に一緒にいれる役職に就かせてもらえばいいんじゃないか？」

「あー、それはさっきの孫娘を人質にして学園長を脅迫するっての

よりはかは現実的だね」

「ですがマスター。それだとネギ・スプリングフィールドに護衛がついて終わりになってしまわないですか？」

「まあそこはミソギの交渉次第だろ。私は知らん」

「それにエヴァちゃん。一回目の奇襲が失敗したら、次にネギ君を襲うときに警戒されるんじゃない？」

「二回目は貴様がこっち側につくんだろーが。ガキの相手をさせるつもりはないが、周りの奴らが妨害しないよう協力してもらうぞ」

「そうだったね、了解了解」

「今度の満月が5日後だから・・・3日後にでも仕掛けるか」

「うん？満月の時のほうが強いんじゃないの？」

「だから満月の前に仕掛けるんだろーが。なぜ私がわざわざやられるためだけに満月の日を待たなければならん。5日後を逃したら次は来月までないんだぞ。どうせ貴様に止められるためだけに仕掛けるんだ。満月じゃなくていいだろ」

「なるほど、弱いままネギ君に奇襲をかけるけど、弱いってことが発覚する前に僕がエヴァちゃんを止めればいいんだね？」

「ああ。まあ戦いは茶々丸に任せるからガキ一匹が私に触れることは出来んと思うがな」

というわけでこれで行くことに。これの後で学園長の俺への不信をなかった事にすれば案外すんなり行けるかもしれないな。

子供を心配する親の気持は学園長もわかるだろうし。まあ俺は親ってわけじゃないけど。

「夜にガキを外に連れていく言い分を考えておけ。そこは面倒みないぞ」

「おっけー。まかせといて」

まあネギ君のことだから俺がちよっと散歩に行こうって言えばおと

なしく付いてくるだろ。

「それじゃあ本題に入るか」

「本題？ってなんだっけ」

「明後日のハカセのメンテをどうするかだ」

「ああ、そういえばそんなのもあったね」

「・・・別に私は何の対策も打たずにメンテに連れていっていいんだぞ」

「ごめんなさい」

「まあいい。で、どうするんだ？」

ふむ、何も考えてなかったぞ。まあでも別に彼女も意地悪ってわけじゃないだろうから見ないでっってお願ひすればそれで済むと思うんだけど、それは駄目って言われたしなあ。

まあ一応提案してみるけど。

「よし、じゃあ僕もそのハカセって人に会って、そこでお願いしてみよう」

「何をだ？」

「中のデータに僕と茶々丸ちゃんの熱い一夜のことが入っているからそれは覗かないでっって「挟り取りますよ？」・・・普通に中の記録データを見ないでっってお願いするんだよ」

「だから、それだと逆に怪しまれるだろ。普段はそんなもの覗かないんだから、逆効果だ」

「あ、そうなの？じゃあ用心する必要もないんじゃないの？」

「たしかにそうだが、万が一ということもあるぞ」

「それに、ハカセは私の内部データの数値やモーターの回転数に異常があったとき、原因を解析するため記録データを見ることが過去数回ありました」

「なるほど。僕と出会ったことで茶々丸ちゃんに今までなかった感

情が芽生えたから、それがメンテの時にばれたらその理由を探るために記録を見られるかもって事だね」

「ええ。まさかロボットである私がこんな感情を持つなんて」

「それが愛ってやつだよ」

「いいえ、嫌悪です」

「まあとりあえず僕も一緒に行って茶々丸ちゃんのメンテを見張ってようかな」

「それでどうする気だ？」

「記録を覗きそうになったら止める」

「どうやって？」

「能力を使って体の動きを止めて」

「・・・さすがにそれはどうなんだ？」

「大丈夫だよ。別に動けなくしてから注意するだけだし、害はないよ」

「はあ・・・。わかったよ。私の方から適当な理由をつけて覗かれんようにしておく。それでいいだろ」

「えー、エヴァちゃんじゃあ激しく不安なんだけど」

「・・・じゃあ勝手についてこい。ただ向こうで変な真似をしたら殺すぞ」

やばい、エヴァちゃんのイライラがマックスだ。さすがにふざけすぎたか。

「わかった。それじゃあ一緒に行こうか」

「メンテは明後日の放課後からだ。5時ぐらいからだな。だからそれまでは私の前に絶対顔を出すな。来たら潰す」

「じゃあ明後日にこの家に来ればいい？」

「いや、帰って来ないから適当に探せ。見つけろ」

「・・・了解」

迷子センターで呼び出せばきてくれるかな。

13話

家へ帰りネギ君の話を適当に聞き流して、翌日は真面目にお掃除を頑張り、更にその翌日も夕方までは普通にお掃除をして、そして放課後となった。

そこ、カットがひどいとか言わない。だってこの間は女の子との絡みがなかったんだからしょうがないじゃないか。エヴァちゃんには会うなど言われたし、掃除の時だって10歳児の先生と同居という事情を鑑みて、シフトを昼頃、つまり皆が授業中の時の街中の掃除にしてくれたもんだから女子中学生となんて出会えるはずもない。早朝の掃除だったら新聞配達してる娘と知り合えたかもしれない。たのになんてありがた迷惑をしてくれたんだ。

閑話休題。

さて、エヴァちゃん達はどのへんにいるのかな？

とりあえず麻帆良大学工学部の場所を調べて玄関で待つことにする。

・ ・ ・

現在午後6時少し前。

メンテの始まる5時はとうに過ぎてしまっているがエヴァちゃん達の姿はまだ見えない。

いや、おかしいでしょ。

仕方ないので中には言って学生風の人に話を聞いてみる。くそつ、何で男なんかに声をかけなきゃいけないんだ。

「あの、すみません」

「ん、なにかな？」

「えっと、知り合いであるエヴァンジェリンさんと茶々丸さんが今日ここでメンテをするっていうから見学に来たんですけど、ハカセさんの研究室ってどこですか？」

「ああ、ハカセならこの24階の一番大きい研究室にこもってると思うけど」

「ありがとうございます」

まああたりまえだが何の問題もなく会話終了。即行でハカセちゃんの研究室へ。

「失礼しまーす」

ノックして声をかけ中に入る。
そこにいたのは

「む、きたのかミソギ」

退屈そうに寝転がりながら本を読んでいるエヴァちゃんと

「あれ？どちらさまですかー？」

なんかよくわからない機械を片手にメンテ中の白衣の少女（多分ハカセちゃん）と

「・・・・・・・・・・」

上半身裸の茶々丸ちゃんだった。

「ごちそうさま茶々丸ちゃん。それはそうと何で二人とももうここにいるんだい？」

「ああ、中に入ろうとしたら貴様が入口の近くで待ち構えてたから仕方無しに裏口から回りこんだんだ」

「え？なんでそんなこと」

「別にいいだろ、最終的に合流できたんだから」

「ああ、貴方がミソギさんですか。エヴァさんから話は聞いてますよ」

「へえ、どんな話だったのか気になるね」

「ええと、たしかエヴァさんと茶々丸のストーカーなんだとか」

「・・・まあ、間違っではないかもしれないけど正解とも言いがたいね」

「なんだ、わかってるじゃないか」

はははは、と和やかに談笑。ううむ、やっぱりハカセもこうして見ると非常にレベルが高いぞ。

たしかこの人、研究室に自分のパンツ置きっぱなしにしてた気がする。・・・すばらしい！

「・・・ところで、なぜ貴方はこちらを凝視しているのですか？」

「愚問だな茶々丸ちゃん。目の前に上半身裸の女の子がいる。それを凝視しない奴は男じゃないね」

「ミソギさん、茶々丸をあんなまりそういう目で見ないように。これでもまだ2歳なんですから」

「誤解だよハカセちゃん。何も僕は茶々丸ちゃんを性的な目で見ていたわけじゃないんだ。かがくのちからってすげー！って感動してただけなんだよ」

「はあ、そうですか」

あれ？ポケモンってこの世代じゃなかったっけ？それともネギま世

界にはないのかな？やっぱり講談社の世界ではポケモンは存在してはいけないのかもしれない。

「と、そんなことより、なんか急にモーターの回転数があがってる。茶々丸、状況はどう？」

「それがその、奇妙な感覚が・・・どう言語化すればいいのでしょうか・・・おそらく、苛々しているというのが、その、妥当かと」

「ええっ！？苛々している！？人工知能が苛々ってどーゆこと！？他にはなんかあるの？」

「胸の主機関部辺りがもやもやして、落ち着かないというか・・・」

「茶々丸がこんな反応をするなんて、一体どこに異常が・・・」

「ねえねえ、それってもしかして、恋じゃないかな？」

「それは違うだろ」

「それはありえません」

「それはないんじゃないですか？」

「・・・ああ、そう」

原作でも見たような景色だったから同じ展開に持つてこうとしたけど、駄目でした。全否定って・・・。

「まあなんにしても、茶々丸に何かしら感情のようなものが芽生えている事は確かかなそうですね」

「その感情がlikeなのかloveなのかが問題だね」

「hateだと思われます」

「それが出始めたのは数日前からみたいだね・・・よし、茶々丸。原因探るから、ちょっと記憶ドライブを見せてもらおうよ」

あ、まずい。止めないと。

「あー、ハカセ。悪いんだが、それはやめてもらえるか？」

と思ったらエヴァちゃんに先をこされた。

「？ どうしてですか？」

「ちょっと見られてはまずいものが入っていてな。お前にも超にも、もちろん他のやつにも見てほしくないんだ。魔法関係で少し、な」

「まあ、いいですけど、茶々丸もその方がいいの？」

「・・・ええ、私としてもその方が助かります」

「じゃあわかりました。そっちは見ません。そのかわり他のところは徹底的に調べますよ！さーて、覚悟してよ茶々丸う」

「了解しました」

「近いうちにに軽く戦闘するつもりだから、いつもより頑丈にしてくれ」

「まあエヴァさんの物ですから強くは言えませんが、あんまり乱暴にしないでくださいよ」

「大丈夫だよ、心配するな」

あれ？俺がいなくても全然丸く収まったね？俺いらないじゃん。てゆうーか全然怪しまれてないじゃん。エヴァちゃん情報あてになんねー。

その後何事も無く数十分ほどでメンテ終了。その間俺はハカセちゃんと談笑しつつ茶々丸ちゃんを眺めてるだけだった。エヴァちゃんは漫画読んでた。

「さて、終わったし帰るぞ、茶々丸」

「はい、マスター」

「それじゃあ僕もお暇しようかな」

「あ、ミソギさん、ちょいちょい」

帰ろうと立ち上がったらハカセちゃんに手招きされた。口で手の動

きに合わせてちょいちょい言ってるのがすごい可愛かった。

「何かな、ハカセちゃん」

「茶々丸のことなんですけど、これからも側にいてあげてください」
「言われなくてもそうするつもりだけど、どうして？」

「あの子、ロボットだから、本来なら開発者である私と主人であるエヴァさん以外の人は同じにしか感じないんですよ。優しい人格がプログラムされてるから誰にでも優しいけど、それは優しい人間の真似をしてるだけで茶々丸の行動じゃないんです」

「えーと・・・どういうこと？」

「あの子は子供と遊んであげたり猫に餌を上げたり、結構皆の人気者なんですよ。でもそれは私がもしロボットであることがばれても皆に受け入れてもらえるような優しい人格をプログラムしたからなんです。あの子がそういう性格に作られたからそういう行動をとってるだけ」

人格をプログラムってできるの・・・？とは思ったがなにやらそんなことを訪ねていい雰囲気ではなかったので自重。

「皆が同じに見えるから、皆に同じ優しさを与えてるんです。誰に対しても特別な感情は抱かない。私とエヴァさんにだって、開発者と主人だから従ってるだけで特になんとも思っていないかもしれないです。でもそれが当然なんです。ロボットなんですから」

「まあ、言ってることはわかるよ」

「けど、貴方だけは違うようですよ、ミソギさん。あなただけは特別みたいです」

「え？それってつまり・・・」

「はい、茶々丸はなぜか、あなたのことだけ特別に嫌っています」
「・・・」

・・・嬉しくない。

「もちろんそれが本当に感情なのかはわかりません。ですがもしロボットに感情が芽生えたなんてことになれば人類の歴史に名を残す大発見です。ノーベル賞ものです」

茶々丸ちゃん単品だけでもノーベル賞ぐらい余裕でいただけだと思いますけど。あ、魔力とかも使われてるらしいから無理なのかな？

「だから、それが本当に感情なのか検証するためにより多くのデータが必要となります。なのでミソギさんは出来る限り茶々丸の側に居続けて嫌われ続けてください。それが明日のロボット工学の発展につながります」

「・・・ずいぶんな要求をするね」

「あ、もちろん好かれてもかまいませんよ。少なくとも誰も同じに見られてる他の人よりは可能性あるでしょうし」

「まあいいけどさ。どちらにしろ側にいるつもりだったんだし、親の許可を得たと思えば」

「そう思ってください。じゃあお願いしますね」

「おいミソギ！いつまでくっちゃべってるんだ、とっとと来い！」

先に部屋を出ていたエヴァちゃんと茶々丸ちゃんがもどってきて声をかけてきた。

「それじゃあまた。何かありましたらいつでも来て下さい」

「わかった。またあそびにくるよ」

「遊びに来られても困るんですけど・・・」

よし、これで次からは堂々とここに来ることができそうぞ！
そんな感じでハカセちゃんと別れの挨拶をしてエヴァちゃんのもと

へ。

「もしかして、待ってくれてたの？」

「勘違いするな。お前に渡さなければならぬものがあっただけだ。ほら、いくぞ」

ツンデレゼリフだ！生では初めて聞いた！

そして建物を出てから俺に一枚の札みたいなものをさし出してきた。

「明日、あのバカのカギを襲うんだろ。夜にそいつをうまく一人になるよう誘導したらそれに魔力をこめろ。そうすれば私にその場所がわかるからそこに行く」

「なるほど、了解。じゃあ明日の夕飯は外食にしてその帰りにでも一人にさせるよ」

「そこんところはどうでもいい。まあせいぜい頑張れ。じゃあな」

エヴァちゃんは素っ気なく別れの挨拶をして、茶々丸ちゃんにいたってはこっちを見てすらくれなかった。いや、まあ、ほら、これも親しさの証みたいなあれだよ。

という訳で帰宅。若干遅くなった事に対するネギ君の文句を聞き流しながら明日の夕食は外食にしようと提案。（ちなみに普段はコンビニ弁当である。料理なんて面倒なものをしたくはない）すると、

「じゃあ、明日は土曜日で休みなんですから、どこか二人で行きましようよ！そのまま夕飯を外で食べればいいんじゃないですか？」

と、逆に提案された。

いや、なにがいいんじゃないですか？だよ、別に何もよくないよ、

とは思ったが、今日までうやむやにしていた『お願い』をこれって
ことにすればいいんじゃないか？と思ひ承諾。
こうして明日土曜日、ネギ君曰く『初デート』をすることになった。
おい、デートの意味知ってんのかコラ。

13話（後書き）

今回の話のもとにした75時間目は原作の話の中でもトップクラスに好きな話です。ただあの茶々丸の可愛さが表現できないのが残念でした。

14話

「ミソギさーん、こっちですよー！」

「あんまりはしゃいでると転ぶぞー」

ということで、俺はネギ君とお出かけをしていた。前回の麻帆良探索の時はタカミチがいたし、それ以降は俺がエヴァちゃんたちの方にずっと居たせいであまり一緒にいられなかったからだろうか、ネギ君のテンションは最高潮である。

てゆーか今10時ぐらいなだけどさ、こっから後12時間ぐらい外でぶらぶらしてなきゃいけねーのかよ。辛いぞ。

「お腹いっぱいですー」

「そうだね、もう歩きたくないね」

そしてそれから数十分後、朝食兼昼食をたくさん食べ過ぎたせいで動くのがだるくなってきた。まだ飯時には少し早いからお店は混んでない。しかし後1時間もすれば客でいっぱいになることは眼に見えている。だから先に言っておこう。ごめん。

「ねえネギ君。少しここで休憩していこうよ」

「こっつて、このお店ですか？」

「うん。お腹いっぱいになったら眠くなってきたやつてさ。ちよつと寝てもいいかな」

「ええー」

こういう所で時間を消費しておかないと夜になる前に帰ってしまうかもしれない。それじゃあ本末転倒だからね。

不満そうなネギ君は置いといてテーブルに突っ伏す。お皿を下げに来た店員さんの食い終わったなら早く帰れよオーラも気にしない。おやすみー。

「おっ、ネギ君じゃーん。やつほー」

と思ったら女の子の声がした。え？ネギ君もう誰か女の子とフラグ立てたの？

「あ、こんにちは朝倉さん」

しかも朝倉さん！？2－Aの子じゃん！

別に朝倉さんはそこまで好きなキャラでもなかったけど、ここで変な初印象は与えないほうがいい。ということできとりあえず起きる。

「おはようございます、ミソギさん」

「大丈夫、寝てないから」

「あれ？ネギ君、その人だれ？」

「前に話したじゃないですか、ミソギさんですよー」

「ふうん、この人がねえ・・・」

値踏みするような目で俺を眺める朝倉さん。うん、かわいいけどエヴァちゃんとかの時ほどの衝撃はないな。

「で、ネギ君、この子はだれだい？」

「朝倉さんです。ほら、前にお話ししたじゃないですか、職員室に押しかけてきてインタビューされたって。その人ですよ」

「・・・ああ、そんなことも言ってたね」

やべえ全然覚えてねえ。ネギ君の話を適当に聞き流しすぎたか？もしかすると他の子にも会ってる可能性があるな。あとでもう一度話を聞いておこう。

「どうもはじめまして。朝倉和美です」

「あ、どうもどうも、ミソギです」

「それって苗字ですか？名前ですか？ネギ君に聞いても教えてくれなくて」

「え？ええと、名前だけ・・・」

「そうなんですか。じゃあ苗字はなんていうんですか？」

「な・・・に・・・？」

苗字！？そういうえば今まで聞かれたことなかったよ。イギリスにいた頃はそういう事聞きそうな人には大嘘憑きで洗脳ひまぐいしてたし、こっちに来てからは俺の名前なんかどうでもいいよって人ばかりと出会ってたからなあ・・・。

でもどうしよう、苗字も球磨川を使いまわしちゃうか？でもそれだと芸がないって思われちゃうかもしれないし・・・。

「えーっと、ミソギさん、でいいですか？あの、苗字聞いてるだけなんですけど・・・」

「ちよっとまって！今考えてるから！」

「いや、苗字を考えてるって・・・」

うーむ、どうするか・・・。安心院にして好きな人と一緒になれたGOODENDにするか、それとも財部にして後輩との純愛TRU

ＥＥＮＤにするか、まさかの阿久根という禁断のＢＡＤＥＮＤにするか・・・。

・・・いや、俺は何を言ってるんだろうね？

真面目に考えよう。スプリングフィールド姓にしておけば親戚という設定が強固になるかな？でもこんなことでスプリングフィールドの名前を使ったらいろんな人から怒られそうだしなあ。

「あの、朝倉さん。実はミソギさんにはご家族がいないんですよ」

「えっ、そうなんですか？」

と、悩んでいるとネギ君が朝倉さんに何かを説明し始めた。

「というより、小さい頃にご両親に、その、捨てられてしまったみたいで・・・だから苗字に当たるものはもってないんですよ」

「そ、そうだったんですか・・・。すいません、嫌なこと聞いちゃって・・・」

「えっ？ああ・・・いや、気にしないでよ。僕もどう説明するべきか迷ってたけど、ネギ君に言ってもらえて助かった」

「あの、朝倉さん。新聞にはこのことは書かなくてくれると・・・」

「もちろん、わかってます。そんな事書いたりしませんよ」

「ありがとうございます」

うむ、ネギ君の様子を見ても、うまく誤魔化せましたよ！って感じがしないなあ。ってことは本気でそう解釈されてるのか？・・・まあいいか、別に不都合はないし。

「あの、それで・・・ミソギさんにあったらネギ君との馴れ初めを聞きたいと思ってたんですけど・・・いいですか？」

「それくらいならいいけど」

「じゃあ教えてください。そこは記事にしてもいいですよね？」

「・・・まあいいけどさ」

この子結構図太いな。

親に捨てられた子どもが成長して、別の子どもの面倒を見てるって絶対複雑な事情があるだろ！察しろ！

・・・いや、そんな事情ないけどさ。

にしてもどうやって説明すればいいんだ？まさか転生がどのとか言うわけにもいかないし、エヴァちゃんの時みたいに悪魔だからどうのこうの無理だろうし・・・。

そもそもネギ君自身は俺と一緒にいる事の原因にはどう解釈付けてるのかな。俺の存在に疑問に思うことをなかった事にしてるから、ただいるのが当たり前って言う風に思ってるんだろうか。よくわからん。

ちらりとネギ君を見てもただポワポワしてるだけだ。今回は助けを期待できそうもない。

なんかもうめんどくさくなってきたし、そもそもそこまで好きでもない朝倉さん相手になぜここまで真剣に考えなきゃいけないんだ。

「・・・いや、やっぱり人様に聞かせるようなことじゃないからやめておくよ。ごめんね」

「い、いえ、別にいいですよ」

「そのかわりネギ君の学校以外の私生活についてなら話してあげれるよ。新聞読者もそっちの方が知りたいんじゃないかな？」

「あ、じゃあお願いします」

ということで適当な話に変えてお茶を濁す。朝倉さんも俺に嫌な過去を思い出させてしまったとも思ったのか、深く追求することなく俺の話に乗ってくれたのでさっきのことはすぐ有耶無耶になった。

結局その後朝倉さんが自分のご飯を食べ終わるまで適当な話をし続け、店を出て別れるまでで少し情報を得ることができた。

麻帆良学園女子中等部に子供先生が来たという噂は結構広まっているらしい。ていうか朝倉さんが広めたらしい。うーん、他の生徒に広まるのは俺がネギ君の傍にいれる仕事につけてからが良かったんだけどな。最初からいたのとあとから来たのじゃあ皆の受け入れ具合も違ってくるだろうし。

まああの情報通の朝倉さんと今のうちに仲良くなれたのは良かったかもしれないな。これでネギ君の傍には俺がいるってことが広まってくれるだろう、多分。

ていうか朝倉さん、結局俺らと飯食ってたけど、もし俺たちに会わなかったら一人で食事だったのかな。別にいいけど女子中学生のうちからそれはちょっと寂しくないか？

それからしばらくは麻帆良の町を見て回り、娯楽施設に行ってみたりして時間を潰すことができた。あれ以降他の原作キャラに会うことはなかったが、それなりに楽しむことができたと思う。そしてそろそろ彼女を呼ぶ時間だ。

「今日は楽しかったですね、ミソギさん」

「そうだね。またこんなふうに遊ぼうね」

「じゃあ今度は僕、遊園地に行きたいです！」

「うん、じゃあ調べておくよ」

夕飯を食べた帰り道、呑気におしゃべりしてるネギ君。うーん、こんなに嬉しそうなところに水をさすのは悪いと思うけれど、まあ今日は助けてあげるから許してね。

ということであまりネギ君と距離を取ることにする。

「僕ちよつとトイレ行ってくるから、ネギ君はその公園で待ってよ」

「あ、僕もトイレ行きますよ」

「いいよいいよ、待っててよ」

「え、でも・・・」

「大丈夫、すぐ戻ってくるから」

「分かりました、待ってますね」

びっくりした、まさか付いていくと言われるとは思わなかった。男子と連れションとか誰得だよ。いや、女子とはできないけどさ。少し離れて、けれどあまり遠くに行く前にもらったお札に魔力を込める。よし、あと数分で来てくれるだろ。とりあえずトイレにでも行こうかな。嘘を付くのはよくないからね。

「ミソギさん遅いなあ」

トイレに行ったミソギさんを待ちながらぼんやりと夜空を眺める。月が綺麗だなあ。まん丸ってわけじゃないけど、もうすぐ満月になりそう。

「後2、3日で満月かなあ」

「正解だよ坊や。賢いじゃないか」

「え、だれ？」

ただの独り言に返事が返ってきた。驚いて声の方を向くと、僕と同じ年くらいにみえる金髪の女の子が一人立っていた。

「お前に恨みはないがな。呪いをとくためにその血が必要なんだ。悪いがもらっていくぞ」

「え、なにを・・・」

「いけ、茶々丸」

「はいマスター」

よくわからないことを言っている女の子が合図すると、今度はその子より大きな女の人が現れた。
え？なに？なに！？

「ほら、せいぜい抵抗しろ」

「う、うわ！」

突然女の人が殴りかかってきた。慌ててベンチから飛び降りて攻撃を避ける。更に殴りかかれるが、そこまで速くない。これなら普通に通避けられるかな。

「ほらほら、得意の魔法でも使ってみたらどうだ」

魔法？この人魔法関係の人なの？思わずミソギさんから以前頂いた魔法発動体の指輪を見る。これ、そういえば最近使ってなかったけど、今は襲われてるし、相手も魔法使いの人みたいだし、使うべきなのかな？

「ほら、隙だらけだぞ坊や」

「うぐっ！」

「あ、すいません」

それに気を取られていたせいで頬を殴られた。痛い。痛い。痛い。今まで喧嘩なんて子供の時にしかしたことはなかったし、魔法での戦闘もほとんどしたことがなかった僕にとって人に殴られるというのはほんとに久しぶりだった。痛い。

何で僕がこんな目に。ミソギさん、助けて。痛い。痛い。

痛みで抵抗する気力も魔法を使う気も無くなってしまった。というより、こんなに遠慮無く相手を殴れる人を相手するのが怖い。怖い。僕にできるのは、うずくまってミソギさんが助けに来てくれるのを待つことだけだった。

「あ？おい、まさか一発当たっただけでもう終わりか？お前本当にナギの息子か？・・・ったく、あいつが助けられたとかいうからどんなやつかと期待してみたらこれか。つまらん」

「マスター、相手はまだ子供です。そこまで言うのは酷かと」

「知るか。ていうか、おい。誰もこないんだが」

二人が何かを言っているようだけれど、僕にはよく聞こえない。せめてあの二人が会話に気を取られているうちにここから逃げようとするが、身体が震えてうまく動かない。

「あいつがこないんじゃ仕方ないよな、うん。ここで私が飲まなきゃ不自然だしな。こないほうが悪い」

女の子のほうがかっちに近づいてくる。なに？何をされるの？そういえばさっき血がどうか言ってた。もしかしてこの人、吸血

鬼なのだろうか。そして僕は全身の血を吸い取られて死んでしまうんだ。嫌だ。それは嫌だ。

でもどうしよう、今から魔法を発動させて間に合うの？それに僕が使える攻撃魔法なんて高が知れてる。それが吸血鬼相手に効くの？

「ふん、この期に及んで少しの抵抗も無しか。本当にがっかりだよ、ネギ・スプリングフィールド」

駄目だ、迷ってる暇があればとにかくやってみればよかった。でももう駄目だ。女の子の手がこっちに伸びる。そして、

「間一髪だったねネギ君。大丈夫かい？」

とても聴き慣れた声が聞こえた。

15話

やっべー、冗談でトイレ行ったらまさか本当にしたくなるなんて。しかもでかい方。

ということとでトイレで生物として当然の営みを終えて足早に公園へと向かう。到着すると、やば、ネギ君超震えてるじゃん。

いや、原作だともうちよつと強かった気がしたけど……。村の襲撃も父親からの杖もないから父親探しモチベが低い↓修行をあんまりしない↓攻撃魔法とかもあんまり覚えてないし実戦経験もない、みたいな感じなのかな？

まあどうでもいいけど……。って、エヴァちゃん完全に血吸う感じがやねえか！

ダッシュで近づいてエヴァちゃんのネギ君の首に伸ばしていた手を取る。そして一言。

「間一髪だったねネギ君。大丈夫かい？」

キマった！超かっこいい！多分ネギ君からすればピンチになったところに颯爽登場したように感じられただろう。別にネギ君からの評価とかどうでもいいけど、良いに越したことはないからね。

「可愛らしいお嬢さんがた、一体僕の連れに何のようかな？」

「マスターどうしますか？気持ち悪い男が出てきましたか？」

・・・えっと、それは本心じゃないんだよね？ただ親しい様子を見せると怪しまれるから、あえて突っぱねてるだけなんだよね？

「ちっ、仕方ない。今日は一旦引こう。次は見逃さんぞ、ネギ・スプリングフィールド」

あ、行ってしまったわ。仕方ないので後ろで震えているネギ君に振り向いて声をかける。

「で、結局あの子達はなんだったんだい？」

「いえ、僕にもわからないんですけど・・・なんか、僕の血が必要だとか言ってる・・・」

「ふうん、血が必要ねえ・・・」

「や、やっぱり、吸血鬼さんとかなんでしょうか・・・」

「かもしれないね。まあはっきりそうとは言えないから、明日学園長にでも話を聞きに行こう」

「わかりました」

よし、これで明日学園長のところに言って難癖つけて、ネギ君と一緒にいれる仕事につかせてもらえればオッケーだ。駄目って言われなくても俺を疑う心をこんどこそなかったことにしちゃえば、ただ俺がネギ君の身を案じているだけなんだと思って配慮してくれるだろう。なんかこの言い方だと俺がネギ君大好きみたいなんだけど・・・ちがうからね？

「じゃあまあとりあえず今日は帰ろうか。最後にちょっと横槍が入ったけど楽しかったね」

「はい！」

次の日、ネギ君を置いて学園長室までやってきた。最初は色々便利だろうから連れてこようかと思ったけど、それ以上におもりが面倒

そうなのでおいてきた。もし何かあった時に『大嘘憑き』を使うことになると思うけど、これ以上ネギ君相手に使うのもちよつとかわいそうな気もするし。今更だけどな。

「失礼します」

「ああ、待っておったよ」

お？アポ無しで行ったから驚かれるかと思ったけど、なんか俺が来るのがわかってたみたいだな。

「待っていたとは？」

「実は事前に、昨日エヴァンジェリンが君たちを襲撃したという報告があつての。そのことで来たんじゃろう？」

「まあ、そうですけど」

もしかして昨日付け回されてたのか？昨日は問題がある行動はとってない・・・はずだよな？本当にトイレにも行つたし、エヴァちゃんとも無駄な会話はしてないし。

「それについては僕の不手際じゃった。申し訳ない」

「いえ、謝罪はいいんで、詳しい説明をお聞かせくださいますか？」

「ああ、それについては本人も入れて説明しよう」

「へ？」

学園長室の奥の扉から現れたのは不機嫌そうな顔をしたエヴァちゃんと茶々丸ちゃんだった。

や、やべえ・・・いざとなったら『大嘘憑き』を使おうと思つてたけどできないじゃないか。エヴァちゃんにコレのことは知られたくないし、使つたらなんか感づかれそうだしなー。仕方ないな、これはもうノリで攻めるしかない。

「学園長！これは一体どういうことですか！？なぜこの二人がここに！？はっ！まさか学園長もグルだったんですか！？」

「お、落ち着いてくれミソギ君。これからその説明を」

「落ち着いてられますか！ネギ君を襲うような危険人物ですよ？なんでそんな人がこんなところに・・・！」

「大丈夫だよミソギ君。今は僕もいるからもし何かあっても僕が何とかするさ」

と、二人の後ろからタカミチも現れた。

くっ、そんな事言われたら一旦抗議を中断するしかないじゃんか。一応あの人は学園最強で通ってるわけだしな。

「・・・ふむ、落ち着いてくれたかの？」

「ええ、まあ高畑さんがいるなら大丈夫だと信じましょう」

あ、でもここでやめちゃったら本当にただ取り乱しただけのチキン野郎みたいじゃん。なんか恥ずかしい・・・。

「それじゃあ説明するかの」

と言って学園長はエヴァちゃんの過去を話し始めた。まあ全部知ってるような話だったから聞き流す。

「と、いうわけなんじゃ」

「へえ、そうなんですか。でもそれは僕達に何の関係もないですよね？」

「ふおっ？」

「ていうか、そんな危険人物を野放しにしておかないでください。ネギ君のような重要人物が来るんだったら普段以上に警戒するのは

当然ですよ？それすらできないんですか？今回の件は明らかに学園側の職務怠慢です。管理不届きです。事前に防ぐことはできなかったのですか？もしくは僕たちに前もって知らせておいてくれればこのような事態にはならなかったかもしれません。もしあそこで僕が間に合わなくてネギ君が死んでしまったらどうするつもりだったのですか？死ぬまではいかなくてもなにか障害が残るダメージをおってしまったらどう責任を取るつもりだったのですか？まあエヴァちゃんにだったらそれもご褒美かもしれないですけど、それはともかく。今回の件で僕の学園に対する信頼は地に落ちました。もしかしたら他に隠していることがあるかもしれませんし、更に危険な人物が潜んでいるかもしれません。なので僕は提案します。僕を今のような清掃員ではなく、ネギ君を補佐する職務に就かせていただけませんか？今回の件で学園側の警備がザルなのはよくよく理解しました。なのでもういいです、自分の身は自分で守ります。ただネギ君が仕事中に一人になってしまった時に襲われたいとは限りません。なので僕に護衛を含めてネギ君の補佐をさせて欲しいんですがいかがでしょう」

「う、うむ・・・」

「うむ？それは了承したということですか？」

「そ、そういうことじゃないよミソギ君。急にたくさん言われて驚いただけさ。ちょっと考えさせてくれないかな？」

む、タカミチめ。また変なタイミングで横槍を入れてきおって。

せっかくこつちがまくし立ててよく考えさせずに頷かせちゃおうと頑張ったのに。

「ネギ君にはこつちから護衛をつけるよ。もうこんなことがないよにさ」

「いえ、それはもはや信用できません。高畑さん個人は信用していますが、学園自体が信用できませんので。自分で守れば安心アッコ

ールワットです」

タカミチがなんか言ってるが拒否。それはダメだって言ったばかりだろ。あの長台詞ちゃんと聞いてなかったのかよ！

「ふむ・・・そうは言ってももう。ミソギ君にやらせることが出来る仕事のう」

「さすがに10歳児よりは仕事できますよ？向こうに長年住んでたんで英語もできますし、他の教科も中学生レベルを教えることぐらいならできます」

ていうか『完成』のおかげで学習能力も格段に上がってるんだよね。

「ん、じゃがのう・・・」

ちっ、まだ渋るかこのジジイ。仕方ない、奥の手を使わせてもらおう。

「わかりました、それすら無理だというのならイギリスに帰らせて頂きます」

「ふおっ！？いや、それじゃと魔法使いの修行が達成できんぞい」

「かまいませんよ。ただ日本で教師をやるだけならともかく、こんな人物が側にいたのではロンドンで占い師とかに比べて危険すぎます。その上勤め先も信用できず、こちらの要求も一切受け入れてくれない。話になりませんね」

「じゃ、じゃがのう・・・」

「それに、かのサウザンドマスターは魔法学校中退だそうじゃないですか。この話をすればネギ君も僕の案に賛成してくれると思いますよ」

「む、むう・・・」

「す、少し待ってもらえるかな」

俺の言葉を聞いてさすがにやばいと感じ始めたのか、タカミチと学園長がコソコソ相談し始めた。

この隙に俺はエヴァちゃんの方を向き、やった、うまく行きそうだよ、と喜びの意を込めてウインク。中指突き立てられた。かわいいなあ。

「それじゃあミソギ君」

「あ、はい」

和んでたらタカミチがこっちに話を振ってきた。もう結論が出たのかな。

「君をネギ君の補佐役に任命するよ。兄的立場の人物だって言えば皆納得してくれるだろうし、10歳児だからね。君の心配もわからなくはないから」

「ありがとうございます。そう言っていただけだと嬉しいです。ですが・・・」

ちらりと学園長の方を向く。不満そうだな、おい。

「大丈夫ですよ、学園長。彼の人となりは僕が保証します。悪い子じゃないですよ」

タカミチが学園長にフォローしてくれる。なるほど、学園長を説得できたのはタカミチのおかげだな、ありがたい。出会った時に『大嘘憑き』使っというてよかったよ。

「それじゃあ僕はそろそろ失礼しますね。昼間だから大丈夫だとは

思いますがネギ君を一人置いてきてしまっているのだから

「ああ、明日はネギ君と一緒に職員室まで行ってくれ。皆には僕から説明しておくから。7時半には居てくれると助かる」

「はい、わかりました」

しかし、本当にこんな作戦でうまくいくなんてない。まあうまくいったんだしどうでもいいか。

とりあえず一旦ネギ君と合流して、夜になったらエヴァちゃんの家へいこう。明日の打ち合わせもしなきゃいけないしね。

ていうか結局エヴァちゃん一言も喋らなかったんだけど、一体何しに出てきたんだ？

15話（後書き）

今回はあくまでつなぎ、次回からようやく学園編が開始されるはずです。

まあ本格的に始める前にエヴァ関連のことを精算する必要がありますが。

16話

部屋に戻りネギ君に今日の報告をして、じゃあ明日からはずっと一緒ですね！ってすごい喜ばれたのに若干引きながら返事をし、そんなネギ君を相手にしているうちに夜になった。と言ってもまだ7時ぐらいだが。ちょうど夕飯時だな。

「ネギ君、僕はちよつと夕飯買ってくるよ。適当にコンビニ弁当でいいよね？」

「あ、僕も行きますよ」

「いいよいいよ、すぐ戻るから待ってて」

適当な理由をつけて部屋から出て、エヴァちゃんの家に向かう。入れてもらう時茶々丸ちゃんから嫌な目で見られた気がするがきつと気のせいだろう。

「それで、明日のことなんだけど」

「ジジイにあんな大口叩いておいて大丈夫なのか？その翌日に坊やを守れなかったとか」

「だから、ある程度守れなくても仕方ない状態を作らなくちゃなんだよ。とりあえずエヴァちゃん、その見た目は変えることってことできる？」

原作で幻術を使い見た目を変えることができるのは知っているが、まだ一回も目の当たりにはしていない。一応聞いておこう。

「ああ、できるぞ」

「じゃあ、それで姿を変えておいて。出来れば大人に見える姿がいいな」

「ん？なぜだ？」

「以前と同じ姿なのに守れないと学園長に怪しまれるでしょ。見た目が違ってればまだ言い訳もつく」

「じゃあなぜ大人なんだ？」

「僕の趣味」

「死ね！」

エヴァちゃんからはなんか汚いものを見るような目で見られたけど、今のロリ姿に興奮するよりは大人の姿に興奮する方が正常だよね・・？

まあ、趣味っていうのは方便なんだけどね。漫画で見た限りでは大人バージョンより元のロリ姿のほうが何百倍も可愛かったし。ただエヴァちゃんに本当の理由を言うわけにはいかないんだよ。だって表面上は協力的に振る舞うけど、実際にエヴァちゃんの登校地獄が解かれちゃったら夢の学園生活が送れなくなるわけだし。だから明日の襲撃はなるべく俺の管轄外のところで失敗してもらわなきゃいけないんだよ。まあそのために必要ってわけだ。不可欠とは言わないけどあったほうが成功しやすい要素ってやつだな。

「まあそう言わずにさ、頼むよ」

「はあ、まあ姿を変えるのは賛成だし、最もよく使っていた幻術が大人になるものだからお前の言うとおりにしてやるよ。よかったな」

「それともうひとつ、茶々丸ちゃんをこっちに預けて欲しいんだ」

「はあ？」

「嫌です」

くっ、茶々丸ちゃんには即答された。どうせそう言うだろうとは思ってたけどやっぱり傷つく。

「まあこれには理由があるんだよ。明日僕とネギ君が夜出歩してる

時に僕が、怪しい人影がある、とか何とか言ってネギ君をおいて猛スピードで飛び出していくからさ。その先に茶々丸ちゃんを置いて欲しいんだよ。そこで僕と茶々丸ちゃんが戦闘、エヴァちゃんとネギ君が戦闘。僕が予想外に強い茶々丸ちゃんに苦戦してる間に、あわれネギ君は血を吸われてしまいましたとさ、ってね」

「・・・そんな作戦でうまくいくのか？」

「大丈夫だよ。学園長は俺の実力なんか知らないし、唯一この学園でそれを知ってるタカミチも僕のことまでは知らないしね」

『言葉の重み』のことを知っているのは今のところエヴァちゃんと茶々丸ちゃんだけだ。『大嘘憑き』に関してはだれも知らないはず。

「なら・・・まあいいか。茶々丸は貸してやる。変なことはするなよ？」

「大丈夫だよ。万が一監視があつたら嫌だから一応戦闘もどきはするけど、怪我はさせないようにするさ」

「そうか。なら茶々丸、こっちは殺す気で行け」

「はい、マスター」

「・・・まあいいけどさ」

実際その方が自然だからね。下手に手を抜かれるよりはいい。茶々丸ちゃんが全力で来ても大丈夫だと僕の事を信頼してくれているのだろう。・・・そうだよね？

「それじゃあ昨日の札と同じやつちょうだい」

「ああ、ほら」

「ありがと。走り出す前にこれ使うよ。じゃあ今日はこのへんで」

「何だ、もう帰るのか？」

「ああ、ネギ君が待ってるからね。・・・もしかして寂しいの？一緒にいてっお願いしてくれるなら僕は何時間でもここにいますんだ」

けどなあ」

「はっ、死ね」

鼻で笑われた上に罵倒された。

「副担任？」

翌日、僕とネギ君が言われた通りに職員室へ行くと、そこで待ち構えていたタカミチからそんな話を持ちかけられた。

「本当はもうしばらく様子をみるつもりだったんだけど、明後日から急に出張が入っちゃって。まあミソギ君がネギ君のフォローをしてくれるなら問題ないかと思ってね。それに、ネギ君もしずな先生から色々教えてもらったろう？それと大して変わらないから大丈夫だよ」

「は、はあ」

ふむ、2－Aメンツとの接触はまだ先かと思ってたが案外すぐできたな。こんな事あのジジイが許すわけがないからタカミチが取り計らってくれたんだろう。感謝感謝。

ネギ君はちよつと戸惑ってるみたいだけど、まあ大丈夫でしょ。

「それで高畑さん、僕たちはどうすればいいんですか？」

「今から朝の打ち合わせ、それが終わったら教室に向かおう。紹介ぐらいはするけれど、そのあとのHRは君たちに任せようかな」

「それじゃあ高畑さんは？」

「うん、とりあえず最初は僕も一緒にいたほうがいいだろうからね。今日明日と君達を見守ってるよ。でも明後日は出張に行かなきゃいけないから見てられないけど、そこは頼んだよ？」

「わかりました」

とりあえずは朝の打ち合わせ。まあ俺はただの補佐なのでそこまで真剣に聞かなくてもいいだろ。

ネギ君はもう他の先生方と打ち解けているが俺は初対面の人が多いのでおとなしくしておこう。

そして十数分後、とうとう2－Aへ赴く時となった。ちよーたのしみ。

高畑先生引率のもと2－Aの教室へ向かう。原作と違って朝倉さんが既に子供先生のことを知ってるから、多分クラスの皆にも知れ渡っているだろう。果たしてそれが吉と出るか凶と出るか。ま、どうでもいいけどさ。

「さあネギ君、ここが君のクラスだよ」

「は、はい・・・うう、緊張します」

「大丈夫だよ、そんなに固くならないでも。みんないい子だからさ」

「わ、わかりました・・・」

そしてネギ君が扉を開けると、

ボフツ「うわっ」

案の定上から黒板消しが降ってきた。ていうかネギ君、それはさすがに気づけよ。タカミチも教えてやれよ。まあ俺も教えないんだけどさ。

「ケフケフ、い、いや、あはははは。ひっかかっちゃったな・・・」

恥ずかしさを紛らわすために苦笑いするネギ君をみて、クラスの女子達が一斉に

「「「キャアアアアアアアアア！ほんとに男の子だ！！かわいいいいい！」」」

とまあ大はしゃぎである。ネギ君の方に駆け寄って色々質問しだす女の子達。いやーはっはっは、この後どうやって見た目普通の俺が入れと？

まあその大騒ぎの中にも例外、というか不参加の人も結構いる。

もみくちやにされてるネギ君を横目にクラスを一望してみる。騒いでる方はめんどくさいから省略するとしても残ってる組ぐらいには注視するべきだろう。

エヴァちゃんは席にむすつと座ってネギ君ではなく俺の方を見ていた。目を向けたらそらされたけど。

茶々丸ちゃんはネギ君にも僕にも興味なしのようだ。どこ見てんのかわからん。ところでネギ君に何の説明もしてないけど、この二人がいて大丈夫かな？ビビって取り乱さないだろうな。

刹那ちゃんは席から動いてはいないもののネギ君の方を見つめてるな。まあアレはネギ君を、というよりネギ君の周りで騒いでる木乃香ちゃんを、といったほうが正しいだろうね。

千雨ちゃんはなんかこう、形容しがたい顔をしてる。驚きと呆れと怒りを足して2で掛けたような表情だ。

龍宮さんは興味深そうに眺めてるだけ。

超ちゃんは最初ネギ君の方へ行こうとしたみたいだけど俺を見て動きを止めた。なんでだろう。

そして一番前の一番窓側の席を凝視するが・・・駄目だ、見えない。行けるかと思ったけど駄目みたいだ。まあそんな事もあるうかと対策は練ってあるので数日後には見えるようになってるだろう。

という訳で人間観察もそろそろ終わりにして中に入ることにする。ちなみにタカミチの馬鹿はニヤニヤ見てただけだった。

「はいはい。みんな、そろそろ席に戻ってくれないかな」

大声で呼びかけると、・・・だれ？みたいなしらけた空気が一瞬流れる、が、朝倉さんが

「あーあー、ミソギさん！あれ？清掃員をしてたんじゃあ・・・」

「ああ、いろいろあってね。僕もここでネギ君を支えることになったんだよ。とりあえずネギ君もまだまともに自己紹介が出来てないから、席についてくれないかな？」

「ああそうですね。ほら皆ーとっと席戻るよー」

と皆をまとめてくれたので、不審者扱いされることはなくて助かった。なぜ朝倉さんが協力的なのかは謎だがここは甘えておこう。

クラスの皆がひと通り席に戻ったのを確認して自己紹介を始める。

「今日からこの学校で英語を教えることになりましたネギ・スプリングフィールドです。よろしくお願いします」

ネギ君の模範的な挨拶にクラスの皆も拍手十歓声。

「ネギ君のアシスタントのミソギです。ネギ君は見ての通り子供だし、僕もまだまだ若造です。こんな二人が副担任になるなんて明らかおかしいと思うでしょうが、疑問や不満は僕にぶつけてください。僕もおかしいと思ってるので大歓迎です」

俺のよくわからない挨拶に多くの人が首をかしげながらもパラパラと拍手してくれる。

まあそれでいいさ。今のはたった一人に向けた挨拶だからな。その一人だけは僕の言葉に他とは違う反応を示してくれたし（ネギ君の時は嫌そうにしながらも拍手していたが、今回はそれをしないで俺のことを凝視していた）、まあ成功だろう。これで実際に不満を言いに来てくれればしめたものだ。

「うん、というわけで、副担任になってもらったネギ先生とミソギ先生だ。彼らはイギリスの学校を卒業してるから頭はとていいよ。皆、仲良くしてあげてくれ」

それは転校生がきた時のセリフじゃないのか？とても新任の先生を生徒に紹介するときの言葉とは思えん……。

16話（後書き）

またエヴァとの会話に丸々1話とかかけてたらいつまでも学園編に入れないのでちよつと駆け足気味です。

今回もそこまで早いわけじゃないですが、このぐらいのテンポと以前までのテンポ、どっちのほうがいいんですかね？

17話

自己紹介や質問コーナーを軽く設けた後、タカミチの号令の元授業が始まったわけだが、その間はネギ君には仕事があるが俺には何も仕事が無いので少し考え事をすることにする。

原作とは違う点がいくつかあったよな、それについて問題がないかどうか検証していこう。

一つ目、トラップが黒板消しだけと非常に軽かったこと。これは先程雪広さんが『トラップをあれだけに食い止めといてよかったですわ・・・』とかつぶやいてたから多分シヨタ先生が来ると聞いて嫌われたらいけないと必死で食い止めた結果なのだろう。黒板消しくらいなら歓迎の範囲内だから許可したのかな。

二つ目、黒板消しが何の抵抗もなくネギ君の頭に落ちてきたこと。俺に依存しすぎてるせいで障壁の常時展開すらしてないってことかな。まあこの子が強かろうが弱かろうがどうでもいいけど。

三つ目、神楽坂さんのネギ君への態度。これが一番大きいかな？ 初対面でネギ君から変なことも言われてないし、黒板消しを一瞬止めたりとかもしてないから普通の子供だと思ってるな。だからさっきも普通に皆と騒いでたし、タカミチが担任じゃなくなるわけじゃないからそこまで反対もしていない。

これ、どう影響するかな。この子は俺のハーレム要員じゃなくてネギ君にあげるつもりだからあんまり原作と変わられても困るんだけど。

「ミソギさん？ どうかしましたか？」

「ん？ あ、ごめんごめん、ちょっとぼーっとしてたよ」

「もう、しっかりしてくださいね。授業終わっちゃいましたよ」

「まじでか」

せっかく一番後ろにいるんだから珍しく真面目に授業を受けているエヴァちゃんの後頭部でも眺めてようと思っただけに出来なかった。残念。

ちなみにネギ君はエヴァちゃんや茶々丸に対して無反応だ。気づいていないのか、はたまた気づいてはいるが無視しているのか、まあ後者ができるほどの度胸はないだろうな。

「ネギせんせー、ミソギせんせー」

と、授業が終わって何やら雑談に興じていた生徒たちの輪の中から一人の女生徒が出てきてこちらに声をかけてきた。

「えっと、たしか佐々木まき絵さんですよ。どうかしましたか？」

「今日、お仕事の後空いてるかなって」

「今日ですか？はい、空いてますよ」

「そっかー、ならよかった。それじゃあお仕事がんばってね！」

「え？あ、はい。・・・あれ？なんで予定聞いたんですか？」

「いいからいいから。いやーそれにしてもネギ君ってほんと可愛いねー」

「ふええ」

「ちよっとまき絵さん！いつまでネギ先生を独占しているつもりですの！」

「ふえええっ!？」

おー、もみくちゃんにされとる。にしても今日の予定を聞くなってことは・・・あれかな？ネギ君の歓迎会。一応俺の名前も呼んでくれたってことは俺も参加していいんだよね？

てゆーか俺は別に先生ってわけじゃないんだけどな。でもだとする俺ってなんなの？

その後、職員室で担任としてのお仕事をタカミチの指導のもと頑張ってるネギ君をおいてなんか広場みたいなところに行く。原作での場面を頑張って思い出して、のどちゃんが落っこちてくる（予定の）場所をこないだの一人麻帆良探索の時に見つけておいたのだ。のどちゃん可愛いからネギ君にあげたくないし、なによりあのアーティファクトが厄介だ。人の心読むとかホントやめて欲しい。という訳でネギ君とのどちゃんは絶対に契約させちゃダメなわけよ。なので俺がフラグ立てようと思います。まあ彼女は男性が苦手らしいので無理かもしれんが、それでもネギ君にフラグを立てさせるのだけは回避しないと。

待つこと十数分。ようやく本を大量に抱えたのどちゃんが階段を下ってくる。ていうか今思ったんだけど俺が余計なことしなければここでのどちゃん普通に落っこちるんじゃない？そうすれば入院とかなんやらでネギ君との接触も減るからその分フラグが立てづらく……って嘘々。さすがに助けますよもちろん。

「あつ、きゃあああああ！」

と、そんな事を考えているうちにのどちゃんが足を滑らした。ダッシュで駆け寄って受け止める。

めだかちゃんだって音速で動けるんだから悪魔ボディの俺なんかはそれ以上に動けるし、頑丈だからダメージも特にない。余裕で間に合った。

「大丈夫？えっと、宮崎さんだよな？」

「う？ね、ネギせんせーの隣にいた人？え？なんで、私・・・」

隣にいた人って・・・どんな認識だよ・・・。まき絵ちゃんは名前
で呼んでくれてたけどもしかしてクラス全体の認識としてはそんな
感じなのかな。

「うん、ネギ先生の隣にいた人だよ。そこに座ってたら宮崎さんが
落っこちてきたから、怪我したらいけないと思って受け止めたんだ
けど」

「そ、そうだったんですか・・・すみません、私失礼な言い方を・・・」

「別にいいよ、どうせ僕なんておまけみたいなもんだからね。ビツ
クリマンチョコを大人買いした時の余ったチョコみたいな存在だも
んね・・・」

「ああっ！すねないでください、私はチョコ好きですから・・・え
っと、みそじ・・・先生？」

「・・・うん、フォローありがとう。でも、僕の名前はミソギだか
ら。それだと30歳ってことになっちゃうから」

「すっ、すみませんミソギ先生！」

「あはは・・・まだ10代だからその間違われ方は辛いよ。それで、
身体は大丈夫？どこか傷んだりしない？」

「あ、はい。おかげさまで」

「ならよかった。にしてもこの量の本を一人で運ぶんじゃ大変だろ。
僕も手伝うよ」

「い、いえ、そんな・・・」

「こういう時は変に遠慮してくれないほうが嬉しいんだぜ」

「じゃ、じゃあお願いします・・・」

思ったよりも普通の対応だな。さすがに助けしてくれた人を邪険には

できないかな、一応俺も先生みたいなものだし。

「ところでこの本は宮崎さんの私物？」

「いえ、図書館で借りてきた本です。返すのを忘れてて・・・」

「そうなんだ、本が好きなんだね。僕も前はよく読んでたけど、最近忙しくてあんまりそんな暇がなかったんだよね。今ってどんな本が流行ってるのかな？」

「えっと、こういう本とか・・・」

「へえ、おすすめの本があったら今度教えてくれない？」

「あ、はい。いいですよ」

仲良くのどかちゃんとお話ししながら本を運ぶ。あれ？男性恐怖症どこ行った？

「そういえばミソギさん」

「ん、なに？」

「さっき10代だって言っていましたけど、ミソギさんって何歳なんですか？」

「あ、あー。一応18だけど、そっか。子供先生の手伝いって言うてるのにその手伝いもこんな若造じゃ意味分かんないよね」

「いえ、そういうことじゃなくて・・・」

「じゃあ、もしかして20代だと思ってたとか？」

「いえ、そうでもなくて・・・すごく大人に見えるのに、あんまり変わらないんだと思って・・・」

「あはは、たしかに4歳って言ったらあんまり変わらなく見えるけど、10代の4歳ってのは大きいと思うよ。ほら、ネギ君だって10歳だから宮崎さんと4歳差だし」

「そ、そうですよね。大きいですよ」

とまあこのように最後にはのどかちゃんから話題を振ってくれるく

らいにまで打ち解けることができた。

もちろん年齢に関しては適当だが。この世界にきてからだったらまだ数年しかたってないし、生前も含めたら20はとうに越してるし、そもそもこの体の肉体年齢は多分転生してきた時点で数千歳だと思う。そんな事馬鹿正直に言えるか！

その後何事も無く本を目的の場所まで運び終えたところ、

「あ、もうこんな時間・・・ミソギ先生、ネギ先生のところに帰ってあげてくださいね」

と言いついて去っていった。

そろそろいい時間だから多分そろそろ歓迎会が始まるんだろう。じゃあ言われたとおり俺もネギ君のところに帰ろうかな。

18話

俺がネギ君の元へと戻ったところでタカミチが本日の仕事の終了を告げた。多分俺が帰ってくるのを待ってたんだろうな。

早速帰ろうとするネギ君に、明日の説明があるから2-Aの教室まで来て欲しいと告げるタカミチ。やっぱりお前もグルか。でもその説明は不自然すぎるぞ。

まあちよとアレな子であるネギ君はその言葉に疑いもせず付いて行き、

「「「ようこそ！ネギせんせー&ミソギせんせー！！！」」」

鳴らされたクラッカーと生徒たちの言葉によって歓迎された。

よかった、俺の名前も呼んでくれて・・・正直ドッキドキだったよ、無視されたらどうしようって。

早速連行されていくネギ君を見送りながら、どっか適当に落ち着ける場所でもないかと周囲を見渡すと、エヴァちゃんと茶々丸ちゃんを発見。でもタカミチがいる前であんまり仲良くするのもなあ・・・。

「あの」

そう悩んでいると横から声がかけられた。

「ん、えっと、長谷川さんだよね？」

「あ、はい。もう名前覚えてたんですか？」

「うん、生徒の顔と名前を一致させるのは教師の義務だからね」

教師じゃないけど。

「それで、なにかな？もしかして歓迎会なのに一人寂しく呆けてる僕がかわいそうできてくれたとか？それなら嬉しいけど、僕は高畑先生と適当にだべってるから皆と騒いできていいよ」

「あ、いえ、そういうわけでは・・・それに高畑先生ならあそこでもう生徒に捕まってますよ」

「え？」

と言われて指さされた方を見ると、タカミチが神楽坂さんに絡まれてた。原作と違って変な姿を見られてないからあの子も積極的に話しかけてるな。うんうん、いいことだ。じゃなくて。

「あはは・・・あれだと僕が一人ぼっちだから・・・うん、話し相手になってくれると嬉しいかな」

いやまあ元々タカミチとおしゃべりなんかするつもりはさらさらないけどな。タカミチが自分のことで手一杯なら、見張られる心配もないので遠慮無くエヴァちゃんたちのところに行くつもりだったし。まあ千雨ちゃんがいてくれるなら十分だけだね。

「はい、それは構わないんですけど・・・一つ聞きたいことがあるんですが」

「聞きたいこと？ああもしかして、なんであんな子供が先生に、ってこと？」

「ええ、まあ」

「やっと聞いてくれる人がいたかー、良かった良かった。もしかして日本ではこれが普通なのかってドキドキしてたところだったんだよ」

「え？」

最初の自己紹介の時わざわざ意味が分からない様な言い回しをしたのは千雨ちゃんにこの質問をさせるためだからね。そりゃまあ聞いてくれるかドキドキだよ。

あとは千雨ちゃんが好きそうな言葉を並べ立てて、俺を味方だと思わせて、そしてその後あわよくば・・・。

「だって普通なら疑問に思うもんね、10歳が先生って労働基準法は大丈夫なの、とか、私達の大事な中学生生活をこんな子供に任せて大丈夫なの、とかさ」

「まあ、たしかに」

「だから生徒がネギ君とか高畑先生のことかにおしかけて迷惑かけたら申し訳ないから、僕のところに来るように言っておいたのに、誰もこないんだもん。いやーびっくりだ」

「・・・やっぱり、ここにいる人達皆変ですよね」

「あはは、自分の生徒のことをそんな風に評価することはできないからなんとも言えないかな・・・けど、長谷川さんみたいなまともな子もいてくれたみたいでちょっと安心だよ」

「ほ、本当ですか？」

「うん・・・とと、話がずれた。えっと、なんで子供が先生をやってるかだよ。まあなんだかんだ言ってたけど実は僕も詳しい事情は知らないんだよ、ごめんね」

「あ、そうなんですか・・・」

「ネギ君のお父さんが業界では有名な方でね、そのコネでここで教師をやることになったってのはわかってるんだけど、それ以上のことは何も。ネギ君も僕もお偉いさんに言われるがままここにきたからさ。あ、もちろん大学を出てるのは本当だよ」

今回は千雨ちゃんに好かれたいから適当じゃなくてそれなりに筋の通った答えを返してあげる。いやまあ筋も何も大嘘なんだけどさ。

大学を出てるのも本当じゃねーよ。

「ところで・・・あそこにいる緑髪の子、絡繰さんって・・・もしかしてロボットだったりする？」

茶々丸ちゃんをこっそり指さして尋ねる。話題を変えて雑談を挟むことで千雨ちゃんの意識を別の方向に向けるとともに、好感度を上げようという素晴らしい作戦だ。

「・・・ええ、多分、そうです」

うんざり、みたいな感じで答えてくれる千雨ちゃん。

「うっそ。自分で聞いておいてあれだけど、ロボットが中学生って・・・えー、冗談だね？」

「いえ、本当にあいつはロボットです・・・やっぱり、外からきた先生ならわかってくれるんですね」

「え、なにが？いや、彼女が人間っぽくないってことならだれでもわかると思うけど」

「いえ、気づかないんです、だれも。仮に気づいてたとしても、突っ込まないんです。ロボットが中学生やってるってことに」

「う、うーん。それはもはや大らかとかそういうレベルじゃないよね。でもそれって、クラスメイトに対して、あなたロボットだから学校来ないで、なんて言えないからだ黙ってるだけじゃないの？」

「そうじゃありません。そもそも、この麻帆良って町はおかしいんです」

「とうとうと？」

「麻帆良の外だったらノーベル賞でもオリンピックでも簡単にモノにできそうな奴がうじゃうじゃいるし、それに対して疑問に思う人もない。それが普通だって思い込んでるんです」

「まあ確かに本当にロボット中学生なんてものが作れるんならノーベル賞なんて余裕だよね」

「でも、そのことを指摘しても誰も異常に気づかない。それどころかおかしいのは私だとか言ってきて・・・くそっ」

「は、長谷川さん？」

「あ、す、すいません」

「いや、別に気にしないけど、そっか。麻帆良に生まれて麻帆良で育てば麻帆良が普通だっておもちやうわけだね。けど長谷川さんはそうは思えないと」

「はい」

「なるほど、たしかにそれはちよつときついね。ストレス溜まりそう」

「まあ、もう慣れましたから」

「そう、でも僕は君が間違っていないってことはわかってるからさ、もし今度そういう文句が言いたくなったら僕のところにおいで。話し相手ぐらいにはなれるし、僕も生徒からそういう話をふられるようになれば嬉しいからさ」

「・・・わかりました」

一瞬胡散臭げな表情をしたけど頷いてくれた。まあまだ来たばかりの教師に全幅の信頼なんか置けるわけないよね。

じゃあそろそろ失礼します、と言って離れていった千雨ちゃんが独り言で

「なんで私あんな事まで話しちまったんだ・・・？」

とか言ってるのが聞こえる。さすがデビルイヤー、聞こうと思えば色々聞けるな。

まあツカミとしては良かっただろ。怪しい教師からなかなか話のわかる若い教師ぐらいにはランクアップしたんじゃないだろうか。最

初はそんなもんでいいさ。

「あ、あの・・・」

と、そんな事を考えていると横から声かけられた。

「あ、宮崎さん。さっきぶりだね」

「あの、さっきは危ないところを助けていただいた上、本まで運んでもらって、その、これ、お礼です」

といって図書券を手渡された。

お？ おお？ おおお？ ？

これはあれだよな？ 本来ならネギ君にいつてるイベントだよな？ それがこっちに来たってことは・・・

これはもしかすると初めてわかりやすいフラグが立ったかもしれないぞ！ 助ければオッケーとかのどかちゃんちよれ！。

「ありがとう宮崎さん。でもさっきも言ったとおり僕、最近の本には疎くてね。良かったら今度、この券で買う本と一緒に選びに行かない？」

「え、えええ！？」

できるだけ心の中の動揺に気づかれないように落ち着いて誘うと、帰ってきた答えは悲鳴だった。

・・・あれ？

ちよつとすいません、と言って急いでのどかちゃんが後へ退散し、そこでこちらの様子を窺っていた夕映ちゃんとハルナちゃんのところへ駆け寄った。

本来ならこの距離では会話を聞くことはできないが、デビルイヤーのおかげで聞きとることができた。

「ど、どうしようゆえ、ハルナ」

「う、うーん、これはちょっと難しいねえ・・・」

「のどか、ここは勇気を出すべきです！」

なんだ？デートみたいで恥ずかしいってことか？いやー、初々しくていいねえ。

「で、でももし途中で怖くなって逃げちゃったら失礼だし・・・」

「その時は、所詮一時の気の迷いだったということです。それなら別に構わないですよ。私達でフォローしますから」

「まあそれくらいはするけど・・・やっぱりネギ君にしとかない？あっちならラブの気配がちょっとするしさー」

・・・ん？なんか雲行きが怪しくなってきたぞ？

「だめです！ネギ先生が怖くないのは子供だから当たり前です！それより今はなぜあっちが怖く感じなかったかを探るのが優先です！」

「そ、そんなのいいよお・・・」

「のどか、将来もしいい人と出会った時に男が怖いから無理でしたでは話にならないですよ？社会に出てからも苦労するでしょうし。男と隔離されてる今のうちに何とかしておくべきです」

「まあ明らかに普段ののどかなら怖がってるような相手に対してなぜ普通に接することができたのか。これが解明できれば克服の日も近いよね」

「うう・・・」

「いいですか？これはあくまで練習です。もし何か失敗しても私達でフォローするです。だから気兼ねなく頑張ってくるですよ、男と二人で買物なんて出来れば大躍進です」

「ま、深く気にせずもっと気楽に。そもそも向こうにとっては単な

るお礼なんだからさ。断るのもなんだか失礼だし、一回だけ頑張ってみれば？ダメだったらダメでそれでいいからさ」

「わ、わかった・・・やってみるよ」

・・・

・・・あ、のどかちゃんきた。

「わ、わかりました。じゃあ、今度のお休みの時に、その、本屋さんにでも、あの、行きましょう・・・？」

「・・・うん、わかった。楽しみにしてるね」

「じゃ、じゃあ、それでは」

去っていくのどかちゃんを目で追いながら考える。

ああ、単なる練習か、男性恐怖症克服のための。はは、なーんだ。てゆーかパルさん、ネギ君に対してラブを感じたって言いました？え？まだフラグ潰しきれてない？俺の方には一切立ってないのに？もう泣きたい。

18話（後書き）

某動画サイトでネギま!？の一挙放送を見ました。

改めて見ると一部の設定は原作よりいいんじゃないかと思いました。

あの設定なら一部キャラが非常に動かしやすくなるんですけどね、刹那とか特に。

19話

楽しい時間はすぐすぎる。その後ハカセちゃんやその周りにいた超ちゃん達とおしゃべりしたり、チア部の3人や散歩部のちびっこたちに絡まれたりしていたらあっという間にお開きの時間になってしまった。

と、その前に。

「神楽坂さん」

「はい？なんですか、ミソギ先生」

やるべきことをやっておこう。そう思ってクラスメイトとおしゃべりしていた神楽坂さんに声をかける。

「これ、さっき高畑先生から預かったお手紙。仕事が急に入っちゃって直接渡す時間がなくなっちゃったから僕が渡してくれて頼まれたんだ。はい」

「え！た、高畑先生からの手紙！？」

僕が差し出した手紙をひったくるように奪い中身を確認する神楽坂さん。

「なーなー、なんて書いてあったん？」

「あ、ちょ！だめだめだめ！誰にも内緒って書いてあったんだから！」

「えー、なんやいけずやなー」

話しかけてくる木乃香ちゃんにも連れない反応、だがその表情は緩みきっている。

まあ想い人から

『君にどうしても伝えたい事があるんだ、けれど誰かにそれがバレたら問題になってしまうから二人きりで会いたい。今夜〇〇時に×で会えないだろうか？できるだけ皆には内緒で頼むよ』

なんて書かれた手紙をもらったらそりゃ有頂天だよな。

もちろん手紙は俺が偽装して作ったものなわけだが、まあ喜んでもらえたみたいでよかったよかった。

「パ、パーティーももう終わりの時間でしょ？私寮に帰ってシャワー浴びて着替えてくる！」

「あ、ちょ、アスナー。・・・もう、全然話聞いてくれへん」

「えっと・・・あの子はどうしちゃったのかな？ずいぶん嬉しそうだったけど。手紙の内容わかった？」

「見えへんかったけど・・・多分補習のお知らせとかそんな感じやないかなー」

「・・・補習って嬉しいものだったっけ？そうじゃなくなっちゃって僕が学生の頃は教師からの手紙なんて一種の恐怖の手紙みたいなものだったのにな」

「あははー、どうせ先生もすぐに気づくと思うから言っちゃうんやけど、実はアスナーって高畑先生のが好きなんよ。だからたとえ補習でもあえて嬉しいんやって」

「それはまた結構な趣味してるね。たしかに高畑先生は男の僕から見てもかっこいいくらいだけど、中学生の趣味とは合わないと思うんだけどなあ」

「せやねー、なんでなんかなー」

そして神楽坂さんがいなくなってフリーになった木乃香ちゃんおしゃべりすることもできた。いやー、はんなりした女の子っていい

ね。はんなりってどういう意味かは忘れたけど。

「よし、それじゃあネギ君。そろそろ僕たちも帰ろうか」

「はい、ミソギさん」

あれからしばらく経ち、ひとりふたりと生徒たちが教室から寮の自室へと戻っていき、残っている子も後片付けの段階に入っている。まあ委員長が残った子たちに片付けを強いているだけだが。

もし彼女が最後まで残っていなかったら明日この教室がどんな状態だったかは想像に難くない。ありがとう委員長。

もちろん俺たちも手伝いを申し出たんだが、主役のお二人に後片付けをさせる訳にはいきませんわ、と断られてしまった。ネギ君一人ならそれでも手伝うと言い張っただろうが、別に俺はそんな事しなくていいならしたくない。お言葉に甘えて帰らせてもらうことにした。

「で、ネギ君それ本当に持って帰るの？」

「あ、はい。せっかくいいんちよさんがくださったものなので」

「いや、それにしてもすごいよね。なんで半日足らずでこれが作れるんだか・・・置く場所あるかな」

「あ、駄目なら捨てますけど」

「いや、それはもっと駄目でしょ。大丈夫だよ、どっかしらに فکرと思うから」

先ほどの歓迎会の時に委員長からもらったらしい銅像をどうやって

運ぼうか思案してるようだ。まあこれくらいなら俺が持てるから持
ってあげよう。

ていうかネギ君、生徒からもらったものを簡単に捨てるとかいっ
ちや駄目だろ。けどこの子なら俺が捨てろって言ったらためらいなく
捨てるだろうな、まあそれが便利だからいいんだけど。

そんなこんなでネギ君と俺は寮に向かって歩いてるわけだが、こ
のまま帰ったらエヴァちゃんに怒られる。という訳で人通りのない
道までついたところでもらったお札にこっそり魔力をこめ、打ち合
わせ通り立ち止まった。

「？ どうしましたミソギさん」

「いや、今向こうの林のほうからなんか妙な気配がしてさ」

「え！ そ、それってもしかしてこないだの・・・」

「かもしれない。様子を見てくるからちょっと待ってて」

「は、はい・・・」

よし、それじゃあダッシュでゴー。

結構な速さで走ったので30秒ほどで茶々丸ちゃんの待ち構えると
ころまで辿りつけた。ちょっとネギ君から近いような気がするけど
まあいいでしょう。これくらいの距離なら向こうの状況も探ろうと
思えば探れるから万が一の時には妨害できるし。

茶々丸ちゃん数メートル手前で立ち止まると、茶々丸ちゃんが一礼
して一言。

「こんばんわミソギ先生。よく来てくださいました」

「！！！」

万が一の監視を欺くための言葉だということはわかってる。だがそ

それでも俺はその言葉に感動を抑えることができなかった。

あの茶々丸ちゃんが俺がきたことを歓迎してくれるなんて・・・！

「・・・何ニヤニヤと笑っているんですか？」

「あ、ああ、失礼。それにしても昨日の今日で一体何のようかな？」

「はい。先日は遅れを取りましたが、今日は満月。前回の借りを返させてもらいにきました」

「へえ、けどそれにしては一人足りないと思うんだけど？」

「マスターは力を取り戻してからここに来られますので、それまで私がお相手致します」

「力を取り戻す？・・・まさか！」

驚いた俺が後ろを向き、ネギ君の方に行こうとした瞬間、頭の真横を結構なスピードで拳が通り抜けた。

「よそ見をしていてよろしいのですか？次は当てますよ」

「くっ・・・君を倒さなきゃ行かせてくれないってわけだ」

「はい、マスターの邪魔はさせません」

「じゃあ、悪いけどとっとと終わらせるよ」

「小さい子ども相手に本気を出すのは躊躇われますが、貴方相手ならばそのような気も起きません。全力でころ・・・いえ、倒しに行きます」

「ああそう。けど僕は生徒相手に本気が出せるほど冷酷な人間じゃないからね。目一杯手加減してあげるから本気でかかっておいで」

という俺と茶々丸ちゃんによる茶番劇が終了し、時間つぶしのための戦闘が始まったわけだが、戦闘中ならボディタッチとかが1回や2回あっても仕方ないよね。さて、楽しむとするか。

20話

ミソギの合図をうけ現場へ向かうと、ちょうどあいつが森の方に置いた茶々丸の方へ駆けていくところだった。

これで二人きりだ。茶々丸はいないが前回のあの情けない姿を見る限り警戒にも値しないだろう。まったく、なんであんなガキがナギの息子なんだ。全然似てないじゃないか。せいぜい顔が似てるくらいだ。

まあいい。とっとと面倒事はすませて自由の身になるとするか。と、その前に幻覚の魔法だったな。

「やあネギ先生、こんにちわ」

「え？は、はい。こんにちわ・・・えっと、どなたですか？」

気持ち悪いぐらい精巧な自分の銅像に寄り掛かっている坊やに声をかける。そういえばこいつ教室でも私に何の反応も示さなかったが、もしかして気づいてないのか？本当に間抜けなやつだな。

それに今もこの姿が私だと気づいてないようだし、まったくミソギの奴め、もう少し教育しておけ、これじゃ全く面白くないぞ。

「おやおや、もうこの間のことを忘れてしまったのか？そんな弱い印象しか与えられなかったとは残念だな」

「え、・・・じゃあ、まさか、この間の吸血鬼さんですか！？」

一転して恐怖の表情を浮かべている。戦う気がまるで見られないな。まるで助けを求めるかのように逃げ腰で周囲をキョロキョロして、

敵を目の前にしてずいぶんと余裕じゃないか。

「その通りだよネギ先生」

「でも、じゃあミソギさんは何を追って・・・」

「はっはっはっはっは！あいつなら間抜けにも私が用意した罠の方へ行ってくれたよ」

「そんな・・・」

「ふん、出来の悪い従者を持つと苦勞するなあ。まあグズ同士でいいコンビだよ」

「・・・」

「・・・ん？雰囲気が変わったな。さすがに怒ったか？まあ楽しませてくれるなら何でもいいが。」

そして坊やおもむろに魔法發動体である指輪をこちらに向けて言い放った。

「・・・訂正してください。ミソギさんは従者でもグズでもありません！僕が一番大切な方にそんな事を言う人は、たとえば吸血鬼さんでも許せん！」

「・・・気持ち悪いなこいつ！」

「それどころか僕が何度従者にして欲しいってお願いしても、さすがに男はなあ、とか言って断られちゃうし、お願いを聞いてくれるって言うから従者にして欲しいってお願いしようと思ってるのに、なんだかんだ理由をつけてお願いを聞いてすらくれないし・・・」

「・・・」

何だこいつ。本格的に気持ち悪いぞ。

いきなり自分の世界に入ってブツブツと気持悪いことを呟いている

こいつを見てると、本当にこいつがナギの息子なのかという疑問がますます大きくなってきたぞ。

「おい。死にたいならいつまでそうしててもいいが、そうじゃないならいい加減戻って来い」

「はっ！ す、すいません・・・とにかく！ ミソギさんを馬鹿にするのは許しません！」

「ほう、許さないならどうするんだ？」

「とりあえず貴方を捕まえます！ 話はそれからです」

「はっ、お前にそれができるのか？」

「やってみなくちゃわかりません。ラス・テル マ・ステル マギ
ステル 風の精霊11人 (略) 魔法の射手・戒めの風矢！」

おっと、いきなり仕掛けてきたな。とりあえず手持ちの魔法薬で打ち消したが、よく考えたらこの魔力が大幅に封じられてる状態で茶々丸なしで戦うのは無理があったか？

1回目があれば良かったからってさすがに舐めすぎたか。まあだからどうというわけではないが。

魔法戦で不利なら接近戦でとっと方を付けてしまえばいい。

「はじめましたか！ でもまだこれからです！ ラス・テル マ・ステル マギ「おらっ」ぎゃうっ！」

呪文詠唱される前にとりあえずぶん投げておいた。加減は一応したはずだが5mぐらい吹っ飛んでったな。まあそこまでダメージはないだろ。障壁もあるだろうしな。

「え？ い、今のは・・・」

「こっちは魔法が使えるからな。本来なら前衛の仕事だがまあ仕方ない。ほら、続けるぞ」

そして数分後、やはりというかなんというか、こいつは格闘戦はか
らきしのような。無詠唱魔法も幾つか使えるように思ったよりは
手こずったが、さすがに何度も投げられて殴られて蹴られて体力が
尽きてきたらしい。ふっ飛ばしたきり起きてくる気配がない。
まあ頃合いか。あんまり長く遊んでいても茶々丸が心配だからな、
とっとと血を吸って戻るとしよう。

倒れ伏している坊やに近寄り、血を吸おうと屈み込んだその時

「ちょ、ちょっとあんた！なにしてるの！？」

突然叫び声が聞こえた。

ミソギのやつ、人払いの結界は自分がするから任せとけとか言いな
がら全然ダメじゃないか。これは後で仕置きをする必要があるな。
そんな事を考えながら乱入者の方を向き、その人物を確認する。

「そこで倒れてるのってうちのちびっ・・・ネギ先生じゃない！ち
よっと大丈夫！？」

「神楽坂明日菜か・・・」

「へ？なんであんた私の名前・・・」

おっと、そういえば今は大人の姿だったな。私がエヴァンジェリン
だとは気付かんだろう。まあどちらにしろ記憶を消すんだから特に
幸運だとも思わんが。

「と、とにかく！そいつから離れなさい！今放り投げてたわよね！
？私見てたんだから！」

私のことを不審者とでも思ったのかこちらにつかつかと近寄ってくる。

まったくめんどくさい。くそっ、ミソギなんか頼らず自分で結界をはっておけば良かった。封印されていて魔力が少ないからってケチケチするものではないな。

まあ今は満月、多少は魔力も戻っているので記憶消去の魔法ぐらい朝飯前だ。結界よりは消費魔力も少ないしな。

「リク・ラク ラ・ラック ライ「魔法の射手！」なっ！？」

「いまだ！こっちです、神楽坂さん！」

ちっ、油断した。神楽坂明日菜に気を取られすぎて坊やがノーマーカーだった。

突然攻撃してきた坊やに驚いてモロに攻撃を受けてしまった。まあ攻撃自体は障壁があったのでダメージは殆ど無いが、その隙に神楽坂明日菜を連れて逃げられてしまった。

ミソギが走っていった森の方へ逃げ込んだようだが、もしあいつと合流でもされたら厄介だな。

あいつも私と戦う気はないだろうがさすがに坊やから直接助けを請われたら無視は出来まい。その前に追いついて方を付けるのがいいだろうな。

それにしてもあれだけ元気だとは。先ほどの消耗はブラフだったのか？ふふふ、面白くなってきたじゃないか。

・・・だが、ミソギが結界をサボったせいで面倒な展開になった事実は変わらんぞ。戻ったら覚えているよ・・・。

「へっくし！いやー誰か美少女が僕の噂でもしてるのかな。どう思う？茶々丸ちゃん」

「・・・・・・・・」

「わかった、ごめん、ごめんなさい、謝るから。謝るからその対悪魔用魔力暴走誘発弾の入ったロケットランチャーを構え直すのはやめて。さすがにそれは僕も死んじゃうかもしれないから」

「・・・・・・・・」

ちょっと冗談を言っただけですぐ怒るのはやめて欲しいよね。いくら手足じゃツツコミができないからってすぐ銃器で脅しにかかるのはよくないと思う。

ちなみに今俺と茶々丸ちゃんの距離は50mぐらいある。

いやー、近距離でボコスカ殴り合ってちよつとしたご褒美状態にな

るのかなんて期待してたけど全然そんな事はなかったね。まさか開始早々どこからか銃器を取り出して撃ち殺しに来るとは思わなかったよ。

しかもなにやら悪魔相手に超有効な武器までどこからか仕入れてきたらしい。まあその使用については必死の懇願でなんとか抑えてくれてるけど、今みたいに変なことを言ったりこの距離を埋めようとすると思うので何も出来ないのだ。

・・・まあ50mなんて一瞬で詰めようと思えば詰められるし、対悪魔用魔力暴走誘発弾に関してはくらったとしても大嘘憑きがあればどうにかなると思うけど、それをしちゃうと茶々丸ちゃんに本格的に嫌われてしまうかもしれないからやめておく。
それにほら、まあなんというか。

「美少女に撃ち殺されそうになるって、なんかこう、色々くるものがあるよね！ああ、楽しいなあ！」

「・・・・・・・・・・」

「けどそのロケットランチャーを構えるのはやめてください！」

20話（後書き）

ちなみに感想の返信で書いた、今後出す予定の主人公のことが好きなキャラってネギ君のことじゃないですよ。ちゃんと女の子で出す予定です。念のため。

・・・まあ需要があるならネギ君でも構いませんが。

21話

「はあ……はあ……ここまで来れば少しは安心かな……？」
「はあ……はあ……ちよつと、ネギ先生？一体どうなってんのよ……さっきの女の人ってなんなの？」

吸血鬼さんにやられそうになったところを間一髪逃れられた僕は、その切っかけを作ってくれた神楽坂さんを連れてミソギさんが走っていた森の方へ逃げ込んだわけだけど、ミソギさんも見当たらないし、何より女の子である神楽坂さんをこんな夜の森の中引きずりまわすわけにも行かない。そろそろ覚悟を決めたほうがいいかもしれない。

この前吸血鬼さんに襲われた時はなにがなんだかわからなくてほとんど抵抗出来なかったけれど、準備する時間さえあればそれなりに戦えるはず。

魔法学校時代、ミソギさんは学校の授業に関してはほとんど関わって来なかった反面、僕の自主練には結構付き合ってくれた。あまり実戦形式でやることはなかったけれど、魔力効率や新魔法の習得については学校の先生よりミソギさんが詳しくかったし色々教えてもらった。

まあ僕だけじゃなくてアーニヤとか他のクラスメイトとかも色々お世話になってたみたいだけど……それでも僕がミソギさんの一番弟子といっても過言じゃないはず。その僕が生徒一人守れないようじゃダメだ。しっかりしないと。

まずは神楽坂さんを安全なところまで逃がするのが最優先だ。

「とりあえず神楽坂さん。簡単に説明しますと、さっきの人は吸血鬼さんで、多分僕を狙ってるんだと思います。なので神楽坂さんはまっすぐ自分の寮まで帰ってください。道中の安全は僕がなんとかし

てでも確保します。それで出来れば今日のことは他の皆さんには内緒で、もし詳しい話が聞きたければ明日僕のところに来てください。別にいいならこの事は忘れてくれると助かります」

「ちょ、ちょっとちょっと！そんないっぺんに言われてもわかんないわよ！・・・です」

「まっすぐ寮に帰る、そして今夜のことはすべて忘れる。神楽坂さんをお願いしたいのはこの2つです」

「ま、まあそれくらい単純ならわかるけど・・・でも！先生はそれでどうするの？」

「僕が相手をすれば吸血鬼さんも神楽坂さんをどうこうすることは無いと思います。なので僕はあの人の相手をします」

「いやいやいや！危ないでしょ！あんただってまだ子供なんだから一人で吸血鬼さんとやらの相手なんて無茶に決まってるでしょ！？助けを呼ぶとかしてもっと大人に頼ればいいのよ！」

「残念ながら今はミソギさんがいないのでどうしようもありません」「いやいや！ミソギ先生以外にもいるでしょ！高畑先生とか！」

「タカミチですか？確かにタカミチがいれば心強いですけど、そう都合良くは・・・」

「そうでもないわ。私高畑先生に呼び出されてこっちまで来たのよ。この近くの公園にいるらしいから、すぐ見つけられるはずだわ。ていうか叫んだら来てくれるんじゃない？」

「そうなんですか？じゃあすぐにでも「魔法の射手！」　うわっ！」

見つけた！神楽坂さんとの相談に時間を使いすぎちゃったみたいだ。神楽坂さんを逃がして余った時間で結界魔法を設置しようと思ってたけどそんな暇はなくなってしまった。

魔法の射手を避けた僕たちの前に、上空から吸血鬼さんが降りてきた。

「女生徒とおしゃべりとは・・・ずいぶん余裕じゃないか」

「神楽坂さん！すいませんがタカミチが本当にいるなら連れてきてください！僕が吸血鬼さんの相手をしますので！」

「わ、わかったわ！気をつけて！」

「何、タカミチだと？ちっ、ミソギは本当に使えんな！」

ミソギさん？なんでそこでミソギさんの名前が・・・って、考える場合じゃない。

背中を向けて走りだした神楽坂さんと、それに向けて攻撃しようとしている吸血鬼さんの間に入る。

「・・・まあいい。戯れはやめて2分で全て終わらせてやる」

生徒頼りなのは情けないけれど、さっきよりは希望が持てる。がんばろう、こんな所でやられたらミソギさんに顔向けできなくなっちゃう。

「ふう、向こうもそろそろ決着ついたんじゃないかな。どう思う？
茶々丸ちゃん」

「・・・そうですね。何事もなかったのであれば終わっている頃でしょう」

「てゆうーか放つとくと死ぬまでネギ君の血吸ってそうだからちよつと様子見に行ってみない？こっちに顔ださないから不安になつてきたよ」

「マスターは約束を違えるような方ではありません。たとえ貴方のような卑劣な方との約束であつたとしても」

「おいおい、卑劣ってどういうことさ。今回の戦いだって別に何も卑怯なことはしてないぜ？ただ茶々丸ちゃんがノーコンだっただけじゃないか」

「・・・2丁機関銃＋小型追尾ミサイルをたつた50m程度の距離で避けきるといふのはそれだけで卑怯の領域にあると思います。まだ当たっても効かないのほうに現実感がありますね」

「あ、そっちの方が良かった？」

「当たって死んでくださるのが最も良いんですが」

「こりゃまた手厳しい」

そんなこんなで戦闘開始からどれほど経ったか、茶々丸ちゃんに近寄ることも遠ざかることもせず、ただひたすら攻撃を避け続けてたら、いつの間にか向こうが戦う気をなくしていたので和やかに談笑

をすることにした。

監視なら全部なかったことにしたから何の問題もない。じゃあ最初からそうしろよってツツコミはなしで。だってちよつとぐらい女の子と遊んでみたいじゃん。

ちなみに、茶々丸ちゃんが持っていた危なっかしいロケットランチヤーは

『いつかの時のために取っておきましょう』

とか何とか言って仕舞っていた。・・・どこに？あのほっそりとしてかわいらしい体型のどこにあんな禍々しいものが入ってるの？

「・・・何やらいやらしい視線を感じるのですが」

「え？いやまさかまさか、気のせいでしょう？」

「・・・まあいいでしょう。ところで、こちらに向かって走ってくる人物がいらっしゃるのですが」

「んあ？誰だろう」

まあ予想はつくけど。

そのまま数十秒ほど待っていると、息を切らせて一人の女生徒が俺たちのいる広場へとやってきた。彼女は周囲をきよろきよろと見渡して

「はあ・・・はあ・・・高畑先生は？」

とつぶやき、その後俺達の方を向き

「あれ？ミソギ先生に、そっちに居るのは茶々丸さん？どうしてこんなところに・・・」

と不思議そうに首をかしげた。その女の子は予想通り神楽坂明日菜さんだった。

「いや、僕からするとこんな所に君がいる方が不思議なんだけど、どうかしたのかい？」

「えっと、実は高畑先生に呼ばれて・・・じゃない！あっち！あっちでネギ先生が変な女の人に襲われてるんです」

来た方を慌てて指さす神楽坂さん。その方向はやっぱりネギ君とエヴァちゃんがいる筈の方だ。

一瞬チラリと茶々丸ちゃんの方を見ると溜息をひとつつき、

「ネギ先生がですか？それは大変ですね」

と、神楽坂さんの話に付き合ってくれた。別に彼女の的には何がバレてもいいんだけど一応俺の事を慮ってくれたのかもしれない。

「本当かい？それは大変だ、急いでネギ君の所に行かないと」
「こっちです、ついてきてください！」

とりあえず僕も茶々丸ちゃんに合わせておくと、それを聞いた神楽坂さんが先導しようと走りだした。

案内されなくても場所はわかるんだけど、まあいいか。おとなしくそれについていきながら、同じくついてきている茶々丸ちゃんにこっさり話しかける。

「なんかよくわからないことになってきたね」

「人払いは任せろー、とおっしゃってませんでしたか？」

「いや、一応したはずんだけどさ・・・まあいいや」

「よくありません」

「とりあえず、現地についたら茶々丸ちゃんは神楽坂さんについてあげて。エヴァちゃんの場合は僕に任せてくれていいからさ」

「・・・非常に不安なのですが」

「頼むよ。ただ名誉返上、汚名挽回のチャンスが欲しいだけだからさ」

「仮にも教師ともあろうお方がそのような言葉を使うとは非常に嘆かわしいですね」

「・・・あれ？なんかまちがってたっけ？」

何も間違っていないよ、うん。

「まあいいでしょう、とりあえず貴方に任せることにします」

「ありがとう、恩に着るよ。今度可愛い服でもプレゼントするね」

「期待しないで待つことにしましょう」

とまあ茶々丸ちゃんのと承もとれた所で現地目のところまで到着。ここまで来れば一般人の聴覚でも戦闘音が聞こえてくる。

「案内してくれてありがとう。ふたりとも安全な所に避難してくれていいよ」

と一言告げて、ニヤニヤと微妙にうれしそうなエヴァちゃんと、非常に苦しうだがそれでも立ち上がりいまだに戦闘を続けられているネギ君との間に立ちふさがった。

先に謝っておこう。ごめんねエヴァちゃん。

21話（後書き）

今週号のネギま！を見て、やっぱりネギ君はヒロインにしても何の問題もないなあ、と、思いました、まる。

ところでこれはあまり小説とは関係有りませんが、先日、『変態王子と笑わない猫。』というラノベを読みました。それに出てくる副部长が自分が書きたい茶々丸の完成形みたいなキャラでとても素晴らしいかったです。ぜひ次巻以降は副部长をもっとプッシュして欲しいですね。

・・・でもラノベって毎巻キャラを増やさなきゃダメみたいな傾向があるからメインヒロイン以外の出番がどんどん少なくなっていくんだよね・・・。新キャラよりもっと既存のキャラを掘り下げてほしいです。

22話

たしかに私は坊やとの戦いを楽しんでた。

最初はさすがに面倒なことになる前にケリをつけようとうっかり殺しそうになったが、それでも立ち上がる坊やを見て興が乗ってきてしまったのだろう。時間を忘れて戦ってしまったのは事実だ。

神楽坂明日菜の件もあるし時間をかけすぎれば邪魔が入るかもしれないことはわかっていた。

だが、だがしかし。

「なぜ貴様が私の前に立つ・・・」

お前が私の邪魔をすることだけは納得がいかなぞ、ミソギ。

「ミソギ・・・さん・・・」

ミソギはぼうっとした表情の坊やに微笑みかけ

「遅くなってごめんね、もう大丈夫だよ」

そう言って頭を撫でる。

その動作にも腹が立った。こいつ、私を無視して何をしている。なぜここに来てこんな所に現れる。

その思いを込めて睨みつけていると、今度はこちらを向いた。

「匿名希望さんからここでネギ君が襲われてるってタレコミが入ってね。来るつもりはなかったんだけど・・・つい」

「・・・神楽坂明日菜か」

「いや、匿名って言ったんだから実名出さないでよ・・・」

「ふん、で？なぜ貴様がここにいる？」

「え？」

「え？ではない！貴様は記憶消去の魔法が得意なんだろう！？頼まれたからといって素直に従う必要はないはずだ！」

「え？・・・あ、あー、はいはい」

なぜそこで忘れてたみたいな表情をする・・・。

まあいい、さて、どんな理由をつけてくるんだ？

「いや、やっぱり自分の生徒にそんな魔法使いたくないしさ・・・」

「奴には魔法を見られたんだ。どちらにしろ使わなければならぬだろう」

「それに・・・」

「それに？」

ミソギはそこでふと視線を逸らし坊やの方を見た。朦朧とした表情をしてこちらの話を聞いているのかすらわからんが、それでも二本足で立っている。

「言われるままにきてみたんだけど、やっぱりネギ君のこんな状態を見ちゃったらさ・・・どうしても我慢できなくて」

「・・・どういう意味だ？」

「最初は本当に思ってたんだ。死にさえしなければエヴァちゃんを解放するためにこの子を使おうって。でもこれを実際見ちゃったらもう無理だ。僕はこんなにボロボロになっても、絶対勝てないってわかってるような相手でも、諦めずに戦えるネギ君を見捨てられるほどマイナスイキ人間じゃないよ。本当にごめんエヴァちゃん。僕は君の仲間だとか言っておきながら、それ以上にネギ君の味方だったみたいだ」

そう言い切ったミソギからなにか一言を告げられた坊やは、安心してかのように膝から崩れた。多分あとは任せて休んでろとも言ったんだろう。

まあそんな事はどうでもいい。それより大事な事は

「つまり貴様は、私の敵というわけだ」

「え？ いやちょ・・・」

「別にいいさ、こんなことは慣れている！ こい茶々丸、用意してたアレを使い！」

目の前の敵をとっと排除して、こんなクソみたいな学園からとっとおさらばすることだ。

ミソギに裏切られた以上、いよいよ遊んでいる暇はなくなった。

どこかに潜んでいるであろう茶々丸に声をかける。保険として用意しておいた対悪魔用の装備を実際に使う時が来るなんてな。

「ちょ、ちょっと待ってエヴァちゃん！ 別に僕は君の敵になったつもりは・・・」

「問答無用！ とつとやれ、茶々丸！」

「ああもう・・・ごめん茶々丸ちゃん！ 『動くな！』」

ちっ。お得意のその魔法か。だが茶々丸がどこにいるかはわからないはず。さすがに姿の見えない相手にまでかけられるほど万能じゃないだろう。

「とか考えてるのかもしれないけど、ごめん。僕、茶々丸ちゃんの居場所知ってるから」

「は！？」

そう言うとミソギは茂みの方へと歩いて行き、何やら話し声が聞こ

えた後、茶々丸と神楽坂明日菜を抱えて戻ってきた。

「はあ・・・茶々丸ちゃんには神楽坂さんを安全な所に避難させておいてって頼んだはずんだけどな」

「・・・貴方の命令を聞く義務はありません」

「いや、そうだけどさ。でも今回はそれが仇となったね。もし神楽坂さんを連れて帰った後戻ってきたんだったら場所がわかんなかったから危なかったかもしれないのに、全然移動しないからふつうにわかつちやつたし」

「・・・」

そのままミソギはよっこいしょ、とかいいながら茶々丸を地面に立たせてやり、意識を失っている神楽坂明日菜はそつと横たわらせた。私の体はまだ動かせない。茶々丸もダメ。ミソギは無傷。詰みだな。

「・・・この私をここまでコケにするとはな。もういいさ、好きにしろ。だが私がやられても第二第三の私が・・・」

「いやいやいや、何言ってるのさ。だから僕はエヴァちゃんと戦うつもりはないって」

「ふん、どう言い繕っても同じだ。貴様のせいで私はこの学園から逃れられないんだ。15年も耐えて、ようやくきたチャンスだと思っていたのに・・・貴様は、それすらも貴様は・・・」

「ま、待ってってば！だから僕は別にエヴァちゃんの呪いを解くことには協力したいんだって！たしかに、こうなっちゃった以上ネギ君を差し出してお終いにするのは僕としてはちよつとできないけど、それでも僕にも協力できることはある」

「協力だと？はっ、そしてまたうまくいきそうな所で全てを台無しにして私をあざ笑うつもりか。趣味が悪いなミソギ、まさに悪魔だよお前は」

体が動かせないせいでミソギから顔をそむけることはできないが、できるだけ視界に収めないように努めた。そうしないと、悲しみが溢れてきそうだったから。

長い付き合いだったわけじゃないし、信頼に足る人物なわけでもない。だからこの悲しみは多分、同族のやつに裏切られたからだ。人外として扱われ、私と同じような苦勞してきたであろうミソギに、裏切られたからだ。

そういえば私も初めて会った時、こいつには同じようなことをした。だったらこいつも、今の私と同じような気分を味わったんだろうか。普段は飄々とした男だが、その心の中では傷を抱えながらも苦悩していたのだろうか。

そんな事を考えた時、視界の端で捉えていたミソギに動きがあった。地べたに膝をつき、手をつき、頭を下げ、まあ簡単にいえば土下座の状態になっていた。

「お、おい。なにやって・・・」

「ごめんなさい」

そして額を地につけたままミソギは言った。

「でも、ネギ君にはこれからの人生を有意義に生きて欲しいんだ。正義の魔法使いになるために頑張って欲しい。父親の功績で捕らえただけの闇の福音を、自分のミスで逃したなんてことになったら、ネギ君はすごく気にすると思う。それに、周りのネギ君への評価も一変してしまうかもしれない。こんなことは言いたくないけれど、立派な魔法使いを目指す身分で周りからの評価が良くないっていうのはすごくマイナスなことだと思う。だからネギ君を襲って呪いを解くのは勘弁して下さい」

「ふ、ふざけるな！そんな事は知らん！そうだったとしたって自由に生きることができるだけマシだろう！私は、十五年も、こんな場

所で・・・」

「でも！エヴァちゃんの呪いは僕が必ず解く。自分で言うのもなんだけど、僕は魔法が得意だ。サウザンドマスターに比肩できるくらい能力はあると思う。僕が絶対にエヴァちゃんの呪いを解くから、だからもう少しだけ待って欲しい」

そう言って顔を上げたミソギは、今まで見たことがないほど真剣な顔をしていた。

確かにこいつの魔法はすごい。どうやってやったのかわからないが言霊による相手の体の制御、現役魔法先生にも通用するほどの記憶消去魔法、私の一撃を受けてもその数瞬後にはほぼ無傷となっている回復力。見たことではないが攻撃魔法も素人ということはないだろう。魔法の才能は確かにある。だが・・・

「そんなもの、何の確証もない！あのジジイですら解けなかった呪いを、いくら貴様とはいえたやすく解けるとは思えん」

「解ける。簡単には無理かもしれないけど、解く自信はある」

「その自信の根拠はなんだ？ただ自分を過信してるだけなのだったら張り倒すぞ」

「・・・わかってる。ここまで来たらもう隠さない。ネギ君も寝てることだし、僕の秘密を教えるよ」

「秘密・・・？」

そこでふと体が軽くなったのを感じた。どうやら奴が制御魔法を解いたらしい。

茶々丸がすぐに寄ってきて武器を構えようとしていたが、目で制す奴の秘密とやらの興味が出了。攻撃するのはそれからでも遅くあるまい。どちらにしろ奴が此方と敵対する気なら解放はしなかっただろうしな。

私と茶々丸は黙ってミソギの言葉を待った。立ち上がったミソギは

何やらポケットに手を入れまさぐりつつ言葉を続けた。

「なんで僕がエヴァちゃんのことを知っていたんだと思う？」

「どっからか嗅ぎつけてきたんだろう、ハイエナのように」

「いやいやいや・・・僕がどうやってエヴァちゃんのことを知ったのか、そして協力しようと思ったのかは、何もエヴァちゃんが可愛かったからってだけじゃないんだ。勿論それもあるけどさ・・・お、あったあった」

そして奴がポケットから取り出したそれは――

「僕が君のことを知ったのは、サウザンドマスター、ナギ・スプリングフィールドに会い、君のことを聞いたからだ」

見間違えるはずもない、あのバカの、ナギの持っていた杖だった。

22話（後書き）

本当は今回でエヴァ編は終わらせるつもりだったんですが、かなり長くなってしまいそうだったんで次回に回します。

ポケットに杖入らないだろうって文句は、ミソギのポケットと彼の私的収納スペースを直通できる『とりよせバッグ』的な機能を持った魔法を使っただけで一つお願いします。

23話

「な、なぜ貴様がそれを持っている・・・」

自然と声が震えてしまう。あまりに突然のことに呆然とする私を尻目にミソギは話を続けた。

「僕が彼と出会ったのは今から何年前だったか・・・その頃、僕は彼の敵対していた組織で飼われていた悪魔だったんだ。僕が遣わされた時、ナギは一人で旅をしてたみたいだね。僕も何匹か部下を連れていったんだけど、そいつらは一瞬でぶっ倒されたんだ。でも僕は元からそれなりに力があつたからね、ある程度互角に戦えてたんだ」

話しながら、ミソギはだんだん遠い目となっていく。まるで懐かしい過去を思い出そうとしているかのよう。

「今にして思えば、あの時僕は初めて楽しいって思ったんだろうね。飼われてから僕がやった仕事なんてゴミみたいなものしかなかったし、実力が拮抗している相手と戦うのはすごく楽しかったな。まあそれはともかく、しばらく戦いが続いたた後、彼が言ったんだ

『ちょっと休憩にしないか?』

ってね。僕は驚いたさ。おいおい冗談だろ?こっからが本番じゃないか。どうせこのまま帰っても次の仕事はまたゴミ処理だ。だったらこのまま戦って殺されたほうがマシだ。そう反論したら、彼、なんて言ったと思う?

『俺がお前の呪いを解いてやるから、その後もう一回やろーぜ』

だって。僕はもうなんだか拍子抜けしちゃって、じゃあやってみたら？みたいな感じで好きにさせてたら本当に呪いを解いちゃってさ。僕は晴れて自由の身になれたわけだよ。いやほんと、さすがサウザンドマスターだよな」

確かに、ヤツならそれぐらいできるかもしれん・・・。

話を聞きながらあの無茶苦茶な男のことを思い出して苦笑した。

「それから半月ぐらいかな、今までお世話になった人たちにお礼参りに行くついでに、ナギと一緒に行動してたんだ。その時の話をすると単行本にして24巻ぐらいかかる超大作になっちゃうから割愛するとして、まあその後だよ。ナギは僕に、このあとはお前とは関係のない相手だからもう手伝わなくていい、好きに自由に生きてけよ、みたいなことを言ってくれたんだ。まあ僕としてはお礼参りしてただけだから手伝ってたつもりはなかったんだけど、そう言うならってことでそこで別れることになったんだ・・・もし、そこで別れなかったら、未来は変わってたのかもしれないね」

そこまで言った後、ミソギの表情が不意に曇った。

「おかしいと思ったんだよ。あいつが、もしものときは生まれてくる息子を頼む、なんて言うなんて。おまけに、息子が一人前になったら渡してくれ、なんて言っってこの杖までよこすしさ」

そう言っって杖を掲げるミソギ。

「自分で渡せ、って言っって流石に断ろうと思ったんだけどさ、あいつの表情が真剣だったから、思わず受け取っちゃったんだよね・・・

・今にして思えば、あいつは多分これから死ぬつもりだったんだ。
あの時そうと気づけてれば、絶対に一人になんかしなかったのに・
・」

「ミソギ、お前・・・・」

「間抜けにも僕がそれに気づけたのは、それからしばらくたって、ナギが死んだと噂になった時だ。僕は忘れてたんだ、ナギはデタラメだけど、それでも、なにかあったら死んでしまう、ただの人間だってことを。あいつは僕の恩人なのに、何もできずに死なせてしまった。いや、それどころか僕が何も考えずに杖を受け取ってしまったから、その分戦力が落ちたせいで死んでしまったのかもしれない」
「それは・・・・さすがに考え過ぎだろう」

「そうかもしれない。けどそうじゃないかもしれない。その疑念を僕は晴らすことができない・・・・」

「仮にそうだとしても、それはあいつが勝手に頼んだことで、貴様のせいではないだろう！」

思わず声を張り上げてしまう。普段の飄々とした表情からは想像でもできない、そんなミソギの沈痛な表情など見たくなかった。

「そう、僕は頼まれたんだ。ナギから、恩人から息子を頼むって。だったら僕はそれをしないといけない。だから僕はこうしてネギ君を傍でずっと見守っていなくちゃいけない。・・・・ああ、こう言うとなんか義務感でやってるとか思われちゃうからちゃんと言っておくよ。別に義務感からじゃなくて、僕がネギ君を好きだからやるんだよ。嫌いだったらとっと杖を渡しておさらばしてるさ」

それは、本当だろうか。こいつはいい加減に見えて意外と義理堅い、いや、不器用な所がある。

きっと、ネギのことを気に入っていないなくても側で仕えていただろう。そう思えるからこそ胸が傷んだ。

それではもはや、呪いのようなものではないか、と。

「ナギの後を継ぎたい、なんて大それた事を考えたこともあったんだけどね。残念ながら、僕はなんでナギが僕の元飼い主と戦っていたのかも、一体何と戦いに行って死んだのかも知らなかったから、彼の後を継ぐことはできなかった。けど、彼のやり残したことを何かできないかと考えたんだ。そのために、僕はナギと会話したことを一つ一つ思い出していった。そして・・・」

そこで一旦言葉を切ったミソギは、改めて私の方を向いた。

「エヴァちゃんのことを思い出したんだ。ナギが

『麻帆良に置いてきてそのまま子がいる。迎えにいけなくて申し訳ない』

みたいなことを言っていたのを思い出して、けど日本の麻帆良なんてなかなか行く機械がないから悩んでいた所に、ネギ君の修行の話がきたんだ。だからすごく驚いたし嬉しかった。絶対にこの機会にその子を迎えに行こうと思ったんだ。けど、調べれば調べるほどそれが難しく思えてきた。サウザンドマスターが無理やりかけた呪いなんて、僕に解けるだろうか。だからこそ、ネギ君を使ってでも、多少無理矢理な手でもいいから確実な方法で解こう。そう思っちゃったんだ」

やはりこいつは、死んだナギに報いることしか考えていない。先程こいつは言っていた。ナギと戦った時初めて楽しいと感じた、と。つまり、その組織とやらに飼われる前もろくな人生を送っていなかったということだろう。

わたしですら、忘れ去ったはずの遠い昔のことだが、吸血鬼になる

前の、楽しかったであろう日々はある。だが、こいつにはそれらない。だから、知らないんだ。誰かに命令されないと、何かに呪われていないと、どうやって生きていけばいいのかわからないんだ。だからこそ、ミソギはナギの頼みのために生きていく。そうしないと生きていけないから。

それは本当に生きているといえるのか？もしかしたら飼われていた時と同じなんじゃないか？それでは、あまりにも、報われない。ミソギも、ナギも。

私は、解放してやりたい。あまりにも不器用なこいつを、ナギの意図せぬ呪いから、解放してやりたい。そう思ってしまった。

「あれ？今の説明だと、エヴァちゃんの呪いを解く自信があることの説明にはならないな……。ええと、ナギとも互角ぐらいに戦えたから、きつと解けるって言いたかったんだけど、ははは、さっき途中で自信がないってばらしちゃったな。ごめん、本当は絶対の自信があるってわけじゃないんだ。けど、絶対に解くから、だから……。え？」

「もういい」

未だ釈明を続けるミソギを見てられなくて、思わず抱きしめてしまった。ふふ、身長が合わないから傍から見ると変に見えるだろうな。

「……えっと、エヴァちゃん？何これ、ご褒美……？」

「うるさい。黙っている」

「はい……」

そのまま数秒ほど抱きしめていたが、ふと我に返り恥ずかしくなった。

……ナニヲヤッテイルンダワタシハ。

「ちょ、うわっ！」

思わず突き飛ばしてしまった。

「呪いは必ず解いてもらうぞ！その坊やに頼らず自分で解くといったこと、せいぜい後悔するといい！楽しみに待っているからな、フハハハハ！……おい、茶々丸！行くぞ！」

「……はい、マスター」

奴の顔をまともに見れる気がなくて早口で結論だけ告げてとつと去ることにする。

茶々丸を連れて帰りながら、私はこれからについて考えてみた。あいつを解放するには、とりあえずナギの頼みをとつと済ませてしまふのがいいだろう。あの手の輩は無理に止めさせようとする反発するからな。

まずは私の呪いを解く事だ。これは絶対やってもらわんと困るな。次は、ええと、あの坊やをミソギの目から見一人前にして、杖を渡すことか？これについては、まあナギの息子だけあって素質はあるみたいだからな。私が鍛えてやればちよちよいのちよいだろう。本来であれば頼まれても人にモノを教えたりなぞせんが、まあ今回だけは大サービスだ。よかったな、坊や。

それが終わったら、あいつには坊やと離れて少し世界でも回ってもらうとするか。旅をすれば世界観も変わる。きっと奴も良い方向に変わってくれるだろう。

ああ、その頃には私の呪いも解け、晴れて自由の身となっているんだった。だったら共に旅をするのも悪くないかもしれないな。まあなんにせよ、だ。

「……面白くなってきたじゃないか」

「なにか言いましたか、マスター？」

「いや、何も」

23話（後書き）

今回で吸血鬼編は一応終わりになります。綺麗にまとめられてよかったです。

・・・と言いたいところですが、このままだと『あれ？今回シリアス？』と勘違いなさる方がいらっしゃるかもしれないので、蛇足かもしれませんがミソギ視点をもう一話入れようと思います。
それにしてもまさか茶番に丸々一話使ってしまうとは思わなかった・・・。

24話

「呪いは必ず解いてもらうぞ！その坊やに頼らず自分で解くといったこと、せいぜい後悔するといい！楽しみに待っているからな、フハハハハ！・・・おい、茶々丸！行くぞ！」

『完成』の代わりに『下劣な大道芸』エロティックピエロをもらっておけば良かったと思ってる、どうも俺です。

まあ『下劣な大道芸』ってどんな能力かわからないんだけどね。少なくとも女子校の教師にだけは持たせちゃいけない能力だろうさ。いやそんな事はどうでもいい。閑話休題。

そそくさと立ち去ってしまったエヴァちゃん達を俺は呆然と見送ることしか出来なかった。メタなことまで考えてしまった。だがそれも仕方ないだろう。なにせ！あの！エヴァちゃんが！俺に！抱きついてきたんだから！！

なんでだ？まさかアレか？俺の過去話で感動して好きになったか！？もしそうだとしたら・・・いや、さすがにちよつと申し訳ないと思うけど、まあラッキーってことで。

昨日の晩頑張って考えた甲斐があったぜ。そんなことより、とりあえずこの倒れてる神楽坂さんとネギ君を何とかしないと。

特に神楽坂さんは利用しちゃったからちゃんと後処理しとかないと後が面倒だ。

今回使った方法を今さらながら思い返してみる。

？タカミチの筆跡をある程度真似た手紙で神楽坂さん呼び出す。

？その待ち合わせ場所に茶々丸ちゃんを待機させておく。

？女子寮からその場所への通り道でネギ君を置いて茶々丸ちゃんの元へ。ネギ君はその場でエヴァちゃんとバトル開始。

？タカミチの元へと向かう途中の神楽坂さんがそれを見て、エヴァちゃんを止める。

？その後は流れで。

とまあこんな具合だけれど、こうして字面だけを見るとなんとも適当な作戦だと思えてくるな。

けど、実際に失敗する要素があるとしたらエヴァちゃんとネギ君の戦闘が予想より離れた場所で行われちゃった場合だけだ。

神楽坂さんの性格ならネギ君が変な女に襲われているのを見て見ぬふりはできないだろうし、ネギ君だって知り合いの女の子をそのまま戦わせるような子に育てた覚えはない。

きつとネギ君は神楽坂さんに帰るように言うだろうし、神楽坂さんは帰る前にすぐ近くにいる筈のタカミチに助けを求めに行くはずだ。そしてタカミチの代わりにその場にいた僕に助けを求め、それに応じた僕が違和感なくエヴァちゃんのもとにいける、と。そのあとはもう言うまでもないだろう。

うむ、我ながら完璧な作戦じゃないか。

とと、自画自賛するのもいいけどまずはやることをやっちゃおう。手始めに携帯を取り出してタカミチに連絡をとる。起きたことの報告と根回しのためだ。

『あれ？どうしたんだい、ミソギ君』

「どうも、夜分遅くにすいません。えっと、今さっきエヴァンジェリンに襲われました」

『なんだって！？それは本当かい！？』

「ええ。でも、うまく和解することができました。これで多分ネギ君が彼女に襲われることはないと思います」

『彼女を説得するなんて・・・どうやったんだい？』

「ああ、高畑さん。詳しい話はまた今度で。それよりもっと緊急のことがあります。神楽坂さんにネギ君とエヴァンジェリンが戦っているところを見られました」

『え、ええ！？』

「僕は離れた所で絡繰さんと戦っていたんですが、その隙にネギ君が襲われたらしく、それを目撃した神楽坂さんが僕に教えに来てくれました。今は意識を失っていますが、どうしましょう」

『え、ええと・・・』

電話の向こうで困っている声が聞こえる。まあまさかこんなに早く魔法がバレるとは思わなかっただろうな・・・っていや待て。

よく考えたら原作でも一日で、しかも放課後すぐぐらいにバレてたじゃんか。じゃあ向こうとしても想定範囲内なんじゃないのか？俺が今タカミチに連絡したのは、タカミチがいると思ってここにきた神楽坂さんをごまかしてもらうためだ。けど魔法の記憶を消すついでにそれも消してしまえばよかったんだから、別にわざわざ報告する必要はなかったかな。いきなり記憶を消しちゃえばよかったんだし。

・・・早まったか？

『・・・記憶は消さなくていいから、僕のところに連れてきてくれないかな？僕の家はわかる？』

「え、まあわかりますけど・・・」

と思っているとタカミチが予想外のことを言い出した。
記憶をなくさないでおく、ってのはともかく、タカミチの家に・・・？

現役女子中学生を中年男性教師の家に・・・？
え、犯罪じゃん。

なんてことは全く思ってませんよ。タカミチさんなら信頼できますからね。

という訳で意識を失っている神楽坂さんをおぶってタカミチの家に連れていき、ついでに一つ頼みごともおいた。タカミチは神楽坂さんと公園で待ち合わせをしたけど、場所を間違えたのか時間を間違えたのか、何故か会えなかった。とまあこういうふうに話をあわせて欲しいと。本当に快く引き受けてくれました。
こういうとき能力って便利。

その後、やっぱりいまだに意識の戻らないネギ君を連れて部屋に戻り（神楽坂さんをタカミチ家におくる時はネギ君を放置しっぱなしだったけど特に何もなくて良かった）、仕事初日の長い一日は終わ

った。まあ万事うまくいってよかったよかった。

24話（後書き）

グッドルーザー球磨川を読んでモチベが上がったので一気に書き上げました。

ので普段より短め。なんか久しぶり過ぎてよくわからんことに。

次回からは何話か日常？みたいなのを書きます。

その時にさよちゃん登場とか仮契約とかしたいですね。

25話

翌日、何事もなかったかのようにいつも通りの時間に起きたネギ君と共に学校に向かう。

随分と昨日の顛末を聞いたがっていたが、朝はそこまで余裕があるわけでもないので放課後になってから、とごまかしておいた。

どうやら今日はタカミチは休むらしい。明日から出張なのによいかそれで。

神楽坂さんをどうしたのか聞きたかったんだが、いないならしょうがない。

そう思って教室に行くと、神楽坂さんまで休みらしい。

・・・おい、あの中年変なことしてないよな？大丈夫だよな？

タカミチはいなかったが、特に何事も起きずに授業は終了した。
・・・まあ途中で木乃香ちゃんが

「今頃アスナは高畑先生の所におるのかなー」

とか言い出してクラスが騒然としたことはあったけども。

まさかクラスの半分近くが神楽坂さんを探そうと動き出すとは思わなかった。もし新田先生がたまたま廊下を通りかからなかったら二日目にして学級崩壊が起こっていたかもしれない。

いやほんと新田先生様様ですよ。

「おいミソギ、後で私の家まで来い」

帰りのHRが終わり、さて職員室に戻ろうかと言う所で今まで一貫してこちらを無視していたエヴァちゃんが突然話しかけてきた。

まあそれはいいんだけど、いくら何でも教室でその話し方はいかなものか……。呼び捨ての上に家に呼んでるからね。

瞬間的に教室内の話し声が2段階ほど小さくなったことから察するにみんな興味津々のようだ。

仕方ない。ここは変な茶々を入れられないように、自然な反応で受け流すとするか。

「どうしたのかな、マクダウェルさん。なにか大事な用事？」

「なんだその話し方は。気持ち悪いからいつも通りに戻せ」

駄目だこの子空気読んでくれない！

いつもならそれが可愛くもあるんだけど、今回ばかりはいただけないぜ。

教え子に手を出すロリコン野郎なんてマイナスイメージを持たれてたら、立つはずのフラグも立たなくなるでしょ？なので頼むから変なこと言わないでください。

だがそんな事を不機嫌そうな顔でこちらを見ているエヴァちゃんに直接言えるわけもなく、わかりました、とだけ小声で伝えておいた。どうやら目の前のこの御方は俺がなぜ普段と違った言葉遣いなのかを理解してないらしく、若干不思議そうにしながら、分かったならいい、と言って教室を去っていった。

そして教室に残されたのは、俺と、好奇心に満ち溢れた顔をしているクラスの子（ネギ君含む）だった。

・・・さて、なんて説明したものか・・・。

「ああ忘れていた。坊やも一緒に連れてこい。今日相手するのはそ
っちだ」

だが俺が説明を始めるより先に、言い忘れたことを言いに戻ってき
たエヴァちゃんの爆弾投下によってクラスは騒然となった。

といっても今の言葉に反応したのは何人かで、他の人（ネギ君含む）
は意味がわからなそうだが。純朴な子はいつまでもそのままでい
てください。

てかおいそこ、まさか3人で・・・いや、茶々丸さんもいるから4
人・・・！とか、さすがにネギ君はまだ早い！もうちょつと熟すの
を待つべきじゃないの！？とか言ってんじゃねーよ。反応に困るか
ら。

ああ、事情を（間違った方向に）理解してきた人たちから何やら冷
たい目線が・・・主に千雨ちゃんと夕映ちゃんから！

けど逆に、グッジョブ！みたいな目線を送ってくる人たちも・・・
主にハルナちゃんと柿崎さんが！

・・・え、これ俺が収集付けるの？

つらい戦いだった……。何度大嘘憑きを使おうと思ったことか……。

だが乗り越えた！なんとかみんなの誤解を解けた！この体になってから一番苦労したことかもしれないがまあ終わりよければすべてよしだ。

何人かが最後までニヤニヤしながら、わかってる、わかってるよ、みたいな雰囲気出してただけは納得が行かないがそれももういい。全て終わったのだ。

だがそもそもなんで俺はあんな必死になって否定してたんだろう。あのまま外堀埋めていつて最終的にエヴァちゃんと良い仲になっていく道もあったかもしれないのに。

普通の生徒に手を出すならともかく、エヴァちゃん相手なら事情を知ってる学園長とかが便宜を計ってくれるだろうから多分捕まる心配もないしね。

そもそもハーレムなんて現実味のないものより、目の前にいるエヴァちゃんを愛でた方が何倍もいいんじゃないだろうか。今ならもなく茶々丸ちゃんもついてくるだろうし。

……。あれ？俺疲れ損？

「あれ？どうかしましたかミソギさん？なにか悲しそうですけど……」

「いや、なんでもないよネギ君。ただちょっとこれからの人生について考えていてね」

「はあ……」

不思議な顔をされてしまった。

さて、まあどうでもいい考え事はこれくらいにしておこう。

今僕はネギ君を連れてエヴァちゃんの家に向かっている。理由はわからないがネギ君を連れてこいとの要望だったのでおとなしく従う。

もつともネギ君はエヴァちゃんを単なるクラスの一員としか思っていないのだが。まさか彼女が昨日僕達を襲った恐ろしい吸血鬼だと知ったらどんな反応をするだろうか。

まあ反応が楽しみなので誤解を解く事無く連れて行くが。こうしておけば驚くネギ君と呆れるエヴァちゃんですぐ2倍楽しめること間違いなしだ。

とまあそんなこんなでエヴァちゃん宅に到着。ノックをしてから中に入ると、制服からいつものゴスロリ系？みたいな服に着替えたエヴァちゃんが出迎えてくれた。

言われるがまま席につき、茶々丸ちゃんが出してくれたお茶（初めて茶々丸ちゃん自ら入れてくれたお茶が飲めた！）を一口すすった所でエヴァちゃんが話を始めた。

「何だ、ずいぶん遅かったな」

「まあ色々と時間がかかってね……」

主に君のせいだね！

「ああそうか。クク、なかなか面白い見世物だったぞ。私の前でもアレくらい無様な姿を見せられると愉快なのだな」

「……え？」

「それにしてもあそこまで必死に否定するとは意外だったな。さすがのお前も教え子に手を出したと噂されるのはまずいのか？」

「ちょ、ちよつとまって。……な、なんでそれを？」

「なんでってお前……」

混乱する僕に、呆れた風なエヴァちゃんは、ため息を一つ付いてから教えてくれた。

「あんなに面白い状況にしたいって私がそのまま帰ると思ったのか？
少し離れて見ていたに決まってるだろ」

確信犯だったよこの子！

「まあそんなことはどうでもいい。本題に入るとするか。おい坊や」
「えっと、僕のことですか？エヴァンジェリンさん」

「お前以外に誰がいるんだ。・・・まあいい、お前は多分それなりに素質がある。鍛えればすぐに一人前になれるだろう」

「え？えっと、それってどういう・・・」

ネギ君は話についていけずに混乱してるな。

まあ当然だろう。なにせまだエヴァちゃんのことを一般生徒だと思
っているから、魔法の話をしてるなんて思わないだろう。しかも妙
に偉そうだし。

「あの、ミソギさん。エヴァンジェリンさんは一体何の話を・・・」

とうとう俺に振ってきた。仕方ない、少しヒントを出してあげよう。

「エヴァちゃんは魔法の話をしてるんだよ」

「え！？ま、魔法！？魔法を知ってるんですか！？」

お、食いついた。

が、代わりにエヴァちゃんがげんなりした表情をとった。

「おいミソギ、こいつまさか私のことを・・・」

「あんまり人の個人情報をしやべるのもよくないかと思ったから、
僕は何も言ってないよ」

「じゃあこいつは気がついてないのか・・・はあ」

仕方ない、といった風に簡潔に説明を始めるエヴァちゃん。

「お前、昨日とその数日前に吸血鬼に襲われただろ。アレ、私だよ」
「え、ええええええええええ！？」

お、いい反応。

目を丸くして驚くネギ君を見て黙っていた価値はあったと確信する。
が、

「それで、お前に才能がありそうだから、私がそれを鍛えてやろう
と言ってるんだよ」

「ええええええええええええ！？」

二回目のネギ君の驚きの声を堪能する心の余裕はなかった。

なぜなら、ボクもネギ君に負けないくらいの衝撃を受けていたからだ。

・・・ネギ君を鍛える？

原作だと、それなりに仲良くなった後で、更にあの厳しい試練を乗り越えてようやく鍛えてあげたネギ君を、ここではこんなに簡単に？
待て、待ってくれ。確かにネギ君は頑張ったかもしれないけど、そんなに評価が急上昇するほどか？原作でも結構頑張ってただろ。

それなのになんでこんなに評価が、鍛えてもいいと思うほどに上がった？

考えられることは一つしかない。考えたくないが、おそらく俺が介入することによって何らかのバタフライエフェクトが働いた結果・・・

ネギ君がエヴァちゃんの何らかの琴線に触れてフラグを立てた。

この段階で原作より好感度が上がるなんて、それぐらいしか思いつかない。頑張って戦う姿にナギさんの面影を見たのかもしれない。なんにせよ、エヴァちゃんが原作とは違った感情をネギ君に寄せ、鍛えてあげようと思ったんだ。これが好意でなくてなんなのか。

・・・え？俺は？

いや、まあね。フラグが立たないのは別に仕方ないと思うんだ。だから別にそれはいいんだ。

けどさ、頑張ってる人の横からこう、何もしてない人がかつさらっていくのはさ、なんていうか・・・

「理不尽だ・・・」

俺が小さく呟いた声は誰にも拾われることなく消えていった。

25話（後書き）

今週のネギま！のエヴァちゃんの可愛さでモチベが上がり一気に書き上げました。

ただししばらくは忙しくなるので今回や前回のようにモチベがよつぽど上がらない限り更新は少し遅れると思います。具体的には3月中旬ぐらいまで。

けどこっちももう一つのも更新が遅れることはあっても辞めるつもりはないので最後までお付き合いしていただければ幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4568t/>

魔法先生と王嘘憑き

2012年1月13日01時51分発行